

三木市

加佐山城跡・慈眼寺山城跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII—

1995.3

兵庫県教育委員会

三木市

かさやまじょうあと

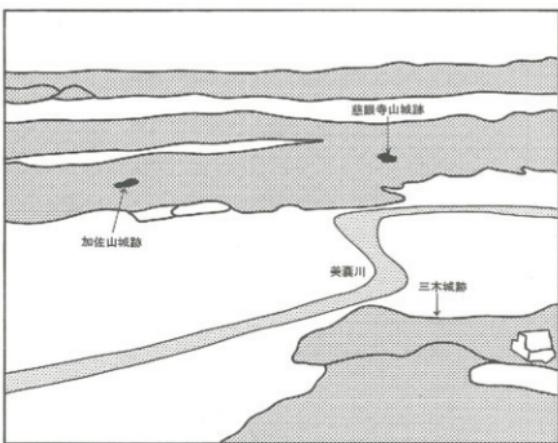
じげんじやまじょうあと

加佐山城跡・慈眼寺山城跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII—



三木城・加佐山城跡・慈眼寺山城跡（南西から）





加佐山城跡主曲輪南側土壘断面



加佐山城跡主曲輪北側土壘断面



加佐山城跡主曲輪西側土壘断面

例　　言

1. 本書は山陽自動車（神戸～三木）建設に伴い発掘調査を実施した、加佐山城跡・加佐古墳群3・4号墳（三木市加佐字湯谷）、慈眼寺山城跡（三木市久留美）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は日本道路公団の委託を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成3年度・4年度の2年にわたって実施した。
4. 整理作業は平成6年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
5. 遺跡の測量は国土座標（第V系）を基準とした。図面中のX・Y座標は国土座標であり、方位は座標北である。また、標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とした海拔高度である。
6. 本書の編集は多賀茂治がおこない、執筆は多賀・山上雅弘・長浜誠司・仁尾一人（以上兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所）・小網 豊（三木市教育委員会）がおこなった。各執筆分担は目次に示したとおりである。
7. 本書に掲載した君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡の遺物・遺構の図面は、発掘調査を実施した三木市教育委員会の御好意により提供していただいた。
8. 本書に使用した地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図と三木市発行の2千5百分の1都市計画図である。
9. 本書図版1に使用した航空写真は国土地理院撮影のものである。
10. 発掘調査で得た遺物・図面・写真是兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において保管している。
11. 発掘調査および整理作業にあたっては、下記の諸氏にご指導、ご協力いただいた。記して感謝の意を表します。（敬称略・順不同）
村田修三・北垣聰一郎・宮田逸民・毛利哲夫・松村正和・小網 豊・中井 均
多田暢久・高岡 徹

本文目次

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置.....	(多賀)	1
第2節 調査に至る経緯.....	(山上)	2
第3節 調査の経過.....	(多賀)	4
第4節 整理作業.....	(多賀)	5

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境.....	(多賀)	6
第2節 歴史的環境.....	(多賀)	7

第3章 加佐山城跡の調査

第1節 遺跡の概要.....	(多賀)	9
第2節 主曲輪.....	(多賀)	15
第3節 A曲輪.....	(多賀)	19
第4節 B曲輪.....	(多賀)	23
第5節 腰曲輪.....	(多賀)	24
第6節 横堀.....	(多賀)	24
第7節 主曲輪土塁下層の遺構.....	(多賀)	26
第8節 遺物.....	(多賀)	27
第9節 加佐山城跡の土量計算.....	(山上)	28
第10節 小結.....	(多賀)	32

第4章 慈眼寺山城跡の調査

第1節 遺跡の概要.....	(仁尾)	33
第2節 主曲輪.....	(仁尾)	38
第3節 南側曲輪.....	(仁尾)	41
第4節 横堀.....	(仁尾)	43
第5節 遺物.....	(長浜)	44
第6節 小結.....	(仁尾)	44

第5章 加佐古墳群3・4号墳の調査

第1節 遺跡の概要.....	(多賀)	47
第2節 3号墳.....	(多賀)	48
第3節 4号墳.....	(多賀)	49
第4節 遺物.....	(多賀)	49
第5節 小結.....	(多賀)	49

第6章 三木城包囲の付城群の調査

第1節 付城群の遺構.....	(小網)	56
第2節 付城群の遺物.....	(山上)	60
第7章 三木城包囲の付城群について	(山上)	64

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1
第2図 三木城付城群分布図	3
第3図 加佐山城跡・慈眼寺山城跡・加佐古墳群の位置	4
第4図 加佐山城跡・加佐古墳群調査位置	9
第5図 加佐山城跡調査前測量図	10
第6図 加佐山城跡縦張図	11
第7図 加佐山城跡測量図	12
第8図 加佐山城跡断面図	13
第9図 加佐山城跡盛土撤去後測量図	14
第10図 加佐山城跡主曲輪	16
第11図 加佐山城跡主曲輪土壘断面図	17
第12図 加佐山城跡主曲輪虎口	18
第13図 加佐山城跡A曲輪	20
第14図 加佐山城跡A曲輪断面図	21
第15図 加佐山城跡B曲輪虎口	22
第16図 加佐山城跡B曲輪	23
第17図 加佐山城跡腰曲輪	24
第18図 加佐山城跡横堀内堆積土断面図	25
第19図 加佐山城跡盛土下層SK01	26
第20図 加佐山城跡盛土下層SK02	27
第21図 加佐山城跡遺物	27
第22図 加佐山城跡切り盛り範囲図	30
第23図 加佐山城跡標準断面図	31
第24図 慈眼寺山城跡調査前測量図	33
第25図 慈眼寺山城跡調査位置	34
第26図 慈眼寺山城跡調査前測量図	35
第27図 慈眼寺山城跡測量図	36
第28図 慈眼寺山城跡断面図	37
第29図 慈眼寺山城跡主曲輪	39
第30図 慈眼寺山城跡主曲輪礎石建物	40
第31図 慈眼寺山城跡南側曲輪	41
第32図 慈眼寺山城跡主曲輪周辺部	42
第33図 慈眼寺山城跡横堀断面図	43
第34図 慈眼寺山城跡出土石製品	45
第35図 慈眼寺山城跡調査後縄張図	46
第36図 加佐古墳群分布図	48
第37図 加佐古墳群3・4号墳調査前測量図	50
第38図 加佐古墳群3・4号墳調査後測量図	51
第39図 加佐古墳群3号墳第1埋葬施設	52
第40図 加佐古墳群3号墳第2埋葬施設	53
第41図 加佐古墳群4号墳第1埋葬施設	54
第42図 加佐古墳群4号墳SK01	55
第43図 加佐古墳群出土遺物	55
第44図 君ヶ峰城測量図	57
第45図 小林八幡神社遺跡測量図	59
第46図 小林八幡神社遺跡調査区測量図	61
第47図 君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡出土遺物	63

図版目次

巻首図版

- 1 加佐山城跡・慈眼寺山城跡 遠景
- 2 加佐山城跡 土壘断面

写真図版

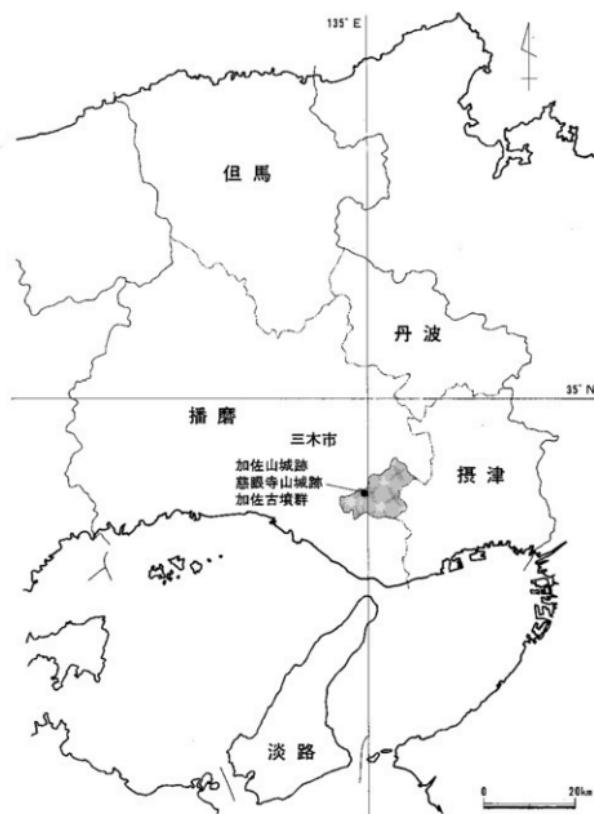
- 1 三木周辺航空写真
- 2 加佐山城跡・慈眼寺山城跡遠景
- 3 加佐山城跡・慈眼寺山城跡遠景
- 4 加佐山城跡調査前
- 5 加佐山城跡調査前
- 6 加佐山城跡全景
- 7 加佐山城跡全景
- 8 加佐山城跡主曲輪
- 9 加佐山城跡主曲輪
- 10 加佐山城跡土壘撤去後
- 11 加佐山城跡土壘撤去後・土壘断面
- 12 加佐山城跡土壘断面
- 13 加佐山城跡土壘断面
- 14 加佐山城跡A曲輪
- 15 加佐山城跡A曲輪
- 16 加佐山城跡B曲輪
- 17 加佐山城跡B曲輪
- 18 加佐山城跡横堀
- 19 加佐山城跡横堀・土壘下層結構
- 20 慈眼寺山城跡調査前
- 21 慈眼寺山城跡全景
- 22 慈眼寺山城跡全景
- 23 慈眼寺山城跡全景
- 24 慈眼寺山城跡調査前
- 25 慈眼寺山城跡主曲輪・遠景
- 26 慈眼寺山城跡全景
- 27 慈眼寺山城跡主曲輪
- 28 慈眼寺山城跡主曲輪・南側曲輪
- 29 慈眼寺山城跡主曲輪・横堀
- 30 慈眼寺山城跡礎石建物跡
- 31 慈眼寺山城跡横堀断面
- 32 加佐古墳群調査前全景
- 33 加佐古墳群調査後全景
- 34 加佐古墳群3号墳
- 35 加佐古墳群4号墳
- 36 君ヶ峰城
- 37 小林八幡神社遺跡
- 38 小林八幡神社遺跡
- 39 小林八幡神社遺跡
- 40 加佐山城跡・慈眼寺山城跡・加佐古墳群出土遺物
- 41 君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡出土遺物1
- 42 君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡出土遺物2

第1章 はじめに

第1節 遺跡の位置

兵庫県は日本海から瀬戸内海にまたがる広い県域をもつ。近世以前の旧分国では播磨、攝津、但馬、丹波、淡路の5国を含む。加佐山城跡、慈眼寺山城跡のある三木市は県の南東部に位置し、南は県庁所在地の神戸市と接する。旧分国では播磨国美嚢郡に所属する。

美嚢郡は瀬戸内海に注ぐ加古川の支流、美嚢川の流域にあたり、三木はその西端にある。現在三木市は全国屈指の刃物の生産地であり、また近年は神戸のベッドタウンとして宅地開発が盛んにおこなわれている。



第1図 遺跡の位置

第2節 調査に至る経緯

1. 加佐山城跡

加佐山城跡は新たに調査で発見された城跡である。当城跡を含めて山陽自動車道（神戸～三木）区間の建設事業に伴う調査は昭和63年度の分布調査から本格的に開始された。しかし、この時点では本城跡地点は古墳状の隆起が多数認められるとして、古墳群の立地を想定していた。このため、とりあえずNo.34地点と仮称し確認調査を実施することとなった。確認調査は平成2年に実施され、トレンチ（1・2）は第4図のように設定した。あくまで、古墳群の範囲や様相をつかむための調査であったため、その範囲は古墳状隆起地形周辺のみを対象とする箇所にとどまり、西に延びる尾根は範囲に入っていない。

確認調査の結果、古墳状の隆起地形のうち標高138m地点の2箇所で、土壘の盛土と思われる断面が確認された。そして、この断面周辺を中心に詳細に地形を観察すると、尾根上の広い範囲が平坦地となり、土壘がこの平坦地の一部を周囲に取り巻いているように観察できた。このような立地は城郭の曲輪に類似例が認められるもので、古墳では考えられない。一方土壘で囲まれた外側にも平坦地は広がっていたが、現状地形では区画施設は認められなかった。しかし、トレンチの南側、平坦地の縁にあたる部分で、溝を1本検出した。このためこれが何らかの区画の痕跡ではないかと判断し、この平坦地も曲輪と考えた。さらに樹木の伐採後、地形観察を行ってみると君ヶ峰城の地形に類似していることが観察され、三木城を包囲した織豊系の付城ではないかと考えられた。以上からNo.34地点の遺跡名は播磨鑑の記述に「加佐山上」に付城があったとすることや、加佐山という地名から加佐山城跡とした。

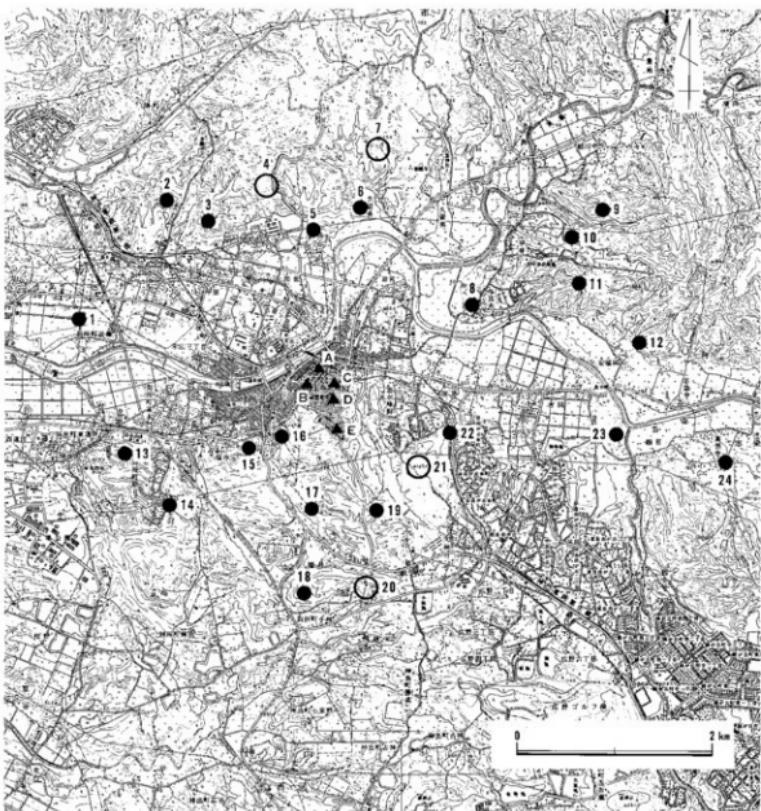
2. 慈眼寺山城跡

当城は既に周知された城跡であった。現状地形を観察した縄張り図も作成されている。

調査経緯は加佐山城跡と同様である。但し、調査の時点では、開発範囲外であったが、その後、麓の慈眼寺の祭る「水神」への参詣道を道路公團が設置することとなり、急速確認調査を行った。この「水神」というのは曲輪内に鎮座する石碑で、ここへの参詣道確保のために城跡の一部を破壊しなければならない皮肉な結果となった。確認調査は加佐山城跡と同年度にNo.304地点として行った。調査の結果、山頂部の曲輪周囲には横堀が巡ることが判明した他、曲輪の造成痕跡などを検出した。また官田逸民氏より、調査成果を元に地形観察の結果、北及び東斜面に階段状遺構が存在すること、立地が君ヶ峰城に類似しているなどの点について御教示を受けた。

3. 付城としての位置付けについて

確認調査当初、2つの山城は城郭遺構の中でも特殊な構造をもつと考えられた。通常の中世山城であれば①平野部への突端の山に立地する。②曲輪を重ねる構造をとる。③曲輪間の段差が付き易い尾根地形を選ぶ。④尾根続きは堀切などで遮断するか、大きな段差で防ぐ。などの特徴がある。今回の2つの城はこれらの特徴と比較すると異質なものである。しかし、遺構には土壘・横堀を持ち、主曲輪と思われる部分は明確に防衛しているなど城郭の構造を兼ね備えていることは疑いがない。そこで確認調査の段階では検証の進みつつあった織豊系の付城・陣城の構造に当てはまる可能性が強いと考え、三木城包囲の付城群の1つという仮説をたてた。



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 烏町村河原 | 7 悲眼寺山城跡 | 13 道田村法界寺の上 | 19 二位谷奥 |
| 2 大村山ノ上 | 8 与呂木村上野 | 14 大塚 | 20 小林八幡神社遺跡 |
| 3 平田村山ノ上 | 9 細川莊中村西村 | 15 羽場山上 | 21 君ヶ峰城 |
| 4 加佐山城跡 | 10 平井村中村間ノ山 | 16 三谷ノ上 | 22 宿原村ノ上 |
| 5 跡部村山ノ下 | 11 平井山ノ上 | 17 八幡谷ノ上明石道 | 23 吉田村ノ上 |
| 6 久留美村大家内谷上 | 12 安福田村ノ上 | 18 横山 | 24 高男寺村 |

三木城

A 上ノ丸 B 南櫓 C 新城 D 鷹尾山城 E 宮ノ上ノ要害

付城の位置・名称は下記の文献に拠る。ただし発掘調査がおこなわれている城（4・7・20・21）は遺跡名に変更している。

宮田逸民 「織田政権と三木城包囲網一秀吉による「三木の干殺し」の検証一」
『歴史と神戸』第36巻第6号 1991年

第2図 三木城付城群分布図

第3節 調査の経過

1. 加佐山城跡・加佐古墳群

加佐山城跡の調査は平成3、4年の2年度にわたりて実施した。調査面積は総計6,745m²である。平成3年12月～平成4年3月まで第1次の調査を実施し、翌平成4年8月～平成4年11月まで第2次の調査をおこなった。

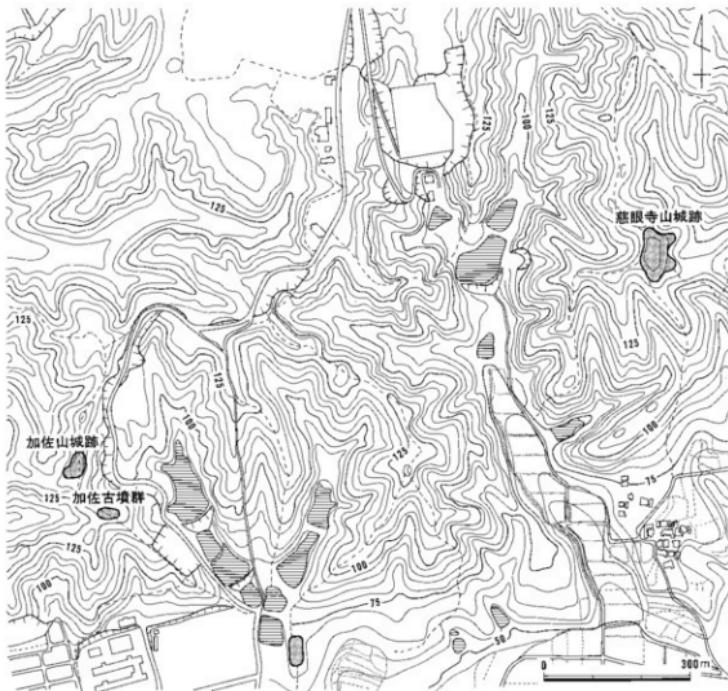
第1次調査

平成2年度におこなった確認調査の結果をうけて、3,455m²について全面調査を実施した。また同時に全面調査範囲の西側にも城が広がる可能性があったため、この部分について確認調査を実施した。

全面調査においては、主曲輪・腰曲輪・A曲輪・B曲輪を調査し、確認調査では西側にも横堀・土塁が伸びることを確認した。

第2次調査

平成3年度の確認調査の結果をうけて、前年度調査区の西側3,290m²について全面調査を実施した。またインター・チェンジの計画変更により、調査区の南側に続く尾根も工事範囲内にはいったため、この部分についても確認調査を実施した。



第3図 加佐山城跡・慈眼寺山城跡・加佐古墳群の位置

全面調査においては、西側の横堀を調査した。また確認調査の結果、南側の尾根には城郭関連施設は認められなかったが、古墳 2 基（加佐古墳群 3・4 号墳）が確認された。このため古墳の全面調査も追加で実施することになり、800m²について全面調査を実施した。

2. 慈眼寺山城跡

慈眼寺山城跡の調査は、平成 2 年度の確認調査の結果をうけて 3,000m²について平成 4 年 7 月～11 月まで実施した。

3. 調査の方法

発掘調査に先立ち、周辺部を含めた広い範囲について地形測量（縮尺 250 分の 1）をおこなった。その後表土を機械で掘削し、統いて人力掘削によって幅 50cm の先行トレンチを掘削した。このトレンチの断面観察によって盛土・流土を識別し、平面的な遺構検出につとめた。検出された遺構は写真・図面によつて記録し、また調査後の地形測量（縮尺 100 分の 1）をおこなった。盛土をともなう遺構は、記録作業終了後に盛土部分を撤去し旧地形の復元をおこなった。なお遺跡の測量は空中写真測量によって実施した。

4. 調査の体制

各遺跡の各年度毎の調査担当は以下のとおりである。なお担当者の所属はすべて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所である。

加佐山城跡・加佐古墳群

平成 2 年度確認調査 主査 大平 茂 技術職員 山上雅弘
平成 3 年度全面調査 主任 村上泰樹 技術職員 多賀茂治 臨時職員 西原雄大
平成 4 年度全面調査 技術職員 高瀬一嘉 多賀茂治

慈眼寺山城跡

平成 2 年度確認調査 主査 大平 茂 技術職員 山上雅弘
平成 4 年度全面調査 調査専門員 西口和彦 主査 森内秀造 臨時職員 仁尾一人

なお各調査を通して以下の方々が、現場補助員・室内作業員として参加した。

高島知恵子・五百歳道代・舟坂好子・大田八重子・足立敬介・八田久仁子・向井裕子・池田征弘

第 4 節 整理作業

整理作業は発掘調査終了後、平成 6 年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所においておこなった。遺物の実測・遺構図面の整理・トレイス等、報告書刊行までの一連の作業をおこなった。

整理の体制は以下のとおりである。

担当者 技術職員 山上雅弘 多賀茂治 仁尾一人
嘱託員 古谷章子

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

1. 地形

加佐山城跡・慈眼寺山城跡は美濃川右岸の洪積台地上に築かれている。この台地は大阪層群からなり、標高100m～200mほどであり、東から西へとその高さを減する。台地は三木市・小野市・神戸市西区など加古川以東の東播磨地域にひろがる。台地は美濃川などの加古川水系によって浸食され急な傾斜をもつ段丘を形成する。また小規模な河川による開析作用も活発であり幅狭く深い開析谷が形成され、その多くが現在溜池として利用されている。尾根は平坦であり、古くから里道として利用されていた。

加佐山城跡・慈眼寺山城跡などの三木城攻めの際に築かれた付城群は、いずれも美濃川をはさんでこの台地のへりに位置している。また、その攻撃対象となった三木城も、この台地のへりを利用し、深い谷と美濃川によって形成された急な段丘崖をとりこんだものであった。

2. 植生

植生は現在アカマツの二次林であるが、下草刈りなどは行われておらずかなり荒れている。また尾根上は表土がかなり薄く、樹木の成育は良くない。地元の古の話によれば、かつて里山として樹木が利用されていた時代は、アカマツの密度は現在よりもはるかに薄く、ハゲ山に近い状態であったそうである。

本来はカシなどの常緑広葉樹によっておおわれていたのであろうが、この地域は奈良時代から窯業生産が盛んであり、また薪炭の用に伐採が進み、現在のような代償植生に到ったと考えられる。アカマツ二次林への完全な転換の時期がいつかは明確ではないが、加佐山城跡・慈眼寺山城跡が築かれた16世紀後半の植生も現在の状況に近いものであったのだろう。

3. 土地利用

三木の平地部は美濃川によって形成された沖積地と段丘からなる。沖積地は弥生時代以来、水田耕作に利用され、微高地は居住域として利用されてきた。段丘に開発の手がはいるのは古墳時代以降であり、当初は墓地として、そして古墳時代後期から飛鳥時代にかけては居住域として利用されている。

土地利用に一大転機をむかえるのは奈良時代以降であり、台地の開析谷に須恵器生産の窯が築かれ、段丘上にはそれに関連する施設が作られる。しかし段丘が農業生産領域に組み込まれるのは、開析谷に溜池が築かれる中世以降である。また三木に別所氏が城を築いて以来、その麓に町屋が形成されてゆき、三木城廃城後も発展を続け現在の市街地の基礎となっている。

4. 交通

三木は兵庫県唯一の河川である加古川水系にあり、河川交通によって瀬戸内海と直結している。また陸上交通では、播磨・摂津を結ぶ有馬街道や明石から台地上の道を経て三木へ至る道、須磨から妙法寺を経て志染に至る道が主要な街道であった。また、周辺に広がる台地はさほど急峻なものではなく、尾根伝いに北方の小野へ抜ける道や、東方の武庫川流域に抜ける道として利用されていた。

このような発達した交通網が、中世において別所氏の東播磨支配を可能にした要因であり、近世における刃物生産の拠点としての栄を支えていたのである。

第2節 歴史的環境

1. 原始～古代

三木市域における人間の活動は少なくとも縄文時代に遡る。縄文・弥生時代の遺跡の状況は未だ不明な点が多いが、近年遺跡の調査例が増えつつある。美嚢川流域の西ヶ原遺跡では弥生時代後期の集落が調査されている。また鳥町の年ノ神遺跡では丘陵上で弥生時代中期から後期の集落が調査されている。この他、与呂木遺跡や御坂遺跡でも弥生時代の集落が調査されている。

古墳時代になると、台地上および斜面には多くの古墳が築かれる。最も古墳が集中するのは美嚢川と加古川の合流点に近い地域であり、中期から後期に至る古墳が数多く築かれている。鳥町の年ノ神6号墳は中期の方墳であるが、副葬品として短甲などが出土している。

集落は西ヶ原遺跡でわずかにその内容が判明するだけであるが、弥生時代以来の集落が継続していたようである。

三木で特筆すべきことは奈良時代以降の窯業生産の活発化である。とくに久留美はその中心であり、谷毎に窯が築かれている。窯業生産が最盛期をむかえるのは12世紀代であり、尊勝寺など院関係の寺院・邸宅に供給する瓦の生産が盛んに行われている。

2. 中世以降

中世以降の状況を語る考古資料は多くない。播磨は室町時代初頭から、赤松氏が守護を務めている。赤松氏は満祐による將軍義教の殺害（嘉吉の乱）により但馬守護山名氏にその座を奪われるまで、守護の地位にあった。その後応仁の乱の頃に、赤松氏は守護として播磨に復帰するが、真弓峰の合戦で但馬の山名氏に敗れた後、その実権は次第に失われてゆく。守護家に代わり在地の実権を握ったのは備前三石の浦上氏、播磨御着の小寺氏、そして三木の別所氏などの有力被官たちであった。

別所氏が三木を含む東播磨に現れるのは15世紀末、別所割治の時である。その拠点としての三木城の築城はこの時期にまで遡るのであろうが、推測の域を出るものではない。三木城は現在上の丸公園などがある美嚢川左岸の段丘上にあり、急傾斜な段丘崖と開析谷を取り込んで築かれている⁽¹⁾。城は一ノ郭、二ノ郭、三ノ郭、新城、鷹尾山城、宮ノ上構から構成される。城跡の発掘調査は三木市教育委員会によっておこなわれており、一ノ郭では礫石や炭が出土し、二ノ郭では大甕群や建物跡などが調査されている。しかし城の遺構は現地形からはほとんど認ることができなくなっている。唯一鷹尾山城の一部が原状をとどめる程度である。

3. 織田信長による播磨攻略

天下統一を目指す織田信長は、毛利氏との対決に先立ち、まず中国と畿内の接点播磨の攻略にとりかかった。信長は播磨の諸豪族に軍事力による威圧をかけ、その傘下に入ることを要求する。播磨の諸豪族の中で最大の勢力を持つ別所氏の動向は、織田氏による播磨支配、さらにその延長上にある毛利氏との対決の先行きに大きな影響を与えるものであった⁽²⁾。

別所氏の当主は長治であった。長治は他の諸豪族とともに、信長の支配下に入ることを承諾する。しかし、これに反対する者も多く、別所一族内でも意見の対立があった。結局別所長治は、毛利氏や本願寺の勢力と結んで織田信長に対抗する道を選択するに至る。

天正 6（1578）年 5 月、織田氏は播磨における閉塞状況を打破するために、織田信忠に別所氏の居城三木城の攻略にあたらせた。別所方は毛利氏に援軍をあおぐとともに、東播の小豪族と連携して防御をかためた。織田軍は要害三木城にこもる別所氏を孤立させるため、三木城を包囲し外部との接触を断つ作戦に出た。またこれと並行して神吉城・志方城（加古川市）など別所氏と連携する諸城の攻略を進めた。その後摂津有岡城（伊丹市）の荒木村重が信長に反旗を翻し、その領内の花隈から丹生山・淡河（神戸市）を経由して毛利氏からの食糧の補給がおこなわれるなどしたために、戦況は膠着状態に陥った。

戦況が動いたのは翌天正 7 年（1579）年、花隈—丹生山—淡河という輸送ルートを断つために、織田軍が丹生山・淡河城を陥落させてからである。重要な輸送ルートを失った別所氏と毛利氏は、魚住（明石市）に食糧を荷揚げして三木城へ運び込もうとした。これに対して織田軍は、三木城の包囲網をさらに緊密にして、これを防ぐ作戦に出る。このような状況の中で別所軍と毛利軍は織田方の平田の付城を攻撃し、その隙に食糧を城内に運び込もうとするが結果は織田方の勝利におわり、大きな被害を受けた別所方はこれ以後積極的な攻勢に出ることなく、防戦一方となる。

織田軍はこれを機に三木城の包囲網を狹め城内の疲弊を待った。三木城内では食糧が尽き、餓死者も出るなど敗色が濃厚となってきた。翌天正 8 年（1580）年 1 月、城主長治が自刃し、三木城は開城した。ここに 1 年 8 ヶ月にわたる三木合戦は終わり、東播磨は織田氏の支配下に入る。なお後述するがこの三木合戦の期間を通じて織田方は三木城を封領・監視するための付城を築いている。加佐山城跡・慈眼寺山城跡もそのひとつである。付城群の遺構については最終章において詳説している。

4. その後の三木

三木城は別所氏没落後しばらくは織豊政権のもとで東播磨支配の拠点となったが、その後庵城となり、政治的支配の拠点としての地位を失う。近世を通じて三木は鐵治の町としての榮えを取り戻し、屈指の刃物生産地として現在に至っている。

註

- (1) 三木城の遺構の記述は下記文献に従った。曲輪の名称は第 2 図の分布図と異なるが、これは第 2 図における名称が宮田逸民氏のものに従っているためである。
兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』1982 年
- (2) 三木合戦の経過については下記文献の記述に従った。
今井林太郎「第 1 章第 2 節 3 別所長治の反乱」『兵庫県史』第 3 卷 pp.677~684 1978 年

第3章 加佐山城跡の調査

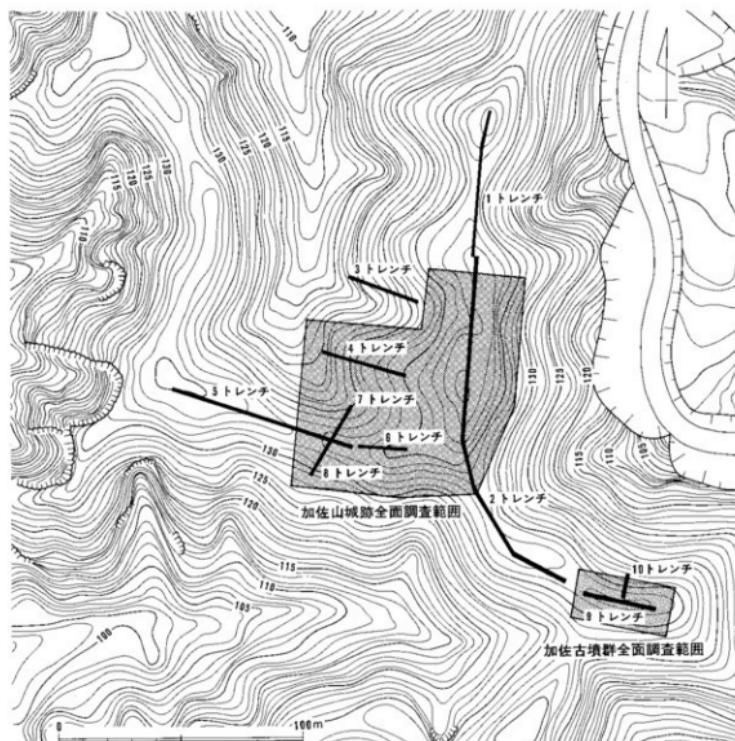
第1節 遺跡の概要

1. 城の立地

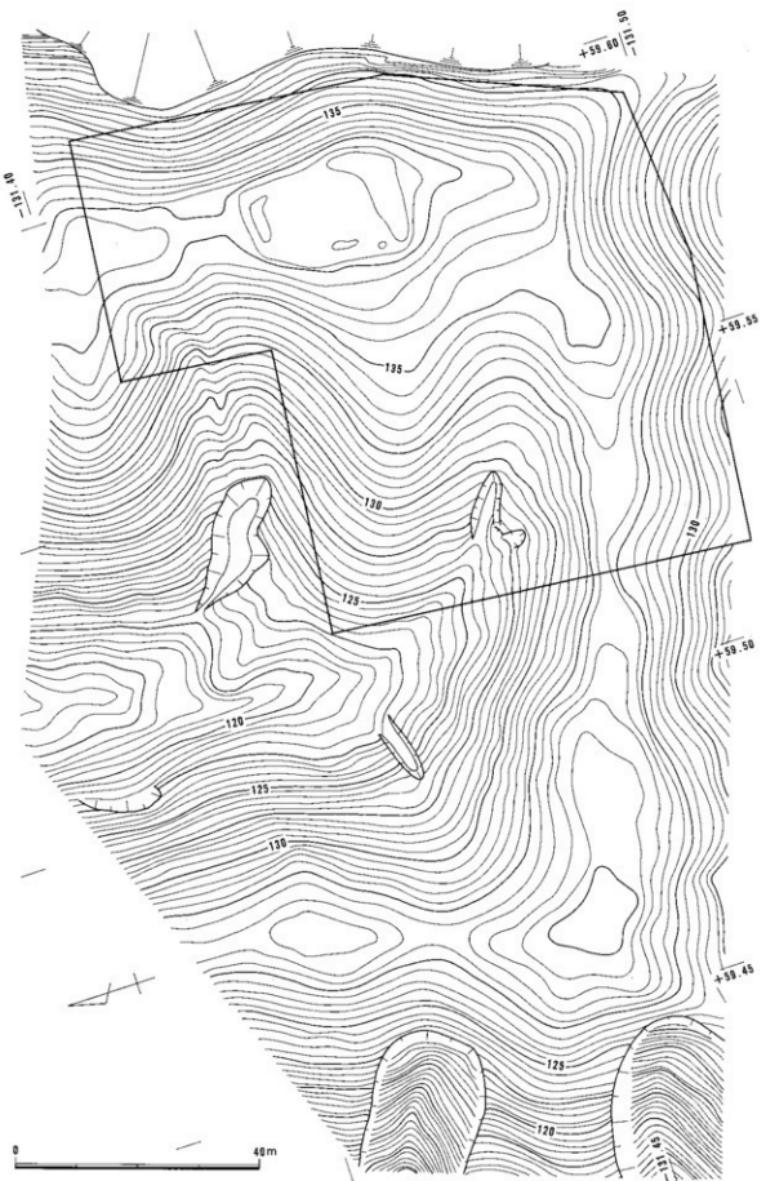
加佐山城跡は三木市の北部、標高125mの台地上にある。美濃川の右岸にあり、平野部との比高差は約90mである。三木城とは美濃川を隔て、直線距離で約2kmの位置である。

城は東西方向と南北方向の尾根の交点に位置している。東側には比高差50mの深い開析谷があり、西側と南側ににも比高差20mの谷がある。北側と南側は尾根続きであるが、北側がほぼ平坦な尾根が続くのに対し、南側は次第に高さを減じてゆく。

斜面の傾斜は東側が最も急で約25°あり、南側斜面で約15°である。西側の谷部の傾斜は約10°であり、南・東側とくらべて緩やかな斜面である。



第4図 加佐山城跡・加佐古墳群調査位置



第5図 加佐山城跡調査前測量図

2. 調査前の状況

加佐山城跡のある丘陵はアカマツ林であり、遠方からは城跡であることは全くわからない状況であった。さらに歩を進めて城跡に立って確認できたのは、主曲輪の高まりと、その周囲の緩傾斜の平坦地の広がりのみであった。

右下の第6図は調査前に地形観察に基づき作成した縄張図である。この図を見ても明らかのように、土壘など盛土をともなう立体構築物は、崩壊しながらもその痕跡をのこしているために、城に伴う構造物であることが観察できている。

城跡の範囲については、傾斜変換点や盛土の痕跡からある程度おさえることができている。しかし、発掘調査の結果あきらかになった横堀など、掘削をともなう遺構は地表面の観察ではその存在を全く予測できていない。また虎口など小規模な作造しか加えられていない遺構も確認できていない。

この状況は立木の伐採後に地形測量をおこなった時点でも同様であった。第5図がその測量図であるが、この図面からは横堀の存在をうかがわせるような等高線の変化を読み取ることができない。また城跡の東側にある腰曲輪も完全に埋没しており、読み取ることはできなかった。

3. 城の構造

発掘調査は城跡の存在を予想した尾根上とその西側の谷部について実施した。その結果、調査前に予想したよりもはるかに複雑な構造をもつ城跡であることが明らかになった。

城は尾根の最高部に上墨引いの主曲輪を配し、その周囲の平坦地をさらに横堀・土壘で囲い込んだ二重構造になっている。この外郭部は主曲輪の西側および南側の部分と、北側の部分の二箇所に大きく分けられるが、前者をA曲輪、後者をB曲輪と呼称することにする。A曲輪にはコの字形に削平された平坦地が3か所作られている。また主曲輪の東側斜面に腰曲輪がつくり出されている。城の入口である虎口は、A曲輪の西側と主曲輪の西側に設けられている。城の規模は、南北70m、東西50m、総面積約2,000m²である。

また、調査の最終段階で主曲輪の土壘を撤去したが、その際土壘の下層で集石坑（SK01）と焼土坑（SK02）を検出している。

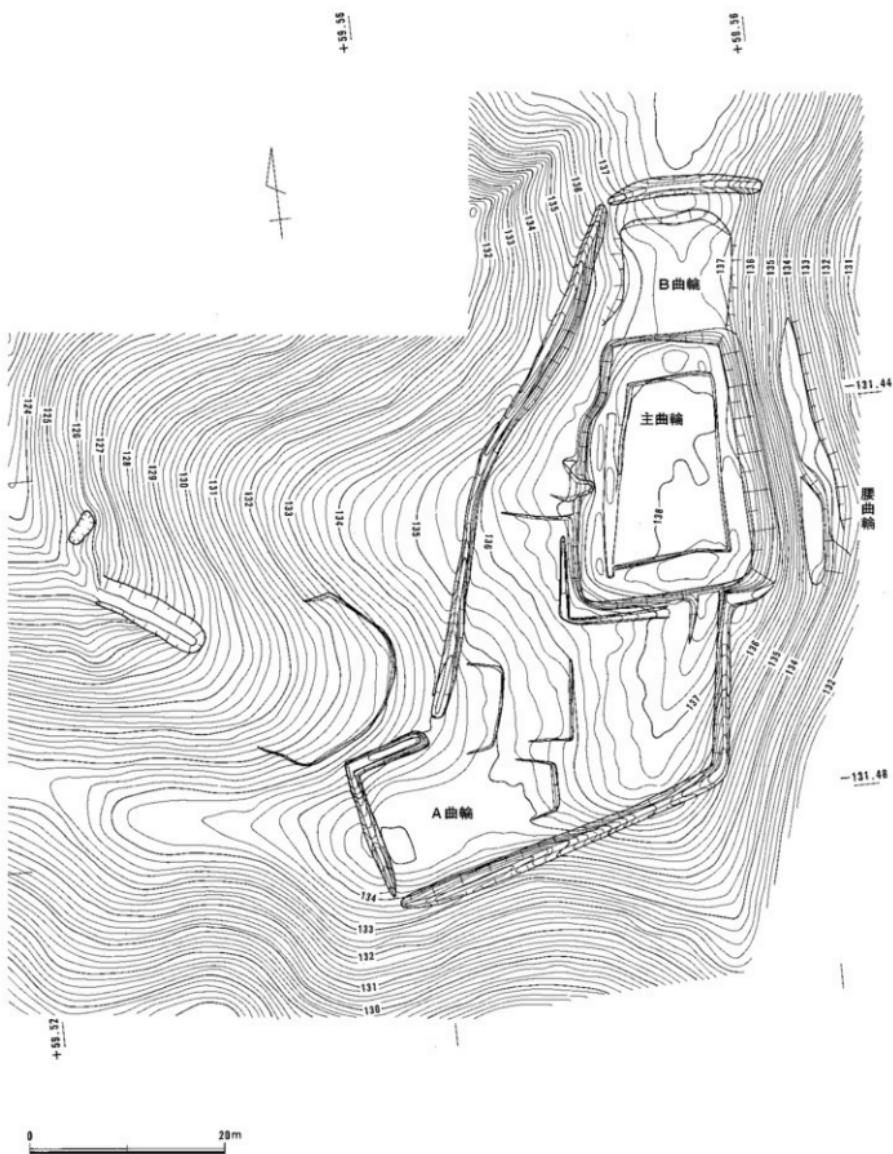
4. 城からの眺望

城跡からの眺望は東西方向に開けている。東側は平井山本陣や慈眼寺山城跡が見え、美濃川流域が一望できる。西側は遠く明石・加古川方面まで見渡せる。

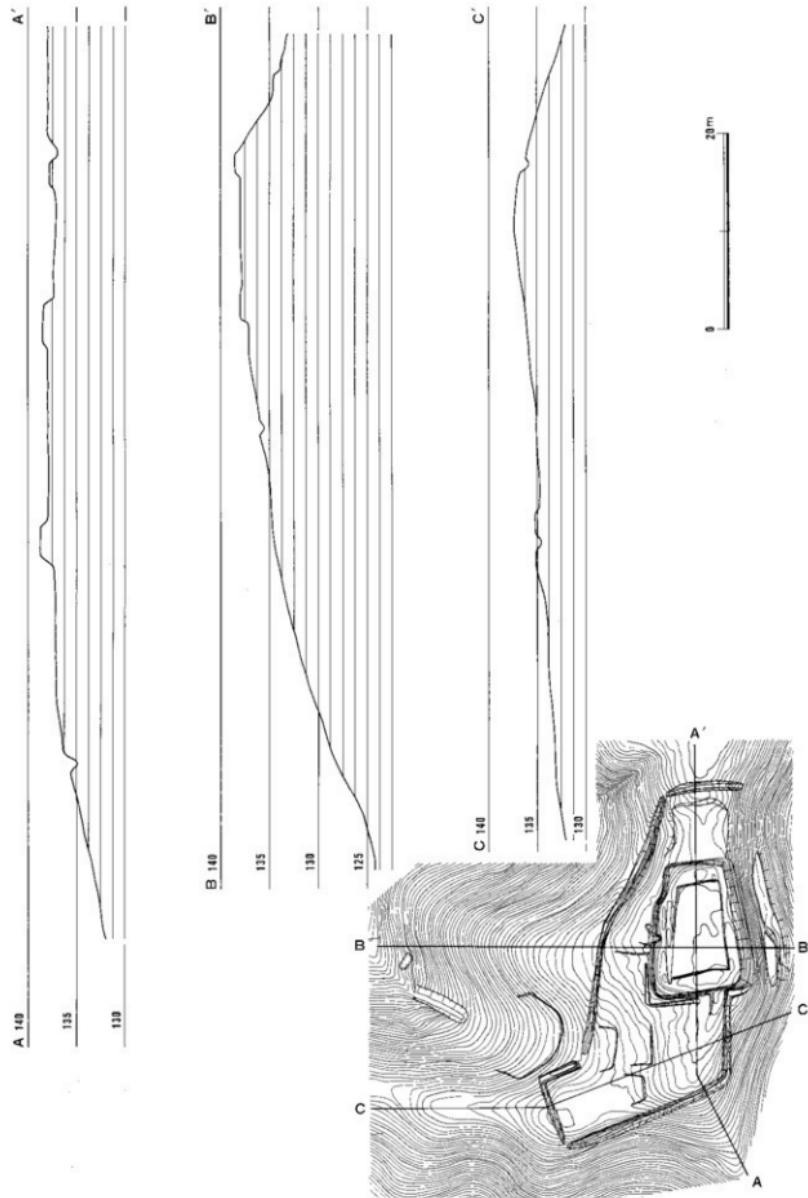
南側は平野との間にある丘陵に妨げられ、足場に登らねば三木城跡を直接見ることはできない。ただし樹木の高さが現在よりも3m低ければ、その姿を望むことができる。



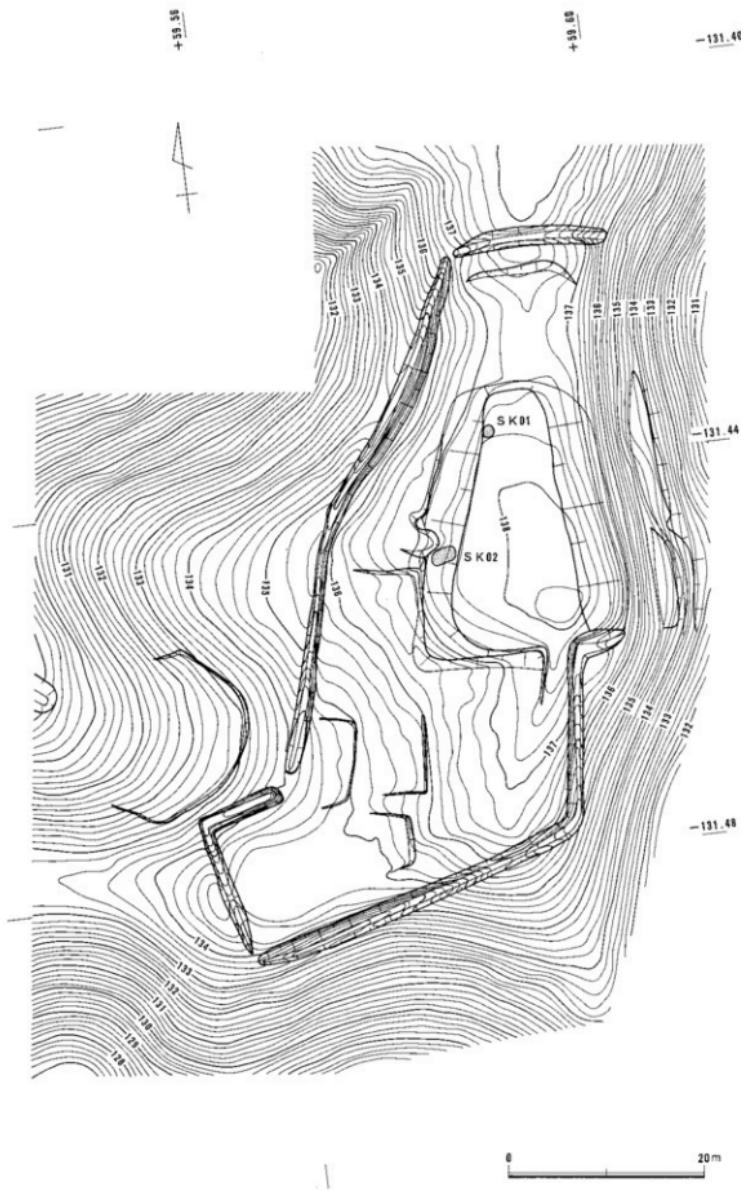
第6図 加佐山城跡縄張図（調査前作成）



第7図 加佐山城跡測量図



第8図 加佐山城跡断面図



第9図 加佐山城跡盛土撤去後測量図

第2節 主曲輪（第10～12図・図版8～13）

1. 規模

主曲輪は城の最高部、標高138mのところに位置する。尾根の頂部を削り出した平坦地を土壘で囲む構造である。規模は土壘の外側で北辺が14.5m、南辺が20.5m、東辺が28mあり、長軸長は27.5mである。土壘で囲まれた内部の空間は、北辺が8m、南辺が12m、東辺が18m、西辺が19m、長軸長が18mあり、面積は180m²である。

2. 土壘

土壘は台状に削り出した基底部の上に盛土して構築している。ただし地山の加工は土壘の基底部の内外では顕著であるが、盛土の下は旧表土を残している。幅は基底部で3～4mであり、残存する高さは曲輪外部からは1m、内部からは0.3～0.8mである。

第11図に示したように、盛土に使用されている土は大別してY（黄色）系土、YR（褐色）系土、R（赤色）系土、W（白色）系土の4種類ある。Y（黄色）系盛土は地山が土壊化した旧表土（旧表土下層土）であり、YR（褐色）系盛土は旧表土の内でも土壊化が著しいもの（旧表土上層土）であり、R（赤色）系盛土は地山の大坂層群の酸化した土（地山土）であり、W（白色）系盛土は大阪層群がむきだしになって風化した土（地山風化土）である。このうち粘性が最も高く締まりがよいのは赤色土であり、褐色土、黄色土、白色土の順に粘性を失う。よって赤色土を多用して盛土を施す部分が最も強固であり、使用する土質によってその強度は変化する。

また土質以外にも、盛土の一単位の大きさも強度に影響し、一単位を細かくし積み重ねの際の叩き締めを重ねている部位ほどその強度は向上する。第11図を見て明らかなように、盛土を最も堅固に行っているのは南辺と北辺である。西辺の縦断面を見ると、土壘の構築はまず北辺と南辺を積み上げてから東西辺を積み上げていることがうかがえる。東西辺の盛土は、北部南部を除くと粗放である。これより、土壘の構築はまず南北辺を堅固に積み上げることによって、曲輪の両端を決めた後に、東西辺の盛土をおこなっていると判断できる。

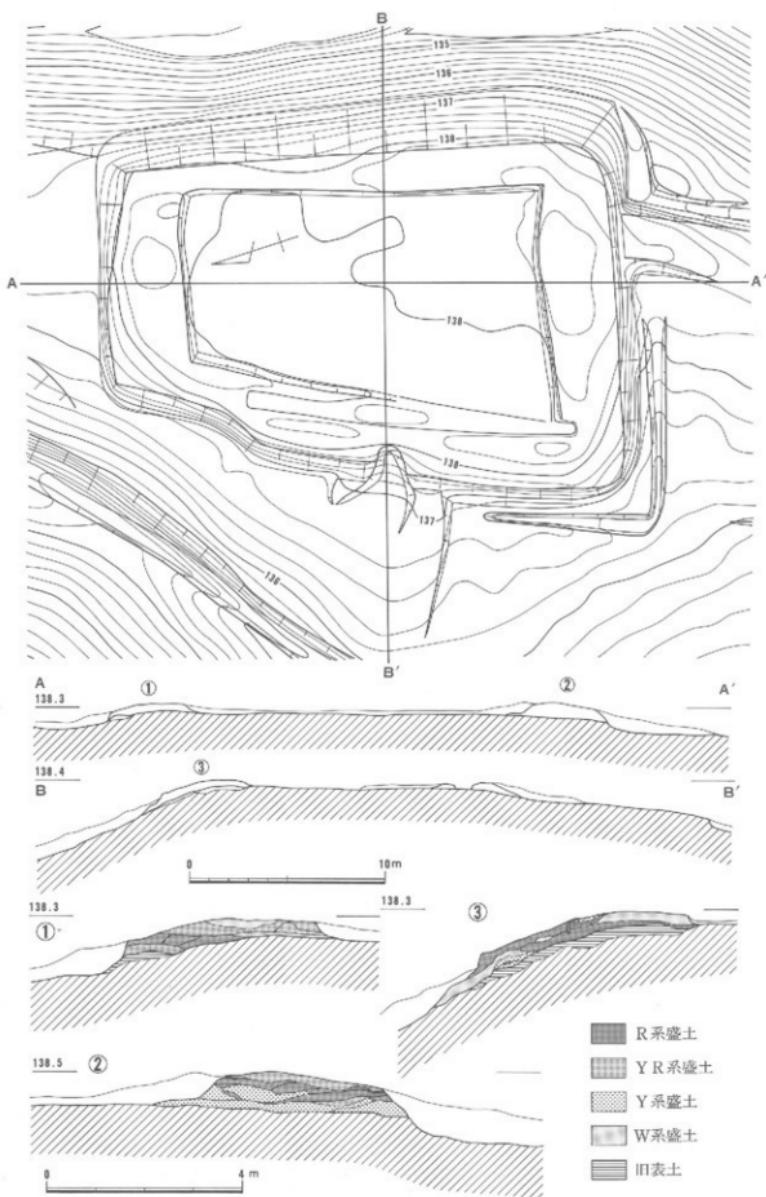
3. 虎口

土壘の西側中央には、地山を削り窪みをつくり出した部分がある。その西側のA曲輪内にスロープ状に地山を削り出した部分が連続しており、これら一連の加工は曲輪の入口である虎口であると判断する。また虎口の部分は土壘が若干低くなってしまっており、この部分の土壘が切れていたことをうかがわせる。虎口部分は、盛土が大部分失われており、立体構造の復元は困難であるが、柱穴などはなく切り盛りだけによる簡単な構造のものであったと推測する。

4. 内部施設

曲輪内部を精査したが、その結果柱穴・礎石などの痕跡はなかった。また出土遺物も全く無い。主曲輪内部に構築物の存在を想定することはできない。

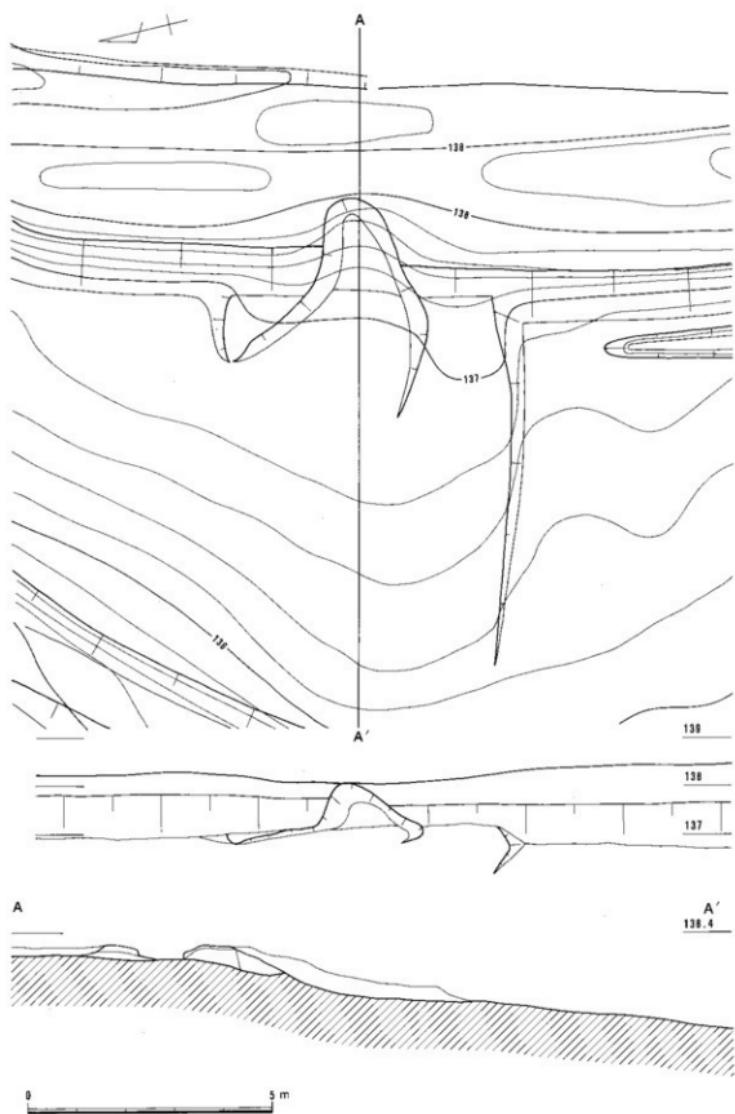
わずかに南西隅で直径50cmほどの焼土面を検出したが、これが城の使用時のものかどうかは判断できない。



第10図 加佐山城跡主曲輪



第11図 加佐山城跡主曲輪土壌断面図



第12図 加佐山城跡主曲輪虎口

第3節 A曲輪（第13～15図・図版14～15）

1. 規模・構造

主曲輪の西側および南側にひろがる平坦な空間であり、城を内郭部と外郭部に分けた時の外郭部にある。南北方向の尾根と東西方向の尾根の接点をL字形に取り込んでいる。東西37m・南北50mであり、面積は約700m²である。曲輪内の最高部が137mであり、最低部が135mである。東から南にむかって傾斜しており、その比高差は約2mである。

曲輪の内部は大きくわけて3つの部分に分けられる。ひとつは南北方向の尾根の西側斜面であり、ここにはコの字形に削平された小規模な平坦地が並ぶ。ひとつは主曲輪西側の部分である。この部分には主曲輪の虎口に続くスロープが作りだされている。そしてもうひとつは東西方向の尾根の基部につくられたコの字形の突出部である。

曲輪の外部は横堀・土塁で囲われており、城内・城外の区別は明確にされている。西側の谷部、曲輪内で最も低い部分に虎口が設けられている。

曲輪の内部は切り盛りの造作は少なく、自然地形にわずかに手を加えただけである。すなわち曲輪内部を完全に平坦化することはなく、自然の傾斜のまま利用している。

2. 土壘・横堀

曲輪の外部は幅1～2mの横堀で囲まれている。横堀は斜面の傾斜と関係なく直線的に掘削されており、虎口部を除き連続している。東側の横堀は北端で主曲輪にぶつかって、東側にはほぼ直角に屈曲している。

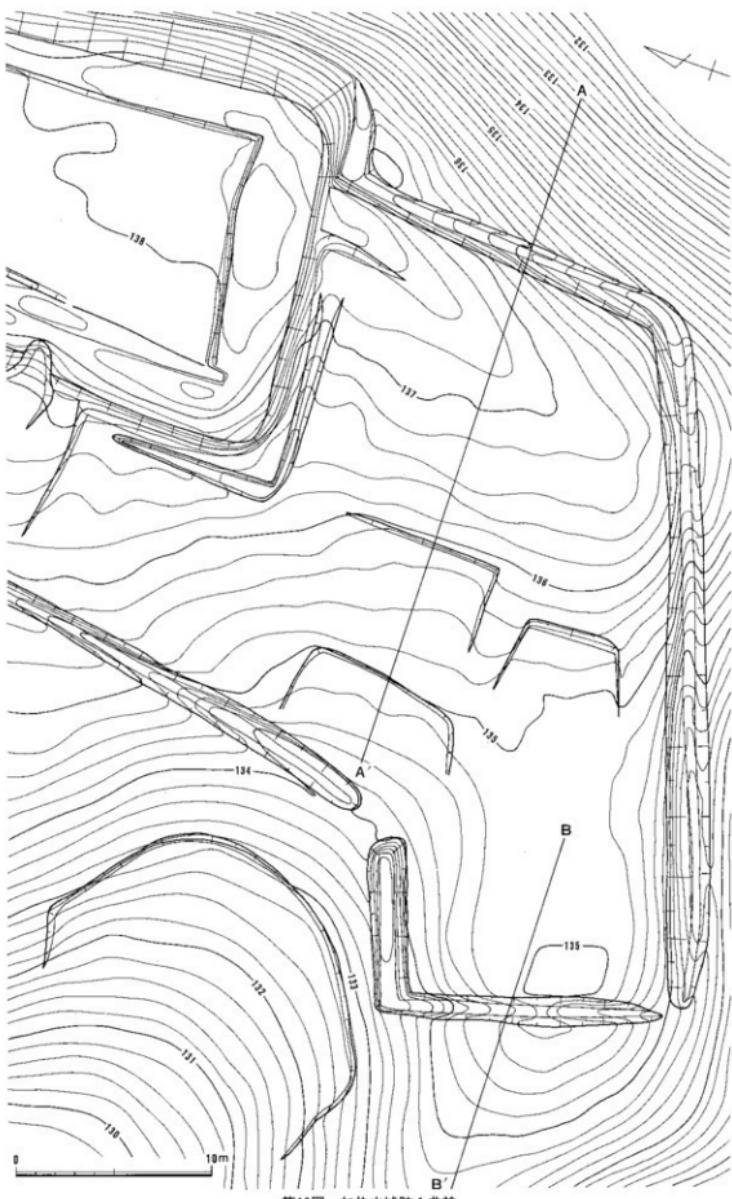
この横堀の内側（虎口より北側の部分を除く）には幅約3mの盛土が連続的に認められる。W系もしくはY系の盛土で構築されており、堅固に締め固められている。残存している厚さは20～50cmほどであるが、横堀および周辺斜面に流れている土の量から考えると、この上に土塁が築かれていた可能性が高いと考える。すなわち横堀の内側に土塁が連続的に築かれ、土塁最高部と横堀底部の比高差が現状よりもはるかに高かった姿が復元できる。

確実に土塁が遺存しているのは東側と西側の突出部のみである。どちらの部分も盛土はほとんど失われているが、地山を台状に削って基底部を造り出しているためにその存在を認識することができる。

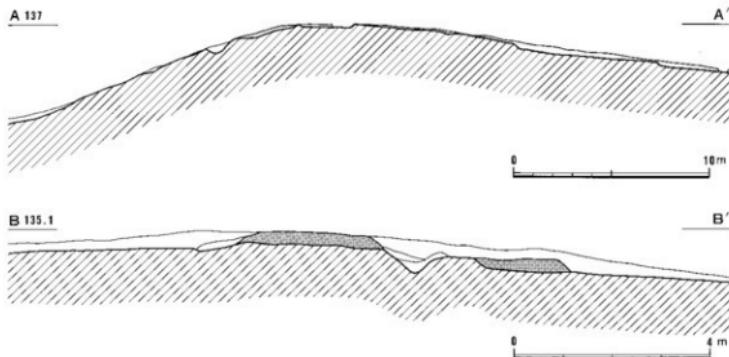
東側の土塁は南北方向の尾根の最高部につくられており、その北端は主曲輪南側の土塁と接続している。土塁の幅は基底部で3.5m、上部で2mである。西側突出部の土塁は東西方向の尾根の基部の傾斜変換点付近に築かれている。土塁の幅は基底部で3.5m、上部で2.5mである。この部分は盛り土がわずかに残っている。

曲輪の西側、虎口より北側の部分は谷部に位置しているために土砂の崩壊が著しく、曲輪の縁で盛土の痕跡は認められなかった。この部分も横堀の内側に土塁が築かれていたかどうかは判断する材料がないが、谷部に盛土の流出土と考えられる土砂が堆積している。土塁の有無はともかく、曲輪の縁の斜面を平坦化するための盛土は存在したと考える。

また西側の突出部のさらに西側、城外にあたる部分にも3m×5mほどの範囲で厚さ0.3mの盛土が検出された。これはR系のものであり、堅固につくられている。横堀に接した部分であるので、横堀の深さを増すためのものである可能性が考えられる。



第13図 加佐山城跡 A曲輪



第14図 加佐山城跡A曲輪断面図

3. 虎口

先に述べたように、曲輪西側の横堀が谷部の所で切れている。この部分は曲輪内部で最も低いところであり、また谷部にむかって開けている。幅は約2mあり、城の入口である虎口にあたると考える。

谷部に位置するため、盛土がほとんど失われており、立体構造は不明である。ただこの部分に接した北側の横堀内からは鉄製の釘（1）が出土しており、木戸等の施設が存在した可能性はある。

この虎口を出て谷を下ると谷筋の道へとつづいており、城への上り口としてこの谷筋の道が利用されていたと考える。

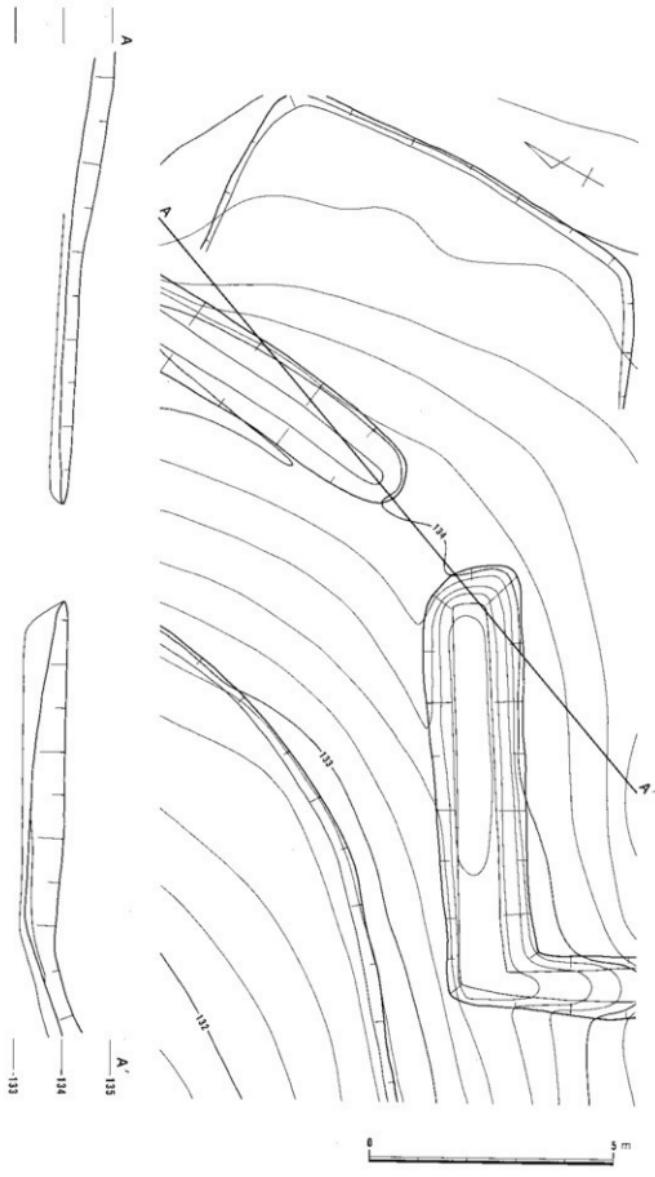
4. 内部施設

A曲輪内部では、もとの地形にわずかな加工をほどこしただけの簡単な施設がみられるのみである。いずれの施設も構造がきわめて簡素なものであるため情報量が少なく、その機能については推測の域を離るものではない。

曲輪の西半部に地山を削った平坦地が3か所作られている。それぞれの規模は北東のものが南北9m東西のものが南北9m、東西4m、南東のものが南北6m、東西5mである。いずれも深さ0.3mほど掘削されている。ただし床面は完全に平坦ではなく、もとの地形のまま東から西へとゆるやかな傾斜をもって下がっている。この施設の内部には柱穴等ではなく、恒久的な建物等の構築物の存在は考えられないが、簡単な小屋程度のものなら可能性は考えられる。

また第2節で述べたように、A曲輪の北端には主曲輪の虎口から続くスロープ状の施設がある。これは地山を削り出して作っており、西へ向かってゆるやかに傾斜する。南側との段差は約0.2mであり、幅は2.8mである。

この他の施設としては、主曲輪に沿った溝がある。幅0.8m、深さ0.2mほどのものであり、土塁の流出土で埋没している。城が機能していた時点での堆積と認められる土はなかった。土塁盛土の確保のために掘削されたものとすると規模が小さ過ぎ、また排水溝とすると城外へ出ていないため役割を果さない。その機能は不明である。



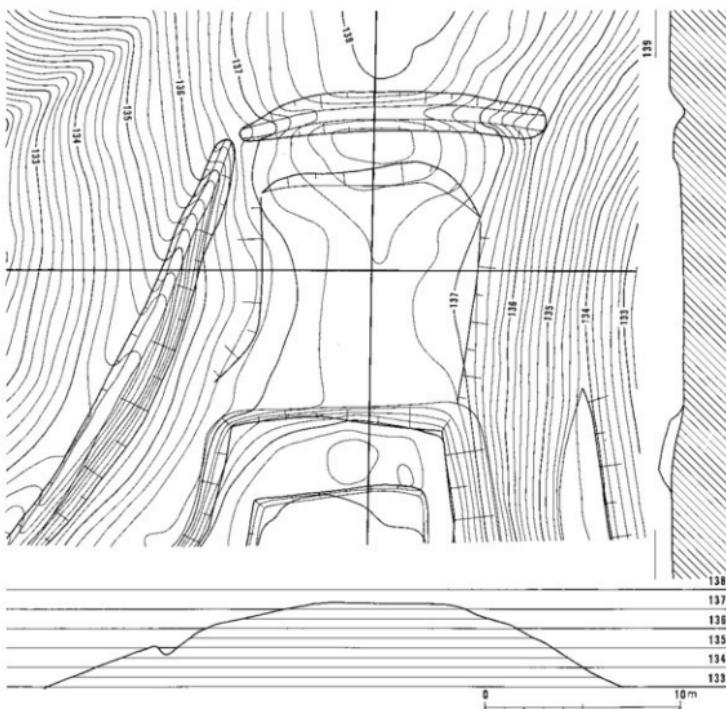
第15図 加佐山城跡 A曲輪虎口

第4節 B曲輪（第16図・図版16）

外郭部の北端部である。北側を土塁・横堀、西側を横堀で囲んだ東西11m、南北11m、内部の面積120m²の曲輪である。南北方向に伸びる尾根の鞍部を削って平坦部を造り出す。北側の土塁は盛土を完全に失っているが、基底部は地山を台状に削り出す。西側は地盤が不安定な谷部を取り込んでいるので、崩壊が著しいが、部分的に盛土が残る。本来は曲輪内部の平坦地を確保するために、西側部分にも盛土が施されていた可能性が高いと考える。当初の平坦部の面積は130m²ほどであったと推測する。

西側にも土塁があったかどうかは現状から判断することは困難であるが、横堀と主曲輪北西隅の距離が4mほどしかなく、この間に土塁を築くことは不可能である。よってB曲輪の西側にもともと土塁が存在していなかった可能性が高いと考える。また東側も曲輪のへりに盛土を施していた可能性は高いが、土塁の存在をうかがわせるような痕跡は観察できなかった。

曲輪の内部に柱穴・礎石などの施設は一切なく、城に伴う遺物も出土していない。ただし主曲輪の土塁の流出土内からは古墳時代～奈良時代の須恵器（図版40）が出土している。



第16図 加佐山城跡B曲輪

第5節 腰曲輪（第17図・図版17）

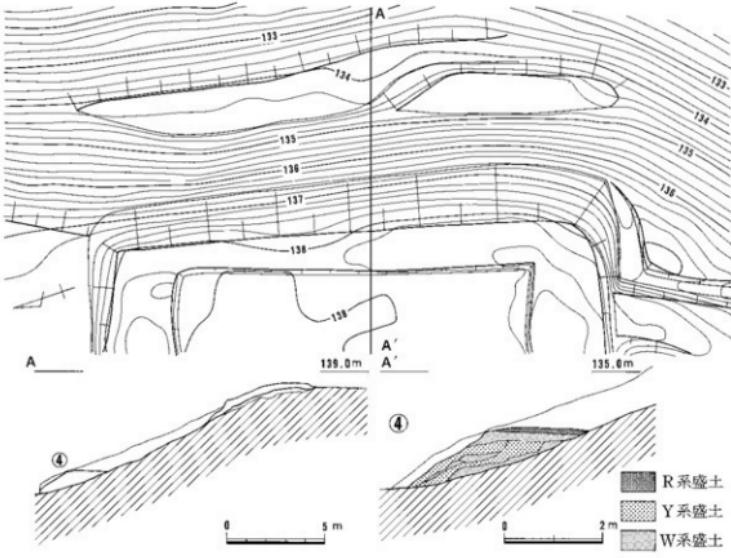
城の東側の斜面につくられた、東西4m、南北27m、面積40m²の曲輪である。標高134～135mに位置し、主曲輪土壁の最高部との比高差は約4mある。曲輪は南北ふたつの部分に分かれており、南側の方が約50cm高くなっている。

曲輪は西側の斜面を削り、その土を東側へ盛って平坦部を作り出している。特に中央部付近は小さな谷がはいっており、盛土が最も厚い。盛土は下層を斜面に平行に積んで基礎をつくり、上層は水平方向に積んでいる。

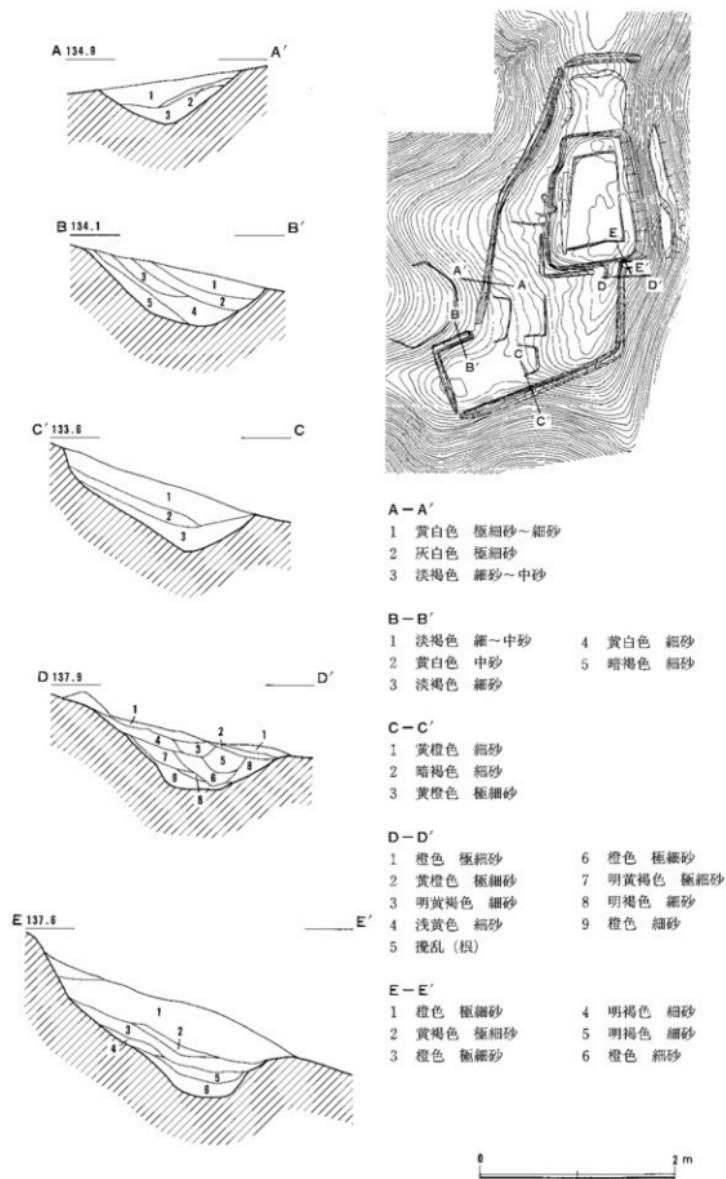
第6節 横堀（第18図・図版18～19）

主曲輪とB曲輪の東側を除く城の外郭部は全て横堀で固められている。曲輪の縁の盛土がかなり流失しているので、本来の深さ・幅は失われているが、幅は2～3m、曲輪の縁からの深さは2m近くあったと推定する。横堀の底はすべて旧表土層を掘り込んで赤色の地山にまで達している。

横堀の埋土は、最下層に土壤化した土が堆積しており、これが城使用時における流土であると推測する。その上には盛土の流土が堆積し、最上層は固く締まった土が堆積する。最上層は自然堆積としてはあまりに固く締まっており、人為的にたたき締めた可能性がある。いつの時期かに城を破壊する行為があった痕跡であろうか。



第17図 加佐山城跡腰曲輪



第18図 加佐山城跡横堀内堆積土断面図

第7節 主曲輪土壘下層の遺構

調査の最終段階で主曲輪の土壘盛土を撤去したが、その際土坑を2基検出している。いずれの土坑も築城時期（16世紀後半）よりも古いものである。

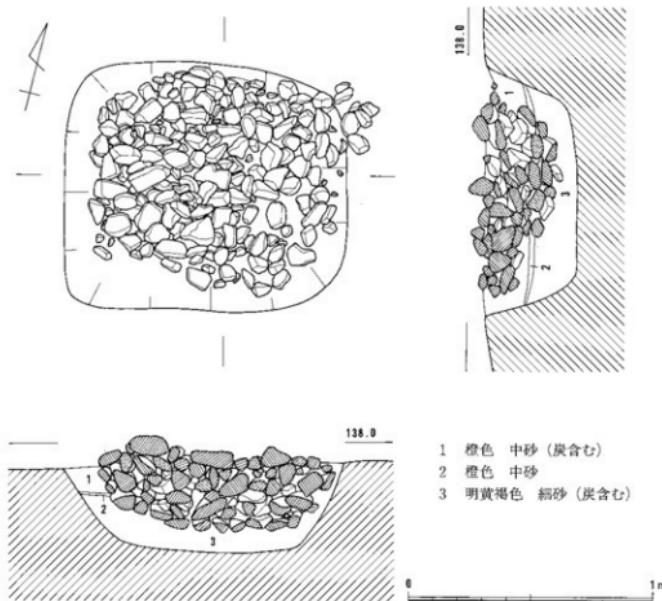
1. SK01（第19図・図版19）

主曲輪の北西隅の土壘下層で検出した遺構である。 $1.15 \times 1.05\text{m}$ 、深さ 0.40m の土坑を、拳大の円礫で充たしている。埋土は3層からなり、第1層と第3層は炭を含む。土坑内からは鉄製の釘が出土している。時期、機能とも不明である。

2. SK02（第20図・図版19）

主曲輪西側の土壘下層で検出した遺構である。 $1.45 \times 0.75\text{m}$ 、深さ 0.10m の土坑であるが、底は強い熱を受けて焼けており、炭層が全面に広がっている。出土遺物はなく時期は不明である。

このような土坑の例は兵庫県内各地の遺跡で報告されており、時期は平安時代後期～鎌倉時代初頭に比定されているものがほとんどである。機能は火葬墓・炭窯・土師器焼成土坑などと推定されている。いずれの説も決定的な証拠は無いが、最近は木炭窯と見る説が有力である。SK02もその立地から考えて炭窯と考えるのが妥当であろう。

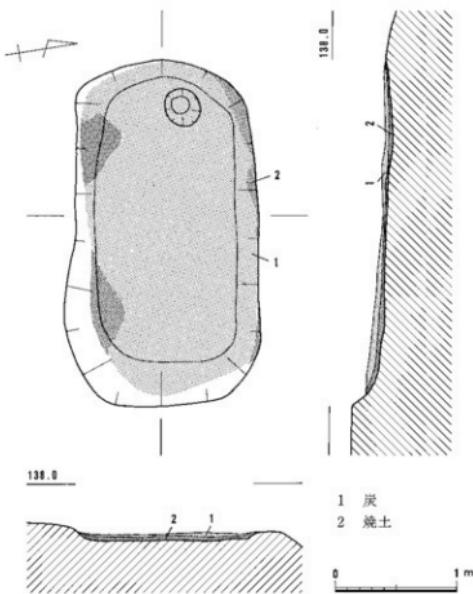


第19図 加佐山城跡盛土下層SK01

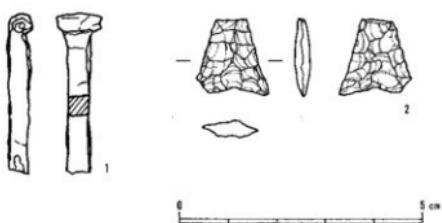
第8節 遺物 (第21図・図版40)

加佐山城跡では、城の周辺部も含めて約7,000m²の調査をおこなったが、城郭の型式学的な研究から導き出される時期（16世紀）の遺物はほとんど検出してない。わずかにA曲輪虎口の北側横堀内から鉄製の釘1点（1）が出土したのみである。先端部を欠失するが、残存長3.3cmである。この他の遺物は明らかに時期が異なり、城に伴わないものである。

最も古い時期の遺物は縄文時代のサヌカイト製の石錐（2）である。A曲輪の西側で採集した。先端



第20図 加佐山城跡盛土下層 S K02



第21図 加佐山城跡遺物

部を欠失するが、全長1.6cm、基部の幅1.5cmである。他にこの時期の遺物は出土しておらず、また同時期の遺構もないのに、居住地を離れておこなった何らかの活動の結果、山の上に残されたものであると判断する。

この他の遺物はいずれも主曲輪の七星盛土内に入っていた須恵器の小片である（図版40）。図化できるものはないが、古墳時代後期のものと奈良時代のものがある。

古墳時代後期のものは杯（身か蓋かは不明）である。加佐山城跡の南側の尾根起きには、古墳時代後期の古墳群（加佐古墳群）がある。加佐山城跡が立地する場所は尾根の最高所であり、ここにも古墳が存在した可能性は十分に考えられる。須恵器は、この古墳に伴うものであったと推測する。

奈良時代のものは杯Aなどである。加佐山城跡の東側の谷（湯谷）には奈良時代～平安時代の古窯址群（跡部古窯址群）があり、跡部4号窯では加佐山城跡から出土したとの同時期の須恵器を生産している。ここで生産された須恵器がなんらかの理由でこの場所にまで運びあげられた可能性が考えられる。

第9節 加佐山城跡の土量計算（第22～23回）

1. はじめに

本節では加佐山城跡の築城に関してその作業量を計算するために、造成時に移動した土量を計算する。加佐山城跡の築城は以下の手順で行われている。①選地、②繩張り、③主曲輪の造成、④周囲の曲輪の造成の順である。主曲輪は内部及び周囲の削平が先行し、後に土塁が盛られる。また、周囲の曲輪では横堀が掘られその土を横置きして土塁が盛られたと考えられる。

最後に主曲輪の虎口や周囲の曲輪の内部の段などが造成されたと考えられる。但し、最後の仕上げについては軽微な作業に止まつたものと思われる。

2. 土量計算

土量計算は現場で作成した断面図を元に、平均断面法を用いて計算した。但し、主曲輪周辺（図示した範囲）については盛土部分で計算し、周囲の曲輪では削平部分（具体的には横堀の土量）を基本として計算した。他に、主曲輪背後の盛土については横堀の掘削土が積まれたことを換算して、この部分の横堀土量を減じた。手順は以下のとおりである。

a. [主曲輪・腰曲輪・主曲輪背後の盛土]

- ①土塁部分の断面・帶曲輪盛土部分の断面の断面を計算する。
- ②この断面積を標準として周囲の距離をかけ、主曲輪・腰曲輪の土量を計算する。
- ③造成面積を計算し単位面積当たりの土量を算出する。

b. [横堀]

- ①横堀の断面図を元に断面積を計算し、これに周囲の距離をかける。
- ②各部分を小計し周囲の曲輪の土量を合計する。
- ③造成面積を計算し単位面積当たりの土量を算出する。

a が盛土部分で、b が削平部分となる。但し、横堀の土は横置きされ、土塁となっている。この土量と主曲輪の北背後の盛土は b 曲輪の仕事量と考えられる。このため仕事量は a + b で計算できると考えられる。以上の計算については次項のとおりである。

3. 計算結果

	土量	面積	単位面積当たりの土量
主曲輪	= 132.40m ³ (47.9%)	500m ²	0.264m ³
横堀（B 曲輪）	= 60.86m ³ (22.0%)	1,215m ²	0.050m ³
主郭背後の盛土	= 55.50m ³ (20.1%)	84m ²	0.661m ³
腰曲輪	= 27.73m ³ (10.0%)	350m ²	0.159m ³
合計	= 276.49m ³	2,065m ²	0.134m ³

4. 作業の検討

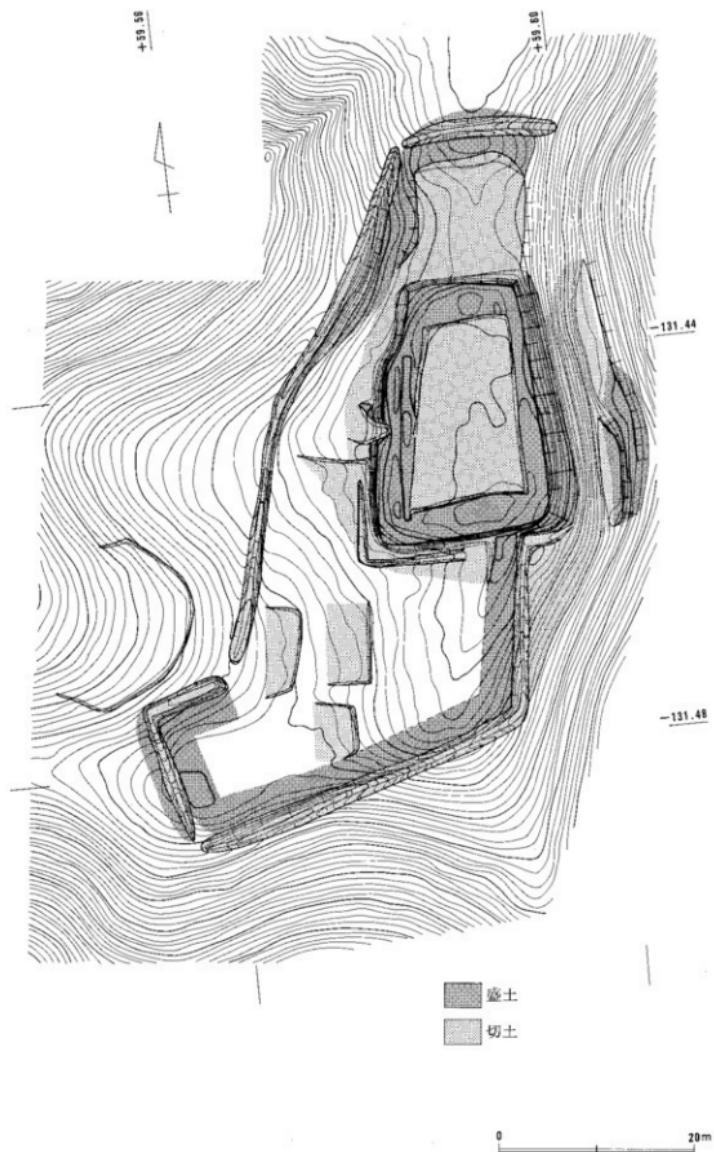
築城の手間は①主曲輪、②北背後の盛土、③腰曲輪、そして最後に④曲輪の順で行われた。主曲輪及

び主曲輪を造成するのに必要な北背後の盛り土に力点が注がれていることがわかる。仮に、主曲輪背後の盛土も主曲輪を形成するための造成と考えると土量は 187.9m^3 となって全体の仕事量の約69%を占めることになる。逆にA・B曲輪は簡易な造成しかなされていないことがあきらで、周囲を囲む横堀のみが造成されている。曲輪全体にならすとA・B曲輪は25%弱の仕事量でできたことになる。

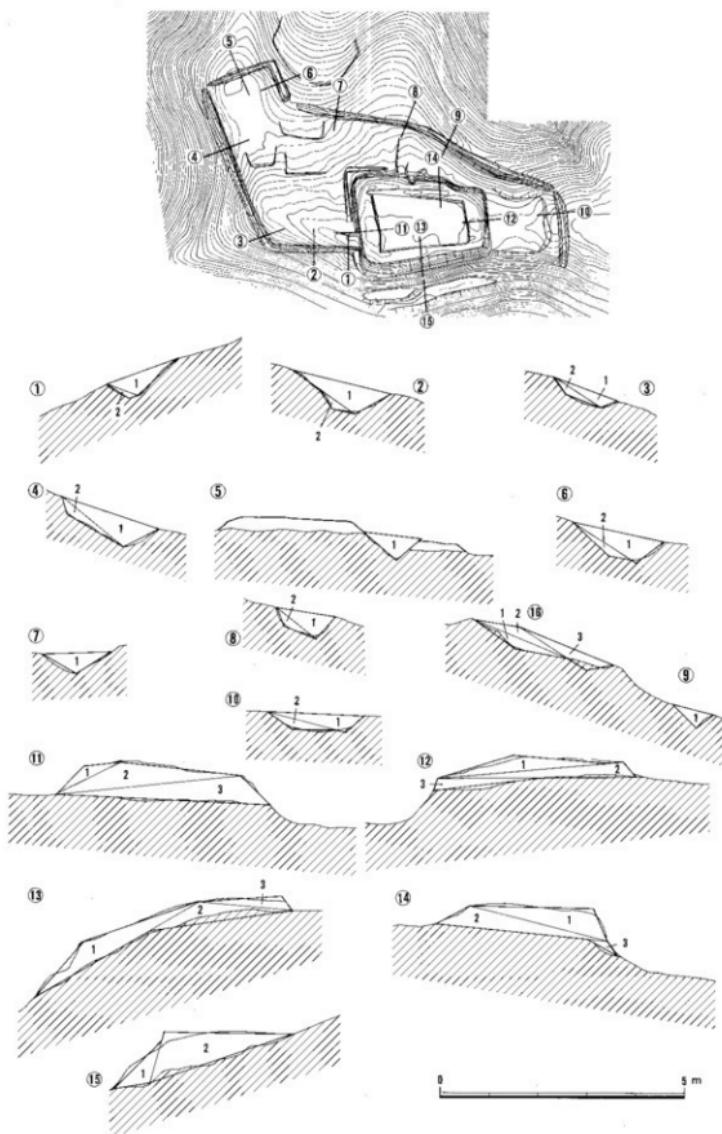
水尾城(西脇市)や内場山城(多紀郡西紀町)では単位当たりの土量が10cm強であるから通常の中世城郭の築城労力と比較しても大差のないことがわかる。しかし、その労力は主曲輪に集中している点が特徴的である。

加佐山城跡土量計算表

部・施設名	断面名	底辺 (m)	高さ (m)	小計 (m ³)	断面積 (m ²)	平均断面積 (m ²)	距離 (m)	土量 (m ³)				
横堀	1	① 1.55	0.45	0.349	0.384	0.515	23.00	11.85				
		② 0.70	0.10	0.035								
	2	① 2.10	0.55	0.578	0.646		35.00	18.45				
		② 0.90	0.15	0.068								
	3	① 1.40	0.25	0.175	0.258		15.00	4.70				
		② 1.10	0.15	0.083								
	4	① 2.10	0.60	0.630	0.795		9.00	6.26				
		② 1.65	0.20	0.165								
	5	① 1.25	0.50	0.313	0.313		(36.00)	17.10 (10.80)				
		② 2.00	0.55	0.550								
	6	① 1.45	0.20	0.145	0.695		16.00	8.80				
		② 1.50	0.45	0.338								
	7	⑥ 1.25	0.50	0.313	0.413		(10.80)	57.00				
		⑦ 1.00	0.20	0.100								
	8	⑥ 0.85	0.35	0.149	0.149		26.50	45.34				
		① 2.00	0.40	0.400								
	9	② 1.50	0.20	0.150	0.550		12.00	27.73				
横堀の総土量 (a) = 57.16 / 重なる部分を除いた土量 (A) = 60.86												
主曲輪の上 蓋	11	① 1.50	0.30	0.225	2.385	2.385	12.00	28.62				
		② 3.80	0.50	0.950								
		③ 4.40	0.55	1.210								
	12	① 3.50	0.35	0.613	1.509	1.509	8.00	12.07				
		② 4.05	0.30	0.608								
		③ 2.30	0.25	0.288								
	13	① 3.90	0.50	0.975	1.932	1.932	24.00	46.37				
		② 2.95	0.45	0.664								
		③ 1.95	0.30	0.293								
	14	① 2.90	0.60	0.870	1.711	1.711	26.50	45.34				
		② 3.50	0.45	0.788								
		③ 0.70	0.15	0.053								
主曲輪の土量の総土量 (B) = 132.40												
主曲輪背後 の盛土	16	① 1.70	0.35	0.298	2.643	2.643	21.00	55.50				
		② 2.00	0.35	0.350								
		③ 4.20	0.95	1.995								
主曲輪背後の盛土 (C) = 55.50												
腰曲輪	15	① 1.50	0.45	0.338	1.733	1.733	16.00	27.73				
		② 3.10	0.90	1.395								
腰曲輪の土量 (D) = 27.73												
築城のための総土量 (A + B + C + D) = 276.49												



第22図 加佐山城跡切り盛り範囲図



第23図 加佐山城跡標準断面図

第10節 小結

加佐山城跡は調査の結果、土星開いの主曲輪を中心に配し、その周囲の緩斜面を横堀で囲い曲輪とする「二重構造」の山城であることが明らかになった。この山城の城郭研究上の位置づけ等については、章を改めて詳細に述べるので、ここでは調査上の所見として重要と思われる事項を例挙しておく。まず城の立地であるが、丘陵の尾根筋の平坦な合流点に位置している。この場所は尾根筋の山道が合流・分岐する場所であり、交通ルートの遮断という意味では好立地であると言える。ただし場所が丘陵の少し奥に入っているために、城跡からの眺望はさほど良くはない。ことに三木城跡は現状では全く見えない。

次に城跡の構造であるが、城跡の内部は土星によって開まれた主曲輪とその周囲の土星・横堀で囲まれたA・B曲輪、そして斜面上に設けられた腰曲輪という部分に大きく分かれる。このうち主曲輪は尾根の頂部を完全に平退化し、周囲を堅固な土壁で囲んでおり、加えられた土木量も多い。一方、A・B曲輪は外郭線こそ土星・横堀で明確に区画するが、その内部は自然の傾斜をそのまま残しており、加えられた土木量はわずかである。細部の構造では横矢掛かりが見られること、虎口は簡素な構造であり主曲輪は平入り、A曲輪は側面から入るという特徴をもつ。全体のプランは地形を利用しながらも、傾斜を無視して横幅を直線的に走らせるなど、かなり明確な意図をもつものである事がわかる。

城跡の規模は一般的な山城と比較して小規模であると言える。内部に駐屯できる兵数は数十人の域を出るものではないであろう。また明確な生活痕跡が無いことも大きな特徴であると言える。時期が明らかに異なる遺物が少量出土した以外は、城での生活を窺わせるような遺物は1点も無い。それに加え、恒常的な生活に当然必要な生活空間一掘立柱建物や礎石建物一も全く検出していない。また飲み水の水源となるような湧き水や井戸も検出していない。わずかにA曲輪内に簡易な削平段を造成しているのみである。遺物が出土しないことについては、城の必要性が無くなった時点で全て持ち去られたという解釈も可能であるが、城跡内部に炊事の痕跡も無いことから、当初から城内において土器を使用するような行為は行われなかつたと考えるべきであろう。

城跡の時期については、その根拠となる上器等の遺物が全く出土していないので、城郭の型式学的研究に頼らざるを得ない。調査の当初からその構造が三木城の付城であることが判明していた君ヶ峰城などと類似していることから、加佐山城跡も三木城を包囲した織豊系の付城ではないかという予測は持っていた。発掘調査の結果も、本郭部（主曲輪）と駐屯部（A・B曲輪）から構成される二重構造をとることが明らかになり、最近明らかになりつつある織豊期の付城の構造と共通点が多いということが言える。また構造上の他の要素も中世城郭よりは近世城郭に共通する部分が多く見受けられる。このようなことから、この城は織田信長による播磨平定の一環としておこなわれた三木城攻めの際に築かれた付城である可能性が高いと言える。近世の地誌である『播磨鑑』の記述を見ると、「加佐山の上」に付城があり杉原七郎左衛門が城将であったと書かれている。この文献の記述の信憑性については異論もあるであろうが、宮田逸民氏の研究でその記述の付城の配置については信頼性が高いことが明らかになってきている。「加佐山の上」の付城=加佐山城跡と言いつることはできないが、その可能性は高い。以上の様々な要素から加佐山城跡は三木城攻めがおこなわれた天正6年から8年（1578~80年）の間に築かれた織田方の付城である可能性が極めて高いという結論が導き出せる。先に例挙した加佐山城跡のさまざまな調査上の所見も、この城跡を付城であると考えることによって理解できる。

第4章 慈眼寺山城跡の調査

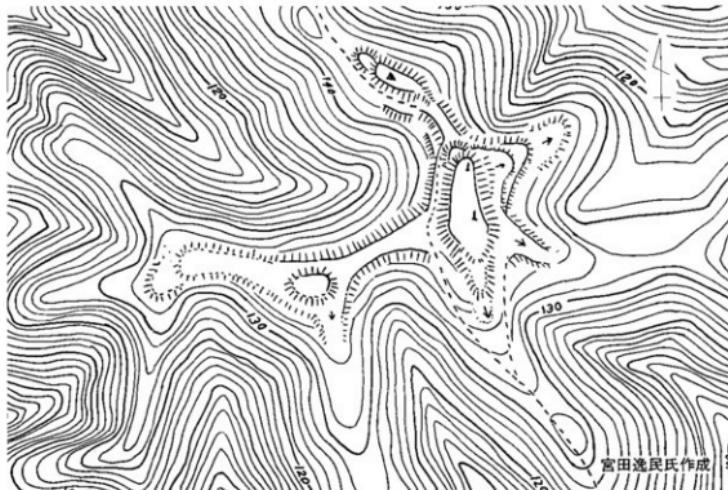
第1節 遺跡の概要

1. 城の立地

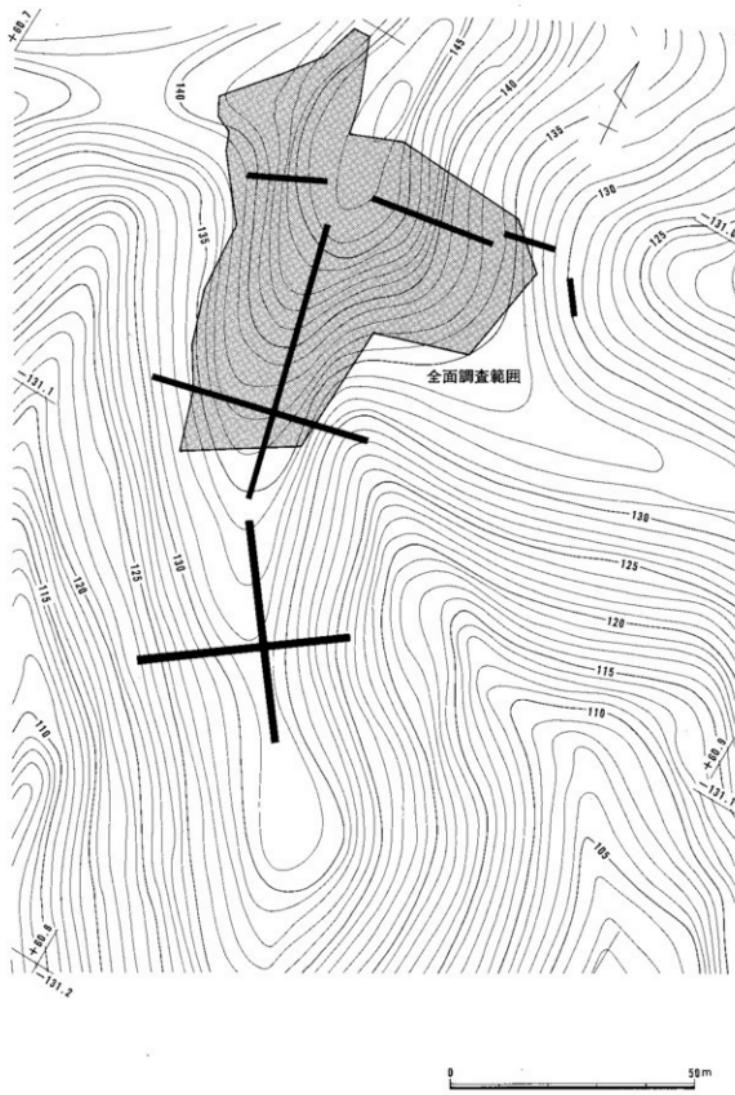
慈眼寺山城跡は、三木市の北部、美嚢川右岸の台地上に立地し、三木城の北北東、直線距離で約2.5kmの位置にある。標高は148m、平地との比高差は約100mを測る。城跡の立地する山塊は、南の美嚢川にむかって開く谷筋が東西に深く入り込み、半ば独立している。城跡からは、南と東への展望がひらけている。南は、東から西へ蛇行する美嚢川をはさんで、中世末期にひんぱんに利用された姫路と有馬を結ぶ街道および、三木城が一望できる。南東には、秀吉が本陣を構えた平井山を眼下に望むことができ、広く周辺を見渡せる位置にある。また西は、低い山並を隔て加佐山城跡を見通すことができる。なお山城が築かれた尾根筋は、小野方面へ抜ける山道として古くから利用されていた。

2. 城の構造

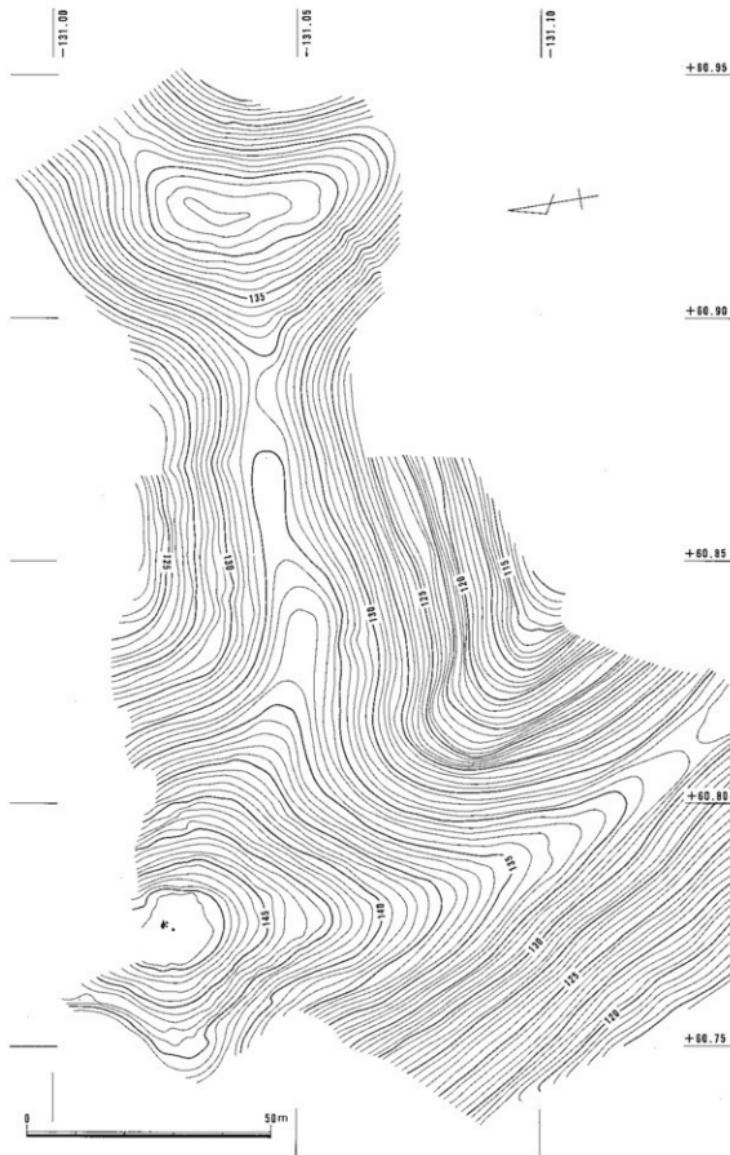
慈眼寺山城跡は、慈眼寺の裏山の南北に連なる主稜線上の南端の山頂に築かれている。今回の調査では、慈眼寺山城跡推定地のうち、山陽自動車道本線にかかる南側部分、約4,000m²の範囲を発掘し、主曲輪の一部とその南側に配された曲輪および、堀を検出した。主曲輪と南側斜面に確認された曲輪との比高差は7mを測る。尾根稜線上に造成して築かれた主曲輪上には、礎石建物跡が確認され、周囲を幅1.5m～2m前後、深さ1m～1.5m前後の堀がめぐる構造になっている。さらに、南側斜面に作られた曲輪にも主曲輪同様、堀がめぐっている。これより以下、各遺構の内容を報告していくことにする。



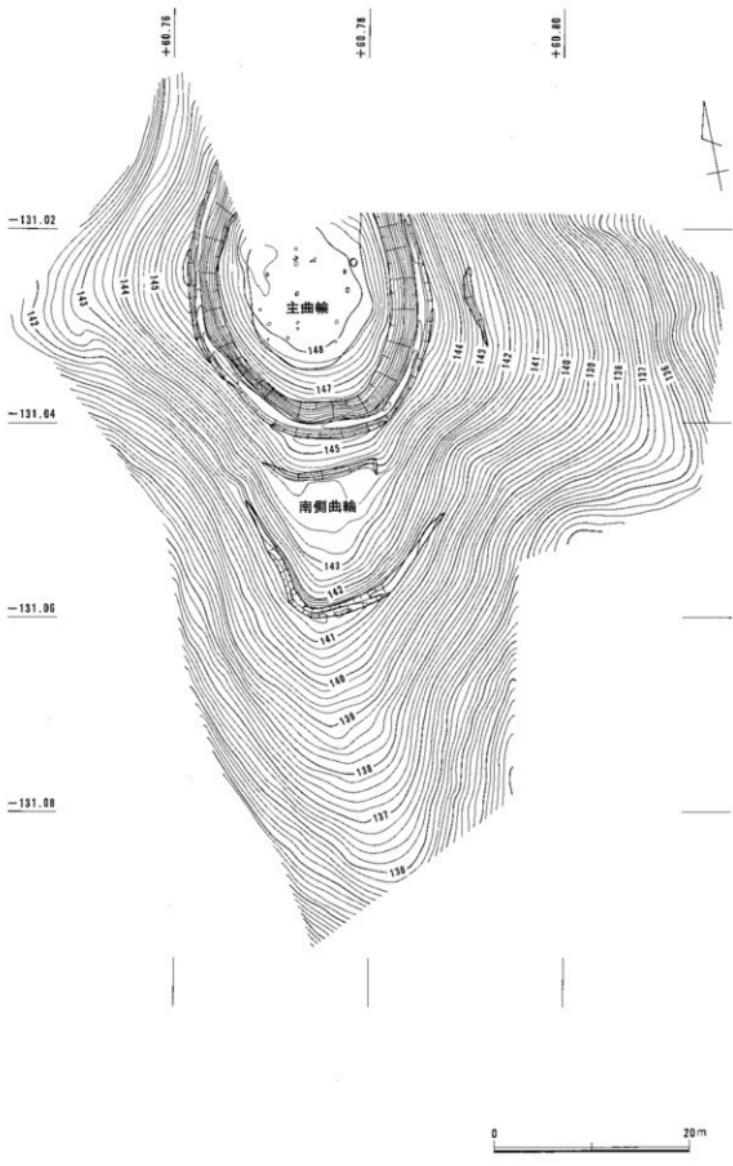
第24図 慈眼寺山城跡調査前縄張図 (S = 1/2,500)



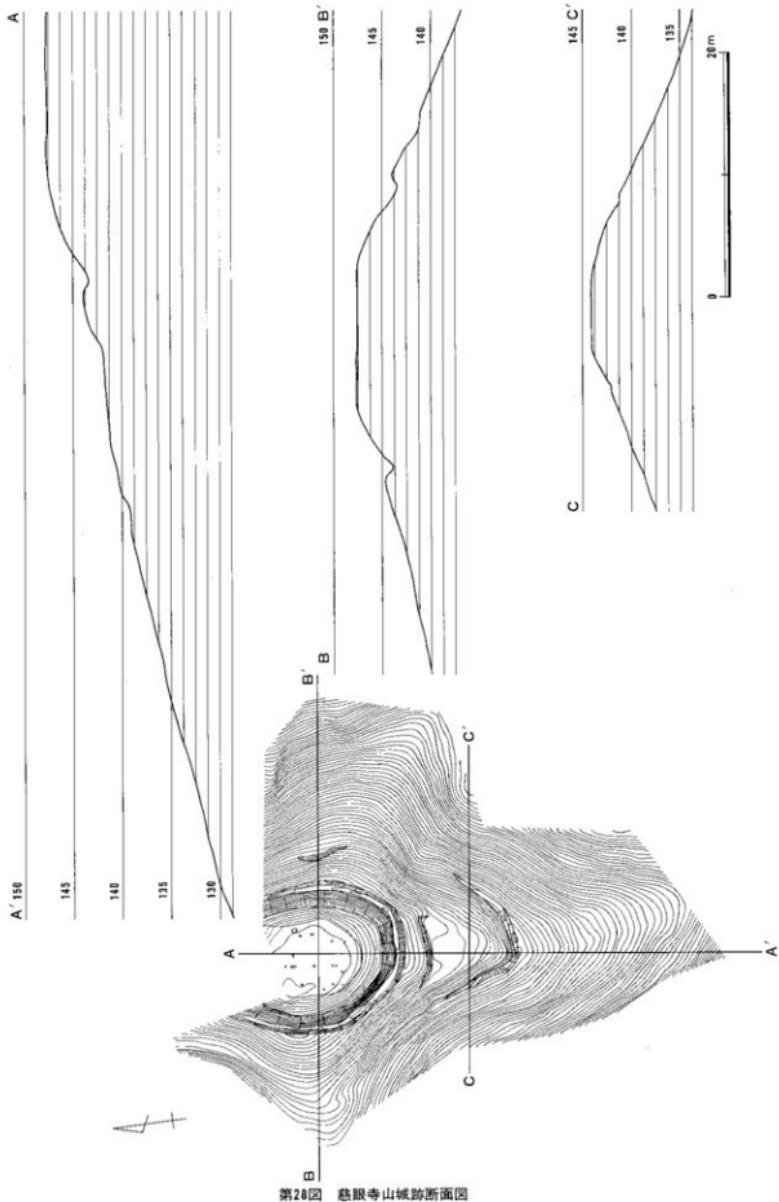
第25図 慈眼寺山城跡調査位置



第26図 慈眼寺山城跡調査前測量図



第27図 慈眼寺山城跡測量図



第28図 慈眼寺山城断面図

第2節 主曲輪（第29～30図・図版25～30）

1. 規模・構造

慈眼寺山城跡は、南北に連なる尾根を中心に、その周辺の地形を造成して築かれている。主曲輪は、その尾根上に配されている。主曲輪の四方には、主稜線から派生する尾根を利用して造成された諸曲輪が展開し、山城を形成している。

主曲輪は、標高148mに位置する。周囲を堀がめぐり、南側斜面には小規模な曲輪が付属している。調査区西側では、主曲輪を構成する主稜線から西へ派生する尾根上に造成したものと思われる平坦地が一部確認されているが、その大部分は調査区外に含まれる。

主曲輪の平面形は、東西約15m、南北約30mの長方形で約450m²の面積をもつものと考えられる。しかし、今回の調査では、東西約13m、南北約15mの約200m²の範囲、主曲輪の南側半分の発掘調査を実施したにすぎず、調査区北側につづく部分については現状のままである。検出時の主曲輪は、東西13m、南北14mの馬蹄形であり、盛土によって造成された部分は流失し、なだらかに堀へと落ち込んでいく。主曲輪と堀底部との比高差は3mである。

主曲輪は、尾根を削って平坦にするとともに、周囲をめぐる堀を掘り込んだ掘削土を積み上げて造成し、築造されたものである。

2. 建物跡

主曲輪内では、礎石が検出され、建物があったことが想定される。建物跡は、東西梁行7m、調査区北側にさらにつづくと思われる桁行は、南北7m以上のものである。礎石は、かなりの箇所が抜き取られており、完全な形での復元は不可能であるが、東西3間、南北4間以上である。礎石建物跡は、ほぼ南北にむきをとり、三木城に正対するものである。

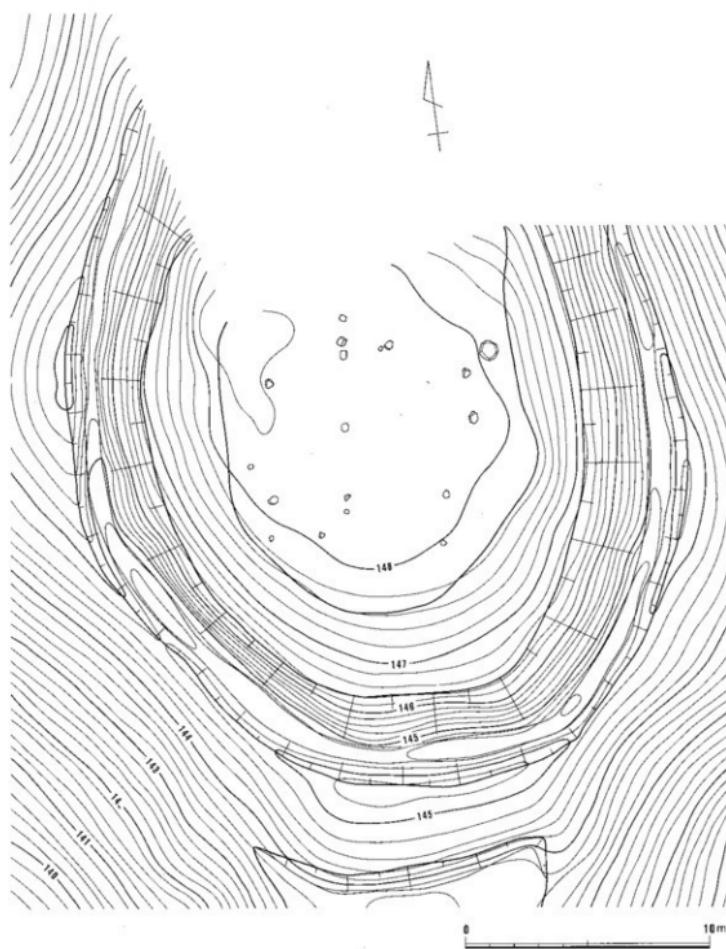
礎石に使用された石は、一石五輪塔地輪部（第34図2）および、反花座（第34図3）を転用したもの2点と、その他は、直径0.3m程の川原石であり、最大のもので直径0.5mを測る。これらの礎石は、わずかに地山を掘り込んで据えられた状態で検出された。

また、主曲輪の中央付近では、柱穴および、焼土が検出された。柱穴は、わずか2基が検出されたのみで建物跡を想定することはできない。焼土は、一箇所から固まって検出されたが、礎石建物跡内にあり、築城時のものかどうかは判断できない。

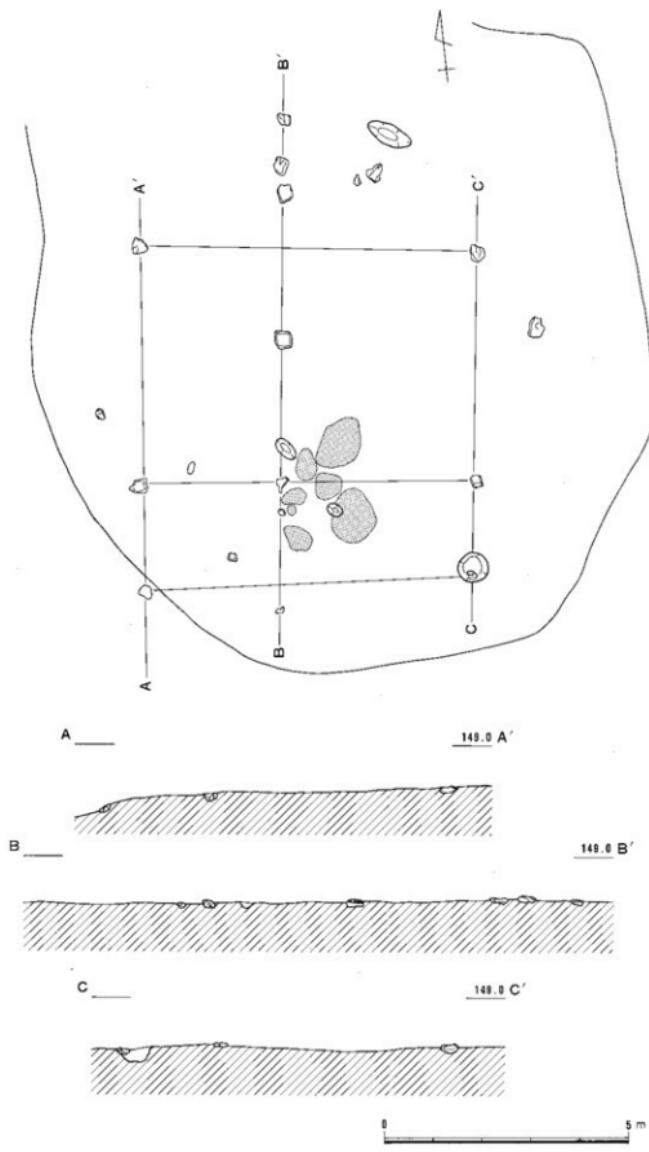
主曲輪上からは、数点の瓦片が出土したのみであった。しかし、いずれも近代以降のいぶし瓦であり山城跡にともなう遺物とは考えられない。

3. 水神さん

調査区内の主曲輪上には、発掘以前から「水神さん」が祀られていた。この水神さんは、慈眼寺山城跡がある付近一帯では、一番高所に祀られており、かなり古くから雨乞いなどの水にたいして信仰されていたようである。水神さんは、高さ1.60m、底部0.64m、中央付近で最大幅0.82mを測り、頂部へと先細りしていく矢印に似た形をしている。厚みは、最高でも0.15mと比較的薄く、自然の板石をそのまま利用し、祀っていたようである。手前には、長さ0.68m、幅0.51m、中央をまるく彫り込んだ立て石があり、その東側には、長さ0.44m、幅0.38m、高さ0.27mの、西側には、長さ0.57m、幅0.30m、高さ0.69mの立て石がある。いずれの石も凝灰岩である。発掘調査にあたり、水神さんは調査区北側の自動車道路線外に移動し、再度祀られている。



第29図 慈眼寺山城跡主曲輪



第30図 慈眼寺山城跡主曲輪石建物

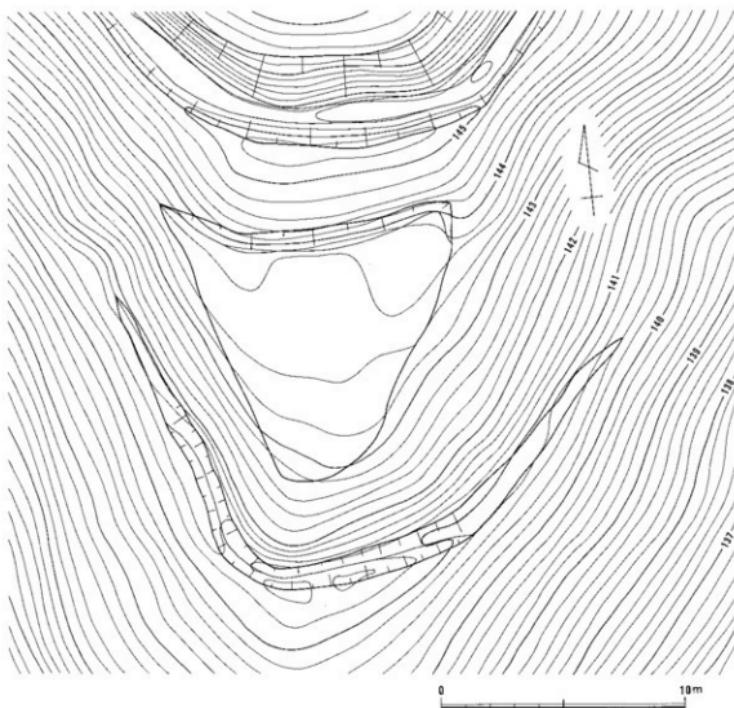
第3節 南側曲輪（第31図・図版28）

主曲輪を形成する尾根の稜線が南に下降する斜面につくられた曲輪である。尾根を平らに整形し、東西に盛土を施し造成している。規模は、基部の幅東西15m、先端部5m、南北10mを測る台形であったと考えられる。しかし、曲輪検出時は、基部の幅東西11m、南北10m、南東側盛土の流失が著しい先端部は3mを測る不正確な四角形であった。

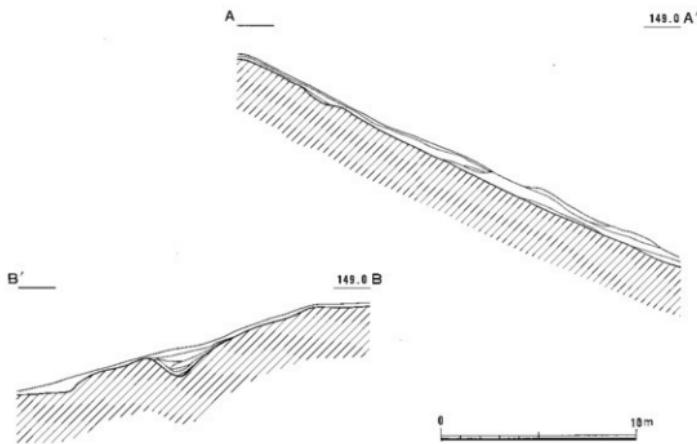
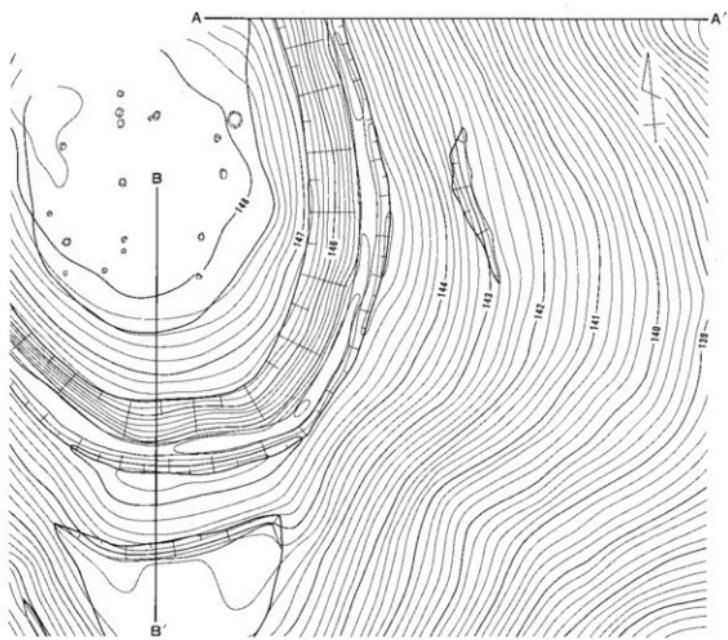
主曲輪との間を結ぶ通路は確認されず、主曲輪とは独立しているようにみえる。また、曲輪の下には主曲輪同様、横堀がめぐっている。横堀は築造時の曲輪の形に沿って作られていたものと考えられる。曲輪との比高差は1.5mである。

横堀は、曲輪に沿って検出されたのみで、主曲輪のある東西斜面にはつづいていないことがわかった。深さは、最大の所で0.4mを測るが、谷側の立ち上がりはほとんどが流失している。

曲輪内には焼土が一箇所あった他は、柱穴や礎石跡は全く検出されず、建物があったとは考えらない。なお、出土遺物はみられなかった。



第31図 慈眼寺山城跡南側曲輪



第32図 慈眼寺山城跡主曲輪周辺部

第4節 横堀（第33図・図版29）

1. 形状

主曲輪の周囲をとりまくU字形の堀である。調査区の北西より検出され、主曲輪に沿ってめぐつている。主曲輪と同様、調査区の北側にもづびしていくものであるが、今回の調査では調査対象範囲外であったため、発掘せず現状のままである。

2. 規模

築造時、幅約2.5m、深さ約3mにおよぶ堀が主曲輪の周囲をめぐっていたものと考えられる。しかし、堀は、主曲輪を造成した東西および、南の盛土部分が流失したため、主曲輪から堀底部になだらかに落ち込んだ状態で検出された。このため、主曲輪にのびる堀の立ち上がりを明確にとらえることはできなかった。また、谷側の立ち上がりは、堀底部よりほぼ一定して0.7m前後である。築造当初、盛土によって整形されていた谷側の立ち上がりも、流失による削平によって正確におさえることはできなかった。検出した堀は、上面幅約2m、底部幅約1m、深さ約1mを測り、一定の規模をもって主曲輪を取り巻いている。

3. 構造

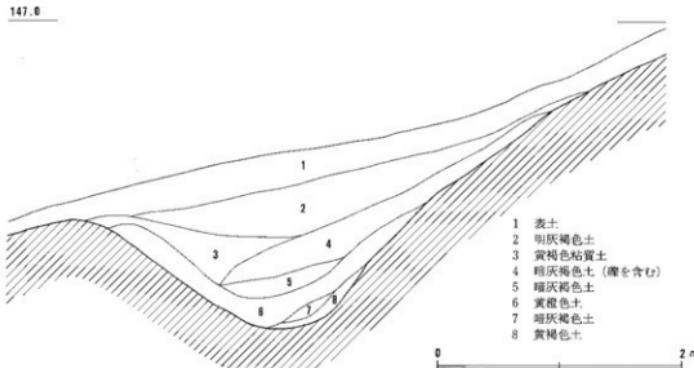
堀は、尾根から傾斜する斜面の地山を堀り込んで造成されている。掘削土は上方の主曲輪と、谷側の立ち上がりの盛土として利用されているものと考えられる。

4. 埋土

堆積状況から堀は、人為的に埋められたのではなく、自然に埋まっていたものである。山城としての機能が終わり、その後、風雨にさらされながら、主曲輪の盛土等が流れ込んで堆積している状態である。

5. 遺物

堀の北西部下層から、石製品（第34図1）1点が出土した。これは、主曲輪上から落ち込んだ遺物であると考えられる。



第33図 慈眼寺山城跡横断面図

第5節 遺物（第34図・図版40）

慈眼寺山城跡からは3点の石製品が出土した。いずれも石造物残欠である。

1は、堀底より出土した花崗岩製の一石五輪塔残欠である。現高13.3cm、最大径10.1cmを測る。ほぼ完存する空・風輪と火輪の一部が残存している。空輪は、最大径が下部にくる形態である。風輪は空輪と径をほぼ同じくし、偏平である。空・風輪の境界は、V字状の溝が廻るだけで、退化した形態といえる。本製品は、西摂の六甲山周辺で製作され、搬入されたものと推定する。花崗岩製一石五輪塔は、量的に多くないが三木周辺でも各所で認められる⁽¹⁾。

2・3は、礎石に転用されていたものである。2は、砂岩質の石材で、平面が長辺17.5cm、短辺15.0cm、高さ16.5cmを測る。上面に長径12.5cm、短径11.5cmを測る平面橢円形の剥離痕跡があり、わずかに立ち上がりが認められる。また、底部は平坦であることから、所謂据え置き式の一石五輪塔地輪部と推定する。礎石転用にあたり、五輪塔水輪部以上を打ち欠いたものとみられる。砂岩は和泉産のものではなく、三木市東部、明石川流域で産出する在地のものとみられる。本石材は、風化により剥離・崩壊しやすい材質であるが、墓碑等の石造物として三木市内に流通している。なお、これと同一の石材を用いた一石五輪塔は神戸市西区吉田南遺跡での出土例がある⁽²⁾。3は、凝灰岩製の反花座である。一部欠損し、2つに割れている。平面は、長辺30.6cm、短辺30.2cmを測る。上部に中央複弁一葉、隅複弁の反花を刻出している。また、上面に長辺22.0cm、短辺21.5cmの基礎部を受ける方形座が薄く造り出されている。

以上の3点は残欠であり、年号等の銘文もないため、所属年代は特定できない。しかし形態から推測して室町時代後半～末と考える。また3点が同一時期のものでなく、いくらかの時期幅をもつと考える。なお調査区内で墓擴とみられる掘込み、藏骨器等の遺物は確認されていない。そこで、これらの石造物が当初より調査地点にあったものでなく、慈眼寺山城築城以降に資材として搬入されたものと推定する。

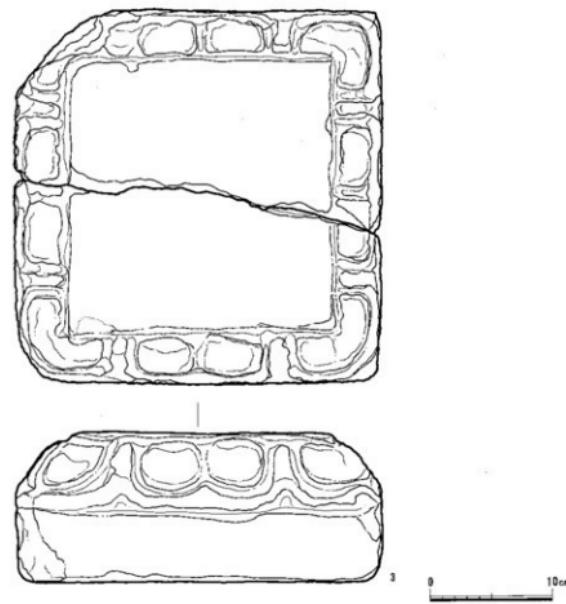
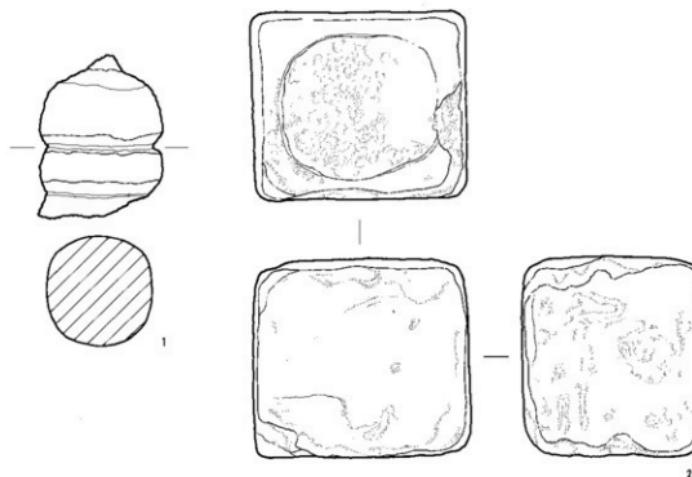
註

- (1) 三木市和田町和田墓地、小野市深山町国井墓地で確認した。また、三木市上ノ丸雲龍寺墓地にも天文八年（1539）銘のものが所在する。（浅田芳朗『播磨石造物占銘資料』1962 総芸舎）
(2) 兵庫県教育委員会『吉田南遺跡（足田地区）・北王子遺跡発掘調査報告書』1995

第6節 小結

今回の調査では、山頂に築かれた主曲輪は周囲を堀で囲し、南側斜面に小規模な曲輪を配した構造をもつ山城跡であることが判明した。しかし、山城跡の南側半分を発掘したにすぎず、慈眼寺山城跡の全容を明らかにするには至らなかった。

慈眼寺山城跡は、今回調査の対象にならなかった調査区北側にも主曲輪がさらにつづいている。そして、南側斜面で検出されたような曲輪が、派生した尾根上に数筋展開する、北に広くひろがる城郭を形成しているものと考えられている。これは、南方面の三木城あるいは、南東方面の平井山本陣跡を眺望できる位置にあり、南に視界が開ける一方、古くから尾根筋を利用した山道に城を構えることで、三木城を包囲・監視する目的のほかに、三木城につながる補給路を断つために築かれた山城であったと考え

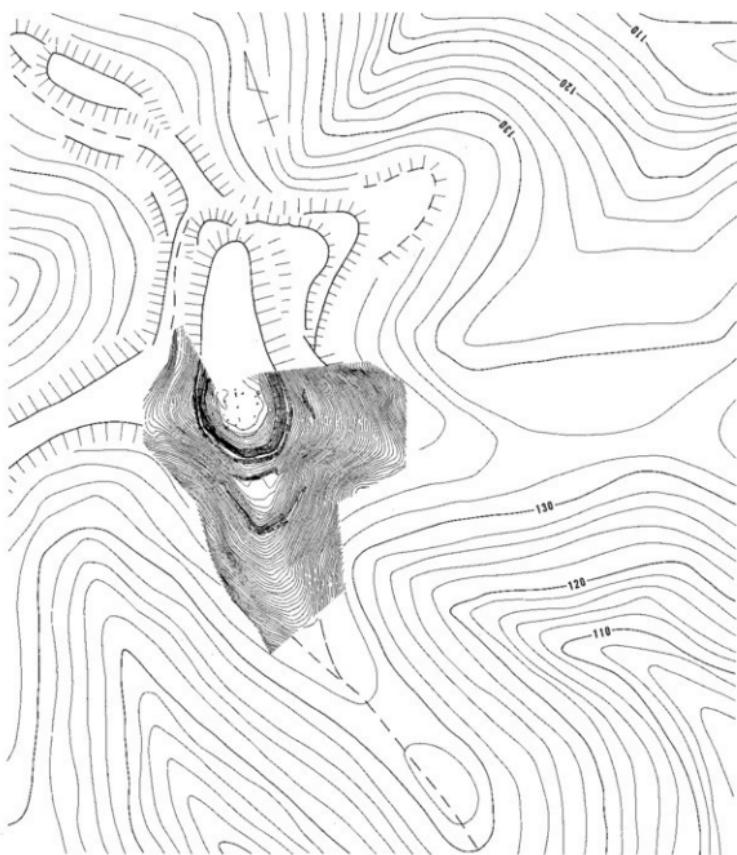


第34図 慈眼寺山城跡出土石製品

することができる。このことから、慈眼寺山城跡は、三木城攻めにおける陣城群の中でも極めて重要な拠点のひとつであったと考えられる。

また、主曲輪上から発見された礎石建物跡は、礎石の大きさから判断しても一時的につくられたものであるといえる。このことは、主曲輪の周縁を堀がめぐり、曲輪を重ねる構造をもつことに加え、この山城遺構が、天正6年から同8年にかけての秀吉による三木城攻めに築かれた短期間の臨時の陣城であったと考える要因のひとつである。

なお、虎口等の山城遺構にとって不可欠な施設が、今回の調査区内で発見できなかったことは、調査区外にその存在が考えられ、全容を明らかにするとともに今後、なんらかの形で慈眼寺山城跡の範囲を調査する時に残された課題であるといえる。



第35図 慈眼寺山城跡調査後縄張図

第5章 加佐古墳群3・4号墳の調査

第1節 遺跡の概要

1. 周辺の古墳

美濃川をはさむ丘陵上には古墳が多く築かれている。発掘調査等での内容が明らかになっているものはわずかであるが、総数は300基以上に達する。特に古墳が集中するのは、美濃川と加古川の合流点の東北の丘陵である。ここには樅山古墳群・正法寺古墳群などの規模の大きな古墳群がある。古墳の時期は不明なものが多いが、いずれも古墳時代後期の群集墳であると推定する。

美濃川を上流に遡っていくと、古墳群の規模は次第に小さくなる。美濃川左岸の高木古墳群を除くといずれも10基未満の古墳からなる。この中で比較的まとまった古墳群があるのが、現在の三木市街地の北側の丘陵（平田・加佐・跡部古墳群）と美濃川・志染川の合流点の周辺（与呂木・大池古墳群など）である。このうち発掘調査が行われているのは、加佐古墳群1～4号墳と大池7号墳である。大池7号墳は山陽自動車道建設にともない兵庫県教育委員会が調査をおこなった。6基の木棺を直葬する6世紀中葉の古墳である。須恵器・土師器のほか、鉄刀、鐵鎌などが出土している。

2. 加佐古墳群の調査（第36回）

『三木市の古墳』⁽¹⁾には加佐古墳群として9基の古墳があげられている。美濃川右岸の段丘上から丘陵の頂部にかけて南北に連なっている。このうち加佐古墳群1・2号墳は三木高校建設の際に三木高校郷土研究クラブが調査を行っている。1号墳は横穴式石室を埋葬施設とし、組合せ式家形石棺を納めていた。出土遺物は須恵器・土師器のみである。時期は6世紀末～7世紀初頭であろうか。2号墳は須恵器が出土したのみで、埋葬施設は確認できていない。報告に石材の出土の記述がないので、木棺直葬であった可能性が考えられる。この2基は現存しない。この他は8号墳が三木高校の南側にある池（三ツ池）の中に水没しており、また9号墳はその位置を確認することができなかった。既に破壊されている可能性が高い。

山陽自動車道三木サービスエリア（仮称）建設予定地内に位置するのは、3～7号墳の4基である。このうち6号墳は今回調査した加佐山城跡の主曲輪にあたる。主曲輪を古墳と誤認したようであるが、加佐山城跡の調査中に盛土内から古墳時代の須恵器が出土しており、城として造成がおこなわれる前に古墳が存在していた可能性が高い。ただし古墳の痕跡は全く残っていなかった。5・7号墳については、これに相当すると思われる古墳状隆起の試掘調査を実施したが、自然地形であった。3・4号墳のみ試掘の結果、古墳であることが判明し、これについて全面調査を実施した。

3・4号墳は、加佐山城跡から南東へのびる尾根上、標高131mのところにあり、尾根を切断した溝を挟んで接している。古墳の西側のみ尾根が続き、東・北・南の3方は急な傾斜の斜面になっている。古墳からは、南側の美濃川沿いの平野が一望できる。

註

- (1) 岡村覚二・岡本道夫『三木市の古墳』1966年

第2節 3号墳

東側の古墳である。4号墳との間は幅2.5mの溝で画されている。東側および南側は自然地形の傾斜変換点があり、ここが墳端と考える。北側は斜面が続き、墳端は明確でない。

盛土は全く確認できなかったが、埋葬施設の深さからみて、墳頂部を覆う程度の盛土が施されていた可能性は考えられる。しかし自然地形と著しく異なるほどの加工をおこなっていたとは考えられない。墳形は方形を意識していたようである。

古墳の規模は東西15m、南北14mほどである。高さは、4号墳との間の溝の底から0.5mである。

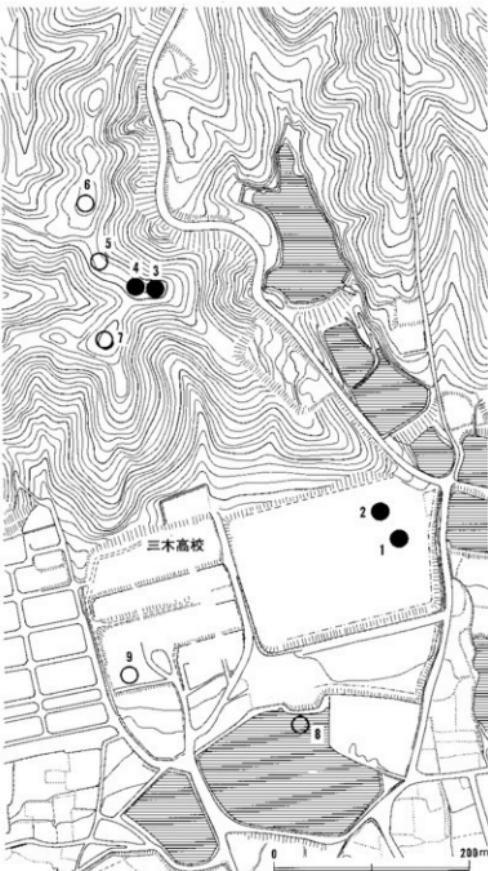
墳丘には2基の埋葬施設が南北に並列してあり、北側を第1埋葬施設、南側を第2埋葬施設と呼称する。いずれも割竹形木棺直葬である。

第1埋葬施設は、墓擴の大きさが長軸3.0m、短軸0.8m、深さ0.33mであり、平面形は長方形、底面は棺の形状にあわせて

丸く掘られている。棺材は残っていなかったが、幅0.48m、長さ2.15mの削竹形木棺の痕跡が検出された。主軸は尾根と平行するほぼ東西方向を向く。頭位は不明である。

第2埋葬施設は墓擴の大きさが長軸2.8m、短軸0.8m、深さ0.2mであり、底面はわずかに丸く掘りくぼめられれている。これも棺材は残っていなかったが、幅0.47m、長さ2.08mの削竹形木棺の痕跡が検出された。主軸は尾根に平行な東西方向を向く。頭位は不明である。棺底にあたる部分には、赤色顔料が残っていた。棺内面に塗布された顔料の痕跡であると判断する。

出土遺物は、第1埋葬施設の棺内北東側で、鉄製の刀子（7）が1点出土している。床面からは浮いた状態で出土したが、棺内副葬品と考える。第2埋葬施設には副葬品は無く、また墳丘上や周辺の斜面からも土器等の遺物は全く出土していない。



第36図 加佐古墳群分布図

第3節 4号墳（第41~42図・図版35）

西側の古墳である。3号墳との間は溝で区画されており、西側も幅1.5mの溝で区画されている。北および南側は斜面が続いているが、墳端は明瞭でない。3号墳同様、これも盛土ではなく、加工は認められない。古墳の規模は東西18m、南北10mほどである。墳形は長方形を意識しているようである。

墳丘の南西寄りに1基の埋葬施設がある。墓壙の大きさが長軸2.7m、短軸0.75mであり、底はU字形に掘られている。棺材は残っていないが、幅0.5m、長さ2.1mの割竹形木棺の痕跡が検出された。棺内からは遺物の出土はない。

墳丘西側の溝の外側に長軸1.2m、深さ0.25mの土坑（SK01）があり、ここから須恵器が6個体出土している。古墳の周溝を切り込んで作られているが、埋土は周溝と同一である。

第4節 遺物（第43図・図版40）

1~6は4号墳西側の土坑SK01内から出土した須恵器である。1・2は杯蓋である。外面は4分の3以上の範囲に回転ヘラケズリが施されており、稜はシャープである。口径は13cmである。3~6は無蓋の高杯である。杯部と脚部にシャープな棱をもつ。杯部の底部は4分の3以上の範囲に回転ヘラケズリが施されている。口径は13~13.5cm、高さは10~11cmである。これらはいずれも陶邑編年のTK47型式に相当する時期のものである。

7は3号墳第1埋葬施設から出土した小型の鉄製刀子である。茎先端部を欠失するが、現存長4.8cm、刃部長4.2cm、刃幅0.8cm、刃厚0.2cmである。刃部には木製の鞘が遺存している。

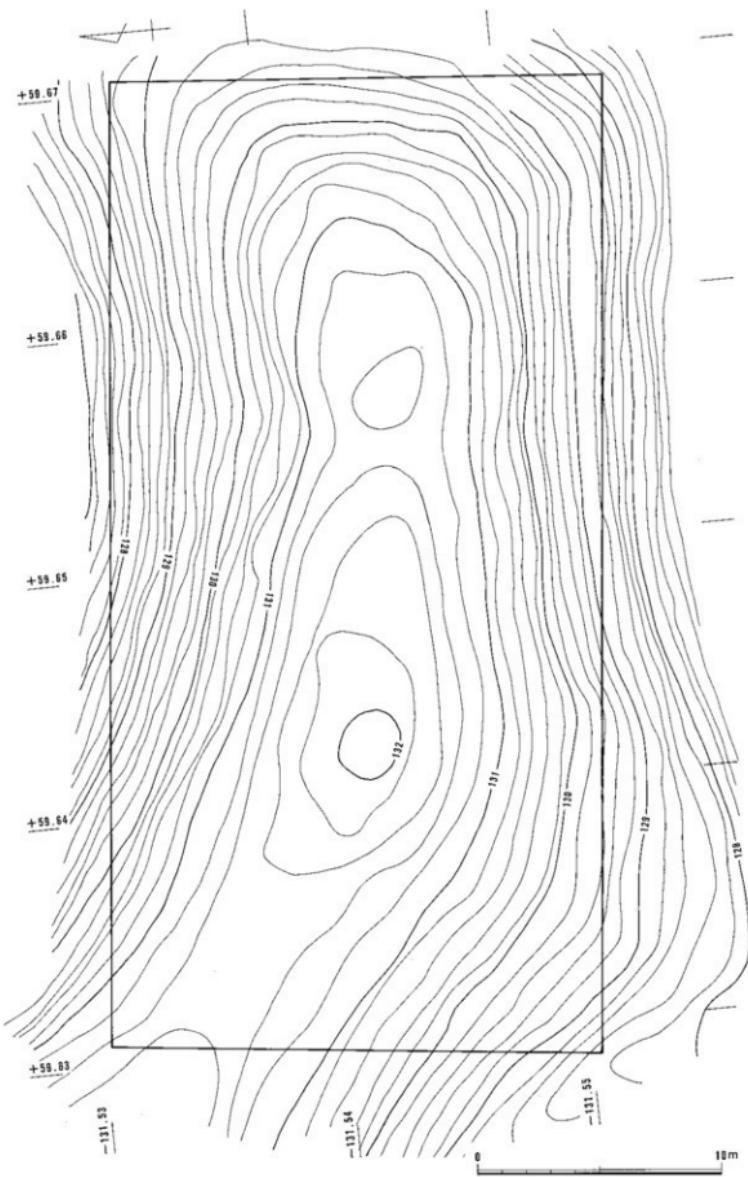
8は遺構検出中に出土した銅鏡である。「政和通宝」と陽鏡されている。政和通宝は中国・南宋の政和年間に初鋤されたものである。

第5節 小結

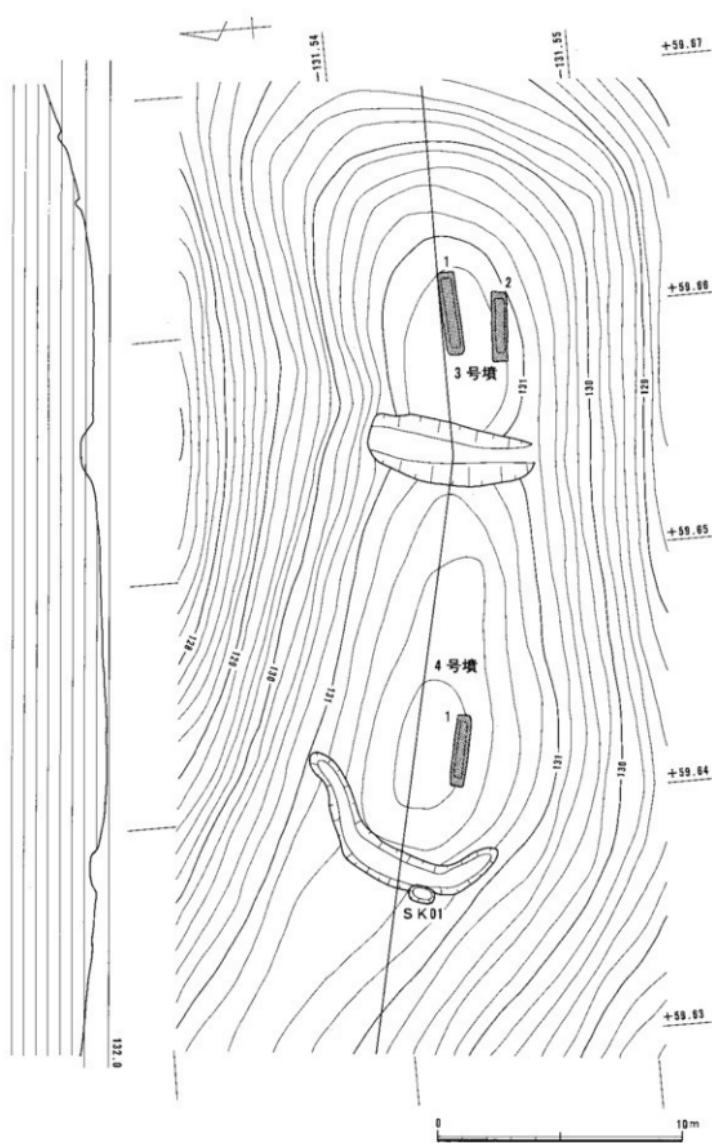
加佐古墳群4号墳は出土した須恵器から5世紀末の年代が与えられる。3号墳も、4号墳と溝を共有していること、構造が共通していることから同時期のものであると判断する。ただし、同時に築造されたものか、どちらかが先行して築造されたものは不明である。

古墳はいずれも明確な墳丘をもたず、尾根を溝で区画しただけの簡単な構造であり、割竹形木棺を直葬する。このような古墳の類例としては三木市別所町の高木古墳群26・27号墳などがあり、盛土を施した円丘に箱形木棺を直葬する6世紀前半の古墳とは著しい違いをみせる。このような単純な構造の区画墓は弥生時代の台状墓以来の伝統の中にあるものであり、これが5世紀末まで残ることが発掘調査の結果明らかになった。

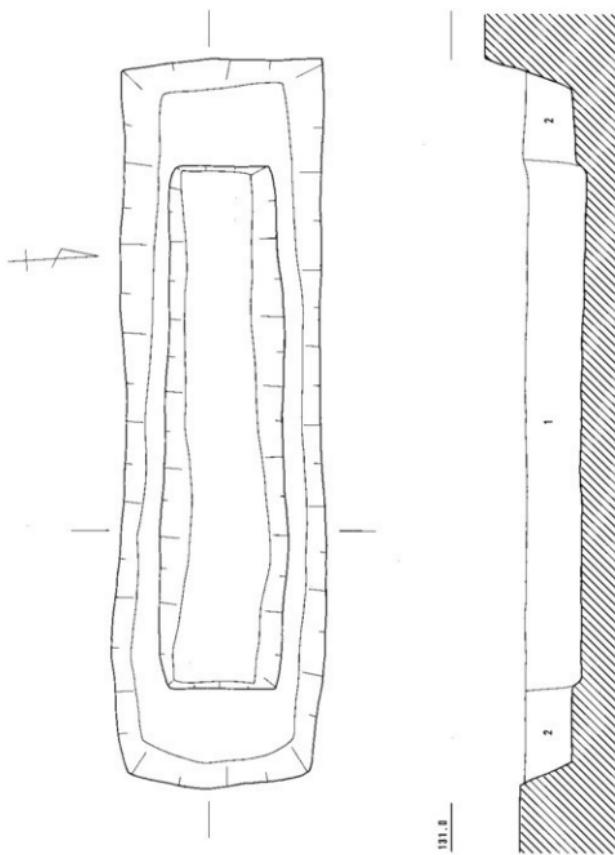
加佐古墳群は3・4号墳の築造からその形成が開始されるが、3・4号墳以降の古墳は横穴式石室・土器の副葬といった、一般的な「後期古墳」の要素を備えている。古墳群形成の契機となった古墳が伝統的墓制をとるという点は、先にあげた高木古墳群と同様である。この現象は、群集墳形成を可能にした条件が他の集団よりも早く整ったため、新しい墓制を受け入れる前に群集墳の形成が始まったと考えることもできるが、今後更に検討すべき課題である。



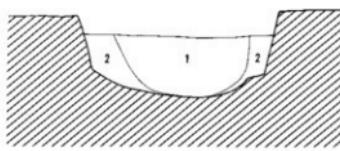
第37図 加佐古墳群3・4号墳調査前測量図



第38図 加佐古墳群3・4号墳調査後測量図

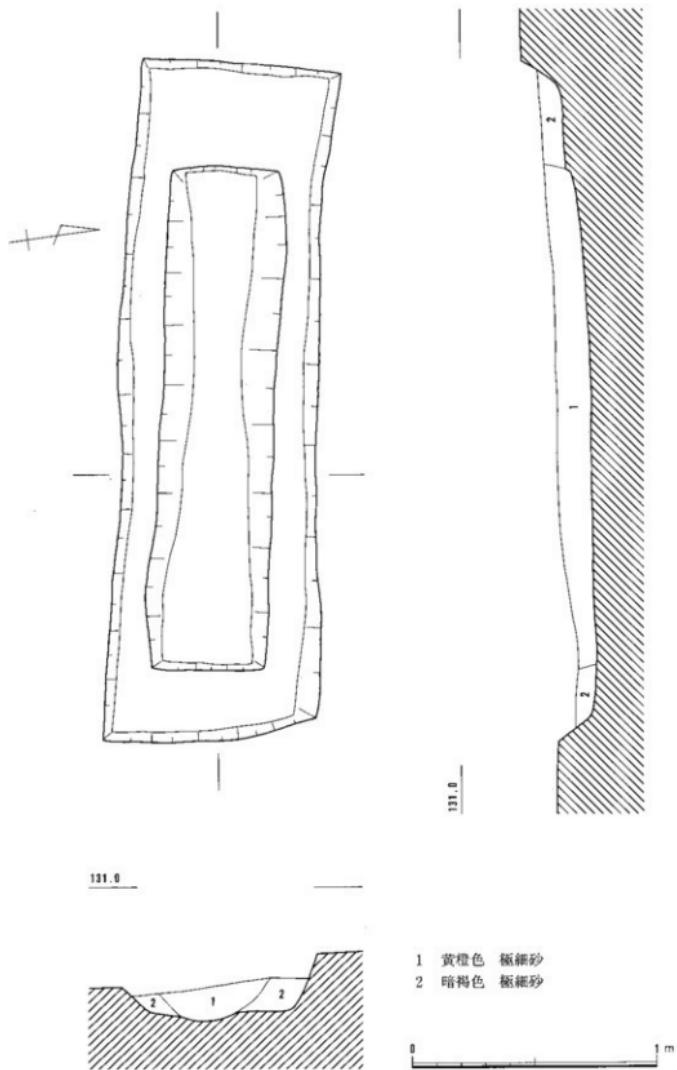


131.0

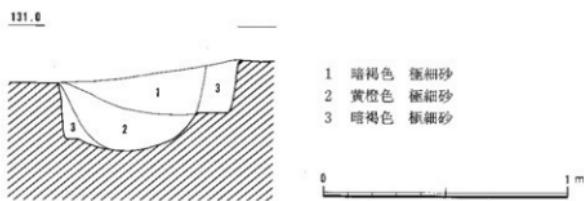
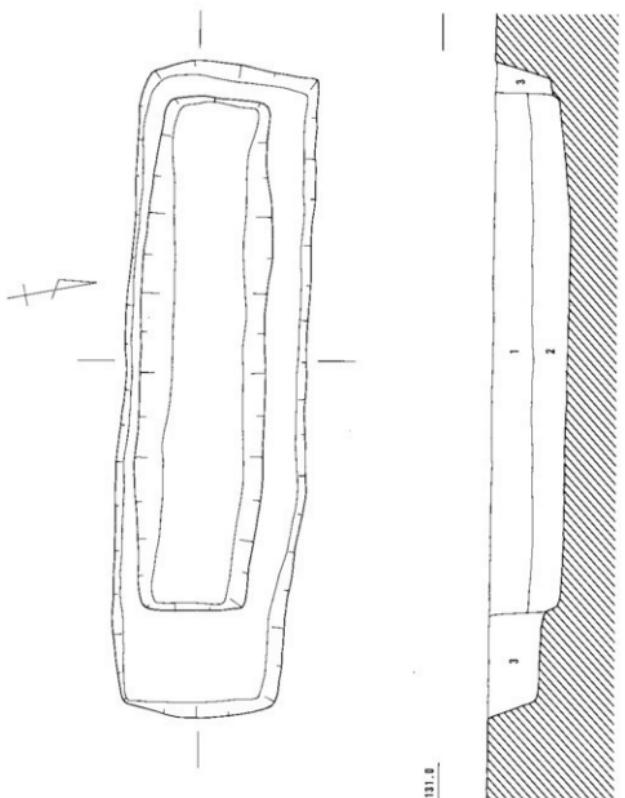


1 黄橙色 極細砂
2 暗褐色 極細砂

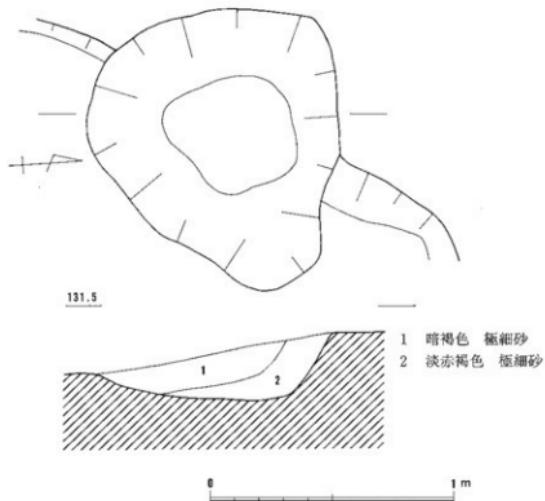
第39図 加佐古墳群 3号墳第1埋葬施設



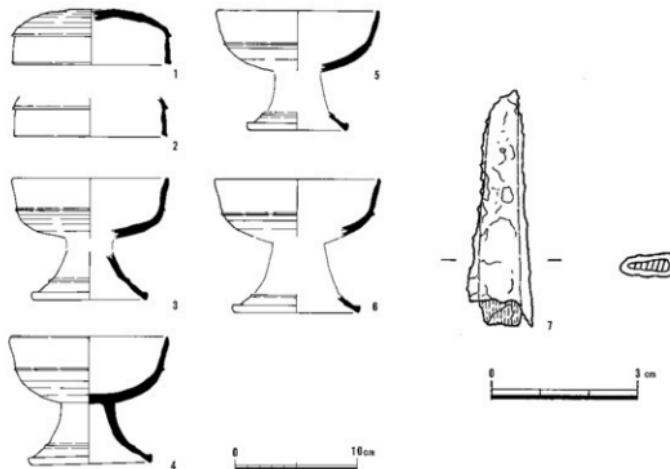
第40図 加佐古墳群 3号墳第2埋葬施設



第41図 加佐古墳群4号墳第1埋葬施設



第42図 加佐古墳群4号墳SK01



第43図 加佐古墳群出土遺物

第6章 三木城包囲の付城群の調査

第1節 付城群の遺構

1. 君ヶ峰城（第44図・図版36）

所在地 三木市宿原字赤松谷1264～23番地他

調査期間 昭和63年4月1日～30日

調査に至る経過

調査地は三木城跡から南東へ約1.5kmのところに位置する。「播磨鑑」では「大塚町上君ヶ峰」と記載され、「木下与市郎」の付城となっている。昭和63年に総合運動公園及び中学校（現三木東中学校）建設に伴って発掘調査を実施することになった。

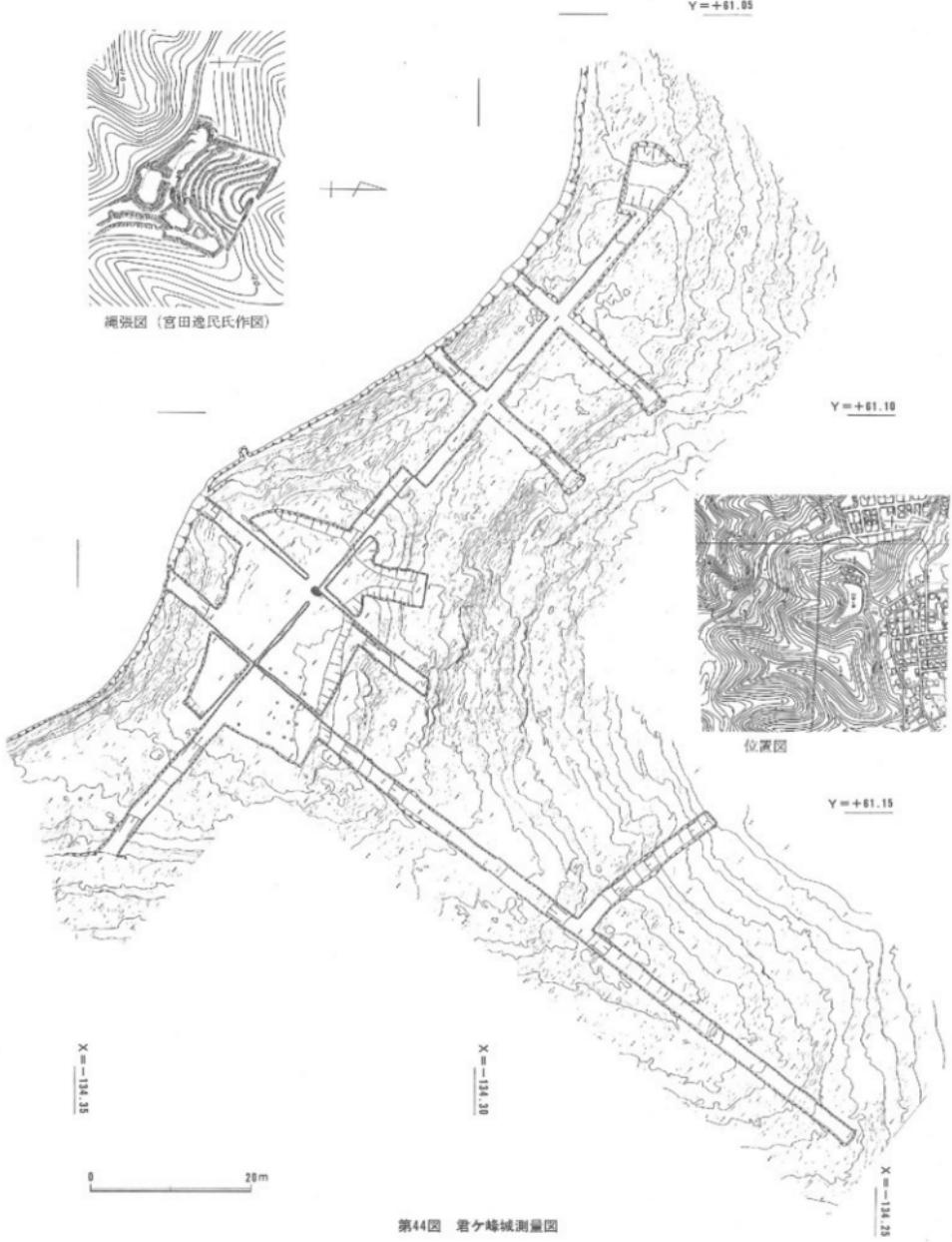
遺跡の現状と調査の概要

遺跡は南東より張り出した丘陵が二位谷によって開析された東側の尾根に立地する。付城内からは、三木城の出城と考えられている宮ノ上の要害、鷹ノ尾城を確認することはできるが、三木城は確認し難く、北西へ伸びる尾根の先端に移動すると確認することができる。さらに「播磨鑑」に記載されている「二位谷奥」に相当する付城が南西約0.5kmのところに存在し、城内より確認することができる。以上の場所に位置する。

表面観察によると主郭を中心に北西と北東に伸びる尾根に1カ所ずつ郭が存在する。この二つの尾根に挟まれた谷部に帯郭が體壇状にいくつも存在しているようである。南西に伸びる尾根には郭は認められなかった。土塁は主郭では東・西・北の三方向に巡っており、北西の郭の南側と先端部分にも認められる。さらにその続きに堀切が認められる。虎口は主郭の北側に存在し、北西の郭より伸びた帯郭状の部分を介して北西の郭だけでなく、北東の郭とも連絡できるようになっていたと考えられる。調査は主郭を中心に北西、北東尾根などに幅2mのトレンチを16カ所設定し遺構の有無、土層堆積の観察など確認調査を行った。主郭の東側で礎石を検出したため、主郭部分について全面調査を行った。

調査の結果

主郭の北東部分で合計14個の礎石を検出し、その検出状況から4×4間（約7.2×7.2m）の片庇付きの礎石建物を推定している。建物の西側10mのところに、長径1.5m、短径1.0mの橢円形の焼土塗を検出した。北側では表面観察で確認した虎口が幅1.5mで検出した。土塁は北西・北・北東のトレンチの断ち割り状況から内法約0.8～1.0m外法約1.0～1.8mで版築が認められた。つぎに北西の郭、北東の郭では建物等の遺構の検出は無かった。また表面観察で確認した北西の郭の先端の土塁はトレンチでは検出されなかった。さらにその続きの堀切は底幅約6m、深さ1.7mである。北西の郭より北東へ伸びる帶郭は幅約4.5mである。



第44図 岛ヶ峰城測量図

最後に出土遺物であるが、極めて少なく、土師器壺・擂鉢・備前焼壺、丹波焼擂鉢、中国製磁器（白磁皿・青磁皿・染付）、鐵釘、それに「熙寧元宝」（1068年初鑄）の宋錢を含む2枚の銅錢の十数点のみである。

2. 小林八幡神社遺跡（第45～46図・図版37～39）

所在地

三木市福井字三木山地内 小林八幡神社境内

調査期間

1次調査 平成5年1月22日～4月10日

2次調査 平成6年1月25日～3月30日

調査に至る経緯

調査地は、現在では享保13年（1729）に建立されたと伝えられている八幡神社境内である。しかし天保13年（1842）にかかれた『三木城地圖』という絵図が発見され、それをもとに宮田逸民氏が現地踏査を行った結果、三木合戦時（天正6年（1578）～8年（1580））に織田方が築いた付城と比定されている。

平成3年に市道三木山幹線道路の延長計画が決定したことに伴い、三木市建設部土木課より遺跡有無の照会があった。計画では路線が当遺跡を通過するため、発掘調査を実施することになった。

遺跡の現状及び調査の概要

遺跡は市の南部に位置し、高木方面より南東に延びるシクノ谷という開析谷で分断された丘陵の南側にある西へ張り出した尾根の先端部に立地する。周囲には北側をシクノ谷、遺跡西側のところで分岐した支谷によって三方を谷で囲まれ、天然の堀のようになっている。『三木城地圖』によれば、法界寺より南東に延びる多重土塁線の一角に築かれている。付城は三木城から南東約2.2kmのところに位置し、とても確認することはできない。しかし、西へ約0.9kmのところにある当時の主要道である明石道と考えられている方向への眺望は開けている。規模は境内を中心東西約130m、南北約40～60mの範囲である。表面観察では境内より西へ広がり北西隅に櫓台をもつ主郭と、さらに西側に岸が崩れて不明瞭になっている郭と思われる平坦部、東側の馬出し状の郭より構成されてる。

神社建立の際、主郭の東半分は削平を受け、北側土塁は本殿によって、また南側土塁は参道によって一部消滅しているが、それ以外の部分は比較的良好な状態で土塁や郭が残存している。調査地は境内西側の計画路線内約600m²を対象とした。調査は幅50cmのトレンチを東西両端と十字に交差するように4本設定し、土塁の断ち割りと断面土層を観察しながら遺構面の検出を行った。

調査の結果

郭は約30cmの整地層の上に南西方向にゆるやかな傾斜をつけて成形している。中央部から北側土塁にかけてさらに30～50cm程の盛土をおこなって、約10×12m以上の方形を呈した基壇状の高まりを造って



第45図 小林八幡神社遺跡測量図

いる。その法面には地固めと考えられる拳大の石が敷きつめられている。その基壇状部分で東西方向に設定したトレンチより、整地層を切り込んでいる柱穴掘方を4箇所検出している。このことを踏まえて二次調査を行った結果、約1m四方の隅丸方形の掘方に直径約40cmの柱穴のある東西4間、南北3間半（8×7.4m）以上の南側に片庇付きの掘立柱建物が確認された。

この他に東西5間、南北2間（10×4m）の総柱の掘立柱建物、東西1間、南北3間（1.4×5.5m）以上のもの、東西1間、南北4間（2×7m）以上の掘立柱建物の3棟が調査地全体に広がって検出した。のことから、共伴遺物がないため時期は不明であるが、付城が築かれる以前に何らかの建物が存在し、その整地層を利用して成形されたものと思われる。

郭内の検出遺構としては、一辺70cmの方形土坑3箇所と直径約70cmの円形の集石遺構がある。方形土坑はいずれも深さ約10cm程度で、埋土は炭混じりの焼土であるが焼けた痕跡は認められなかった。集石遺構についても深さ40cmであるが、共伴遺物もないので性格は分かららない。

なお付城に伴う建物跡については、礎石や柱穴の検出がなく存在を明確にできなかった。

土塁は調査地内では郭の西、南、北の三方向に巡っている。西側土塁は調査地外であるが、南端部に虎口が認められ、そこから堅堀状のものが南側斜面に確認できる。北側土塁はシクノ谷に面した切崖になっており、部分的に崩壊が認められる。基底部は整地層に凹状に盛土し、粒子の細かい土を版築している。幅は2.8m、内法高は0.5~1mを測る。南側土塁は整地層より直接小疊混じりの砂質の強い土を版築している。基底部は幅4.4m、内法高0.7mで外法高約2mを測る。土塁は東の調査地外のところまで延びて不明瞭になっている。いずれの土塁の基底部内法にも拳大の礎で地固めを行っている。また調査地の東端部より郭が南へ張り出す形になっており、それに沿って土塁が新たに延びている。おそらく横矢掛かりの機能と考えられる。

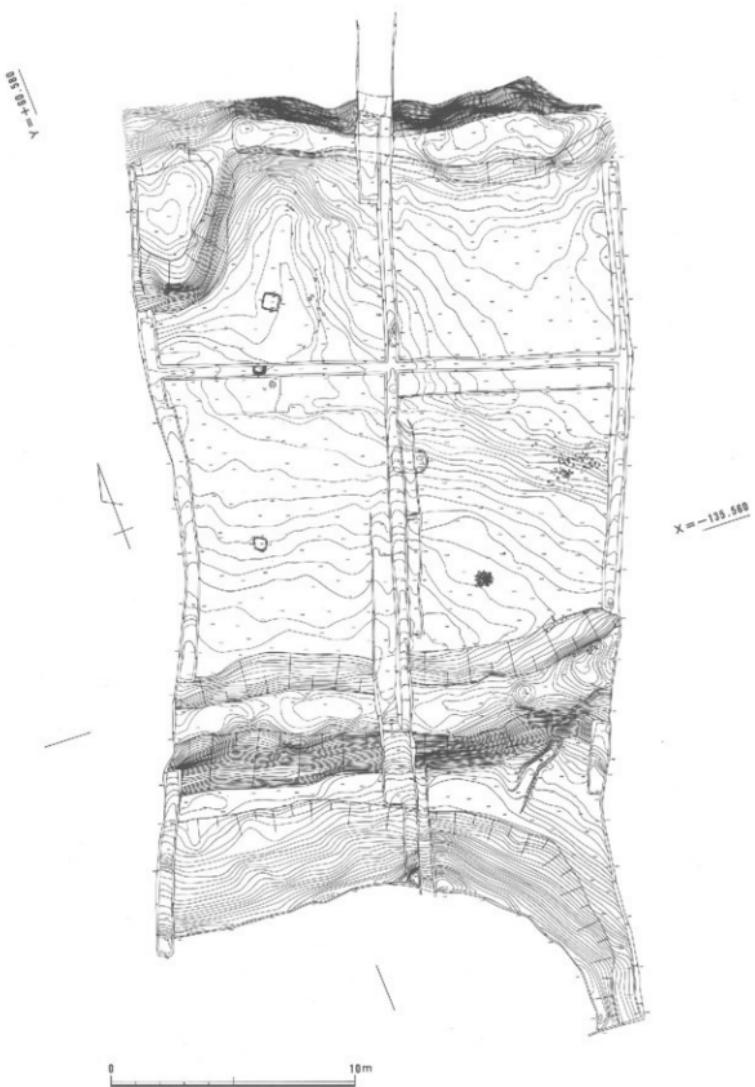
北西隅の櫓台は、北側土塁が西側へ折れ曲がった角を利用し、台状に土を積み約10m²の空間を築いている。ここも礎石や柱穴の検出がなく、建物の存在を明確にできなかった。

南側土塁の外法据部で幅1~2mの平坦部を土塁に沿って東西方向に検出した。この平坦部は人が1~2人通れる空間であることから、通路などに利用された犬走りと考えられる。犬走りは、西側へは不明瞭ではあるが郭と考えている平坦部へ続き、虎口より主郭へ進入できるようになっているものと推測される。また東側は南へ張り出す土塁に沿って続いているものと思われる。

遺物は丹波焼の擂鉢が2点、鐵砲玉が1点いずれも郭内から、鐵釘5点、古銭3点がそれぞれ郭の内外より出土した。古銭については2枚が『皇宋通寶』(1039年初鋤)、他の1枚が『元□通寶』と1字欠けているが、おそらく『元豐通寶』(1078年初鋤)か『元祐通寶』(1086年初鋤)と考えられる。

まとめ

1. 小林八幡神社遺跡は時代は不明であるが掘立柱建物群と三木合戦時の付城と二時期の遺構が認められ、付城は掘立柱建物群の整地層を利用して、南西方向に傾斜をつけながらさらに大がかりな盛土を行っている。
2. 南側と北側の土塁の構築に違いがみられる。また北側と西側の土塁の角を利用して櫓台を築いている。
3. 横矢掛かりや犬走りが認められる。
4. 北側（三木城方向）よりも、南側、西側（明石道方向）を意識して築かれているものと思われる。



第46図 小林八幡神社遺跡調査区測量図

第2節 付城群の遺物（第47図・図版41～42）

以下、君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡の遺物について報告する。

1. 君ヶ峰城

当城の遺物は土師器壺・擂鉢、備前焼壺、丹波焼擂鉢、中国製磁器（白磁・染付・青磁）、鉄釘、銅鏡がある。遺物は細片が多く良好な出土状態のものはないが、備前焼壺（4）はかろうじて図上で完形に復元できた。実測点数は合計11点である。

土師器（1～3）壺と擂鉢がある。壺（1）は底部片で肉厚の製品である。底径9.8cm、残存高4.9cmを測り、底部は糸切りによる切り離し痕跡を観察する。また、胴部下端には大きくケズリを施す。擂鉢は2個体を実測した。2は口縁部片、3は底部片である。

備前焼（4）壺1個体がある。口径12.6cm、底径21.0cm、胴部径28.2cm、器高33.8cmである。肩部から胴部上半に2条の波状文を施し、胴部にヘラの線刻が観察される。

丹波焼（8～10）擂鉢3点を実測した。8は口縁部片、9は胴部片、10は底部片である。8は口径28.4cmを測り、口縁部の内外面をヨコナデするもので、端部を軽くつまむ。3個体とも内面はナデによって平滑に仕上げ、1本描きの擂目を入れる。外面には粘土紐のつなぎ目を中心に指頭痕跡を残す。10の底部は使用痕が顕著である。

中国製磁器（4～7）白磁・青磁・染付がある。白磁（4・5）はいずれも皿で4は口径12.4cmを測る。5は口径13.0cm、器高2.8cm、底径7.4cmである。両者とも白濁したやや厚い釉を掛けるが、盤付きの釉は削りとっている。器肉は全体に薄く仕上げ、体部は湾曲しながら立ち上げる。また、口縁部を横方向につまむ。高台は華奢なつくりである。

青磁（7）は輪花の皿である。口径10.9cm、器高3.6cm、高台径6.4cmを測る。

染付（6）は底部の破片である。高台径4.5cmを測る。内面は2重の圓線の中に花文を描き、外面の高台際にも1重の圓線を描く。平らな底部に小さい高台が付く、高台の断面は三角形に近い形状を持つものである。

2. 小林八幡神社遺跡

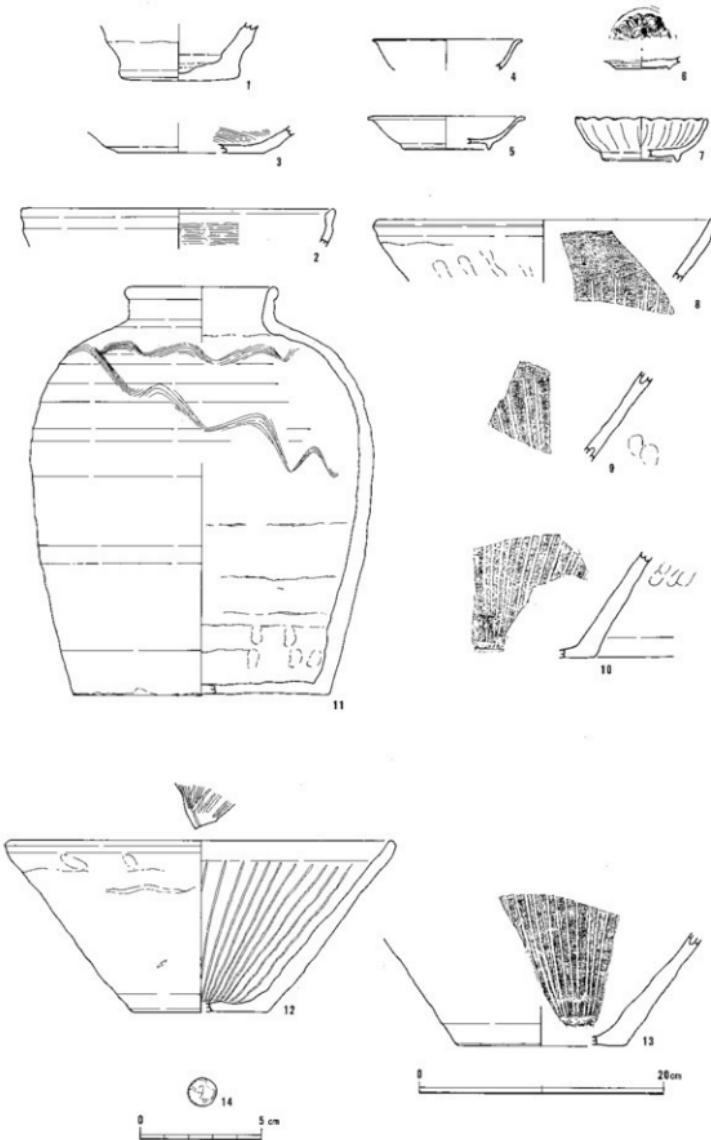
遺物のうち、丹波焼（12・13）擂鉢2点と鉄砲玉（14）1点を紹介する。いずれも曲輪内部からの出土である。なお、丹波焼12は曲輪の正面土と、下層の盛土層の両方から破片が出土している。

擂鉢（12・13）12は口径32.4cm、底径15.0cm、器高14.2cmである。体部が直線的に立ち上がり、口縁部はほぼ断面台形を呈する個体である。内面はナデによって平滑に仕上げ、一本描きの擂目を施す。底部は一部を観察出来るのみであるが、分割線を引いた痕跡が残る。13は底部のみが残存する個体である。底径14.0cmを測る。やはり内面に擂目を施す。外面はナデで仕上げるが若干指頭痕跡などが消されずに残り、下端にケズリが観察できる。12・13とも使用痕が顕著である。

鉄砲玉（14）鉛玉である。重さ8.3g、直径12mmを測る。

3. 遺物について

以上の出土遺物については資料点数が少ないため詳細な検討はできない。但し、鉄砲玉が16世紀後半以降の遺物であることや、備前焼壺を除いた遺物が確実に16世紀代のものであることからすると、付城の時期と矛盾しない遺物群と思われる。備前焼壺は15世紀後半～16世紀初頭と考えられ伝世品である。また、擂鉢に使用痕が認められることから付城内で煮炊きが行われた様子が窺える。



第47図 君ヶ峰城跡・小林八幡神社遺跡出土遺物

第7章 三木城包囲の付城群について

1.はじめに

付城・陣城については、縦張り研究によって各地の事例が紹介され始めるようになっており、こうした事例報告から議論も展開されている。

しかし、多くの事例が紹介され城郭研究にとって重要なテーマではありながら、考古学的な手法から陣城・付城を考察することは未だに活発とはいえない。そこで本項では、三木城包囲戦に伴う付城群（以下本項の文中では三木の付城⁽¹⁾と略して記述する。）について考古学的な調査から検討を行いたい。

2.三木城の陣城群の検討

三木城包囲の付城群で現在その遺構を確認できるものは20例前後であるが、関係遺構ではこの他、付城群をつなぐ多重土塁線や、三木市街から離れた地点に立地する野村城（加古川市）⁽²⁾・三津田城（神戸市北区）⁽³⁾なども広域的には三木城を包囲した付城の1つといわれる。本論ではこれらの内、三木城周辺に立地するものについて検討する。

三木城攻めについては籠城戦が著名であるせいか、籠城戦の物語や別所長治などの人物には関心が集まってきたが、三木城やそれを取り巻んだ織田勢の付城などの遺構そのものにはあまり注意を払われることがなかった。中でも付城は最近まで分布や構造についてはほとんど知られることがなかった。

しかし近年、宮田逸民氏によって遺構の分布や構造が紹介された⁽⁴⁾。宮田氏の踏査の結果、多くの遺構が現在も残っていることが確認され、その構造も織豊政権の付城⁽⁵⁾に見られるものと共通することが知られるようになっている。さらに、宮田氏はこれらの踏査によって発見あるいは構造の判明した遺構と文献資料との比較を行う中で、新たな見解を多く示された。

三木城の攻防は1年8ヶ月という長期間の包囲戦であるが、宮田氏によれば三木周辺に存在する付城遺構がすべて一時期に築城されたのではなく、時間の推移の中で付城の分布や構造に変化があるという。初期の段階では三木城から比較的離れた場所に付城が築かれ、しかも簡易な構造のものが主体となっているが、後半になると付城は三木城に接近する傾向をもつという。そして、三木城の南側を中心に付城が展開する段階には「三木城地図」（天保13年）⁽⁶⁾の絵図に記載される多重土塁線が付城間を繋ぎ、一時は包囲ラインが形成されたという。この推移は実際の遺構分布にも合致しており重要な指摘と思われる。

また、宮田氏・福島克彦氏らは君ヶ峰城・朝日城⁽⁷⁾（兵庫県氷上郡春日町）の調査から、付城の駐屯部を確保する方法として、郭斜面や馬蹄形に囲む尾根地形の内部を階段状に造成する手法があることを提唱した⁽⁸⁾。いわゆる“階段状遺構”と呼ばれるもので、他に吉田・法界寺裏山・通称平井山本陣（平井中村間の山）などの付城でも見つかっている⁽⁹⁾。

一方、中井均氏によれば三木の付城群の⁽¹⁰⁾平井山と君ヶ峰城の構造の相違は、平井山が駐屯を主とする付城であるのに対して、君ヶ峰城は尾根続きの補給ルートを遮断する性格をもっているとし、付城群の中に機能分担のあることを指摘している。

このように、三木の付城群については地表面での遺構分布が明らかにされていると同時に、文献史学的な立場からの検討も進んでいるのが近年の状況である。

今のところ付城遺構の検討で時間的な推移と遺構群の構造や状況の検討にまで迫った事例は三木城籠

城戦に伴う付城を除いては皆無である。繩張り研究が進んでいたという点では、調査は幸運であったといえる。しかし、調査時点では君ヶ峰城跡の調査を除くと考古学的な先行研究自体が皆無であった。また、全国的にみても付城の調査例は少數⁽¹¹⁾で、調査は手探りの中で作業を進めたといってよい。

この他、三木の付城群に関する考察ではないが、織豊系の付城を考察した多田暢久氏の見解が今回の調査の挙げ所となった⁽¹²⁾。多田氏は戦ヶ岳合戦の陣城群が広い平坦地の一角に曲輪を築いていることに着目し、曲輪部が主郭部となり、その周囲の未整形の平坦地は駐屯部に使用したのではないかとした。同様の構造は三木の付城にも見られるもので、織豊系の付城を考える上で参考となつたが、特に、加佐山城跡の調査範囲の決定には有力な意見であった。

付城研究については以上のような見解が示され、今回の調査の指針となった。しかし遺構そのものに対する調査方法や、記録の取り方については暗中模索の状態に近く、調査自身の進行は困難をきわめたといってよい。

3. 付城群の構造と特性

次に、これらの研究動向を検討する中で、付城の規模と城主の問題が気になった。個々の付城は播磨籠⁽¹³⁾によれば一人の武将が1つの付城に在陣したこととなっている。1城1武将の配置というイメージは名護屋城の陣跡の名称に代表されるように、多くの事例で漠然と考えられている。しかし、かならずそうなのであれば付城は各武将の軍勢を配置する上で一定以上の規模と、独立した機能をもつ構造でなければならない。

因みに播磨籠と現地の付城群を照合すると加佐山城跡は杉原七郎衛門、慈眼寺山城跡は有馬法印が城特に比定できる。しかし、両城が収容できる人数は、周辺の未成形部分を入れたとしても数十人が限度と思われ、包囲戦の1翼を担う武将クラスの城としては狭い印象をもつ。少なくとも、百～数百人単位の兵数が籠まるには妥当な広さではない。

一方、逆に1つの付城に複数の武将が詰めた記録も同じ三木の付城群の中に認められる。神子田正則・中西守之・古田重則の3人⁽¹⁴⁾が1つの付城を守備し、毛利方の兵糧搬入を阻止するために働いたというもので、1つの付城に局面によっては重点的に兵力が配置されていたことが知れる。この事実は付城という施設の単位とは全く別次元で兵力の移動が行われたことを示しており興味深い。つまり、付城は1武将の兵力を1か所に収容するために、固定的に築かれた施設とばかりはいえない。また、先の中井氏の指揮のように付城には駐屯を主とする遺構や、他の目的のために作られた遺構など役割の違うものが存在しているのである。やはり、武将配置と付城の1対1の比定は慎重にすべきで、武将の本陣を明らかにするには付城の類型化を行い、武将の本營となるような構造の遺構の抽出を行わなければならないだろう。

付城の存在と武将の配置がそのまま1対1ではないことを述べたが、では包囲勢はどういうまとまりをもって配置されていたのであろうか。やはり当時の配陣を考えると、武将単位の軍勢が核となって包囲勢を構成していたことは疑いがない。従って、大きくは武将ごとにある範囲を受け持つてまとまりを成していたと考えるのが自然である。常に変化している包囲線の構造を的確に把握するためには「中規模域」ともいるべき武将単位の陣立てを把握する作業がやはり不可欠であろう。

例えば、加佐山城跡でも東側の山裾に跡部村山の下の陣がある。この陣跡は主郭部のみが観察できるがその周囲には駐屯部と考えてもよい緩傾斜地形がある。この緩傾斜地形は広い範囲に広がるもので、

あるいは駐屯部隊の大部分を収容することも可能である。そうすると拠点の付城が跡部村山の下の陣で、加佐山城はこの付城の1機能（山道監視⁽¹³⁾）を分担する遺構であるかもしれない。

以上から考えると、付城群の構造を分析するには①個々の付城の構造分析を行い、②付城群の機能ごとの類型化がなされる必要がある。③そして次に、タイプ別の遺構がどのようなまとまりをもつのかという検討作業を経て初めて各付城の機能や包囲戦の構造が分析できるのである。

このような先行研究の成果や付城の検討課題を踏まえたとき、三木の付城群は以下の特性をもつていると考えられる。

①長期の築城戦であるため、残された遺構が1時期の工事によるものではない。現在観察できる遺構は前にあった遺構の上に、さらに拡大・改変、または捨て去って別の場所に築城するなど様々な様態が繰り広げられたものである。一方で最初の頃の遺構がそのまま打ち捨てられたものも存在する。その蓄積が現在の三木城周辺に認められる付城群である。

②時間的な推移に伴って、付城個々の構造や分布が大きく変化した可能性がある。また、付城群の分布の内容についても三木城に接近したり、多重土塁で繋がれるなど各時期で大きく変化している可能性がある。

③付城個々に機能分化の可能性がある。すべてが自立した機能をもっていないことが考えられる。

④多重土塁の存在や付城の機能分担の問題を考えると、個々の付城のみの考察だけでは研究が完結しない。付城を群として把握し、何処にどのような構造の付城があるかという構造研究が不可欠である。

⑤肝心の三木城の縄張り（構造）把握が進んでいない。そのため籠城側の縄張りと付城側の縄張りがどのように違っているのか確実な検討が難しい。

などが考えられる。特に、三木の付城が長時間の蓄積である点は、他地域の遺構が短時間で役目を終える例が多いことと比較すると、大きな特性といえるだろう。

4. 調査の成果

加佐山城跡は地表面観察ではなく、偶然設定されたトレーナによって、土塁の存在が知られ、陣城が見つかった。当遺跡が三木城の陣城群の中で唯一、考古学的な調査で発見された遺構である。しかし、当初の確認調査では陣城の存在は判明したもの、構造を明確にするには至らなかった。ようやく第1次全面調査によって主曲輪とA・B曲輪を中心とし、主曲輪は土塁、A・B曲輪は土塁と横堀で囲まれた構造であることが判明した。

地表面観察で遺構が確認できなかった理由として主曲輪の規模が小さいことや土塁・横堀などの起伏が小さかったことが挙げられる。このことは、慈眼寺山城跡や君ヶ峰城、小林八幡神社遺跡についても共通しており、陣城遺構が城郭遺構として地元の人々に記憶されない1つの要因になっているのではないだろうか。

とにかく、今回の調査によって加佐山城跡は既述のような構造をもつていることがわかった。さらに一般的には自然地形と考えられた駐屯部分にも土塁・横堀が巡らされていたわけで、その成果は大きいものといえよう。

慈眼寺山城跡では主曲輪の周囲に横堀が巡らされていることがわかった。また、主曲輪内部には礎石建物の存在が知られ、郭の造成状況も知ることができた。

君ヶ峰城でも礎石建物や虎口などが見つかっている。小林八幡神社遺跡では現地形の土塁や横堀の築

城工程を知ることができた。特に注目されるのは土塁のみならず調査区北側の大部分が盛土によって曲輪面が造成されていることである。加佐山城跡・慈眼寺山城跡・君ヶ峰城の例からすると三木の付城は最小限の工事で築城するため、地形を大きく改変することはないと思われたが、小林八幡神社遺跡は本格的な工事を行った形跡がある。調査区が限定されたため城域全体についてはさらに調査が必要であるが、同じ付城でも造る意図が異なっていることを指摘できよう。さらに、この付城は下層から数棟の獨立柱建物を検出している。時期は明確ではないが何かの建物を接収してその上に陣城を築いた可能性もある。

以上4例の付城を調査して、共通することは遺物が少なく、生活痕跡が希薄である点がまず挙げられる。本郭部は小林八幡神社遺跡を除くと100m²強から300m²程度と小規模なもので、周囲に簡易な造成の駐屯部が敷設される構造をとる。この点、前述の多田氏の指摘どおりであるが、さらに、加佐山城・君ヶ峰城では横矢の意識もみられた。これらは織豊系の陣城の特徴をつかむ資料として貴重なデータといえるだろう。

以上の点を含め、調査で個々に判明した事項を以下に列記する。

(1). 加佐山城跡

①生活痕跡がない。(無遺物・井戸などの施設が無いなど) ②本郭部(主曲輪)・駐屯部(A・B曲輪)が明確であるが両者とも小規模(さらにいえば階段状の駐屯部を持たない)。③外郭線は横幅・土塁で囲むが小規模。④横矢掛けをもつ、⑤本郭部の造成を大きく、駐屯部の内部はほとんど造成を行わない。⑥内部施設は削平段のみ。⑦虎口は駐屯部が側面から入り、主曲輪が平入り、③・④・⑤・⑧などから全体プランが意図的な設定といえる。⑨城域周辺のみが際立って高くなった場所を選ばず、丘陵尾根のやや奥部に立地する。縄張りは尾根が合流した馬蹄形の地形を利用している。

本城は全面調査が行えたため、築城の工事量について試算することができた。それによれば、本城全体に要した労力は単位面積当たりでは、通常の中世城郭の労力と大差がないがその工事の重点のおきかたは本郭部周辺に集中しており工事量の50%弱を占めている。これに対して、最も広いB曲輪は22%の工事量で築城されており、労力の差は歴然としていた。また、主曲輪の北西背後は小規模な谷地形となっている。しかし、主曲輪を確保するために谷地形を大きく盛土して通路を確保する工事が行われていることも明らかとなった。この工事に要した労力は工事全体の20%を占め、B曲輪に匹敵するものであった。工事量の計算を行うことで築城者の見えない意図を確認することができた。以上から、築城は通常の中世城郭と異なる意識で行われていることが判明した。

そして、①の生活痕跡が認められないことや、②・③の防御施設が中途半端な点から、独立した部隊の長期駐留を目的としない造構という評価ができる。

(2). 慈眼寺山城跡

次に慈眼寺山城跡の特徴であるが、全体を調査していないため推測も含まれるが以下のように考えられる。①生活痕跡は主曲輪周辺は否定的である。②本郭部は山頂の主曲輪、駐屯部は調査区外の東から北側にかけての斜面と思われる。但し、いずれもあまり広くない。③外郭線については結論できないが、主曲輪は小規模な土塁と横幅で囲んでいた可能性が大きい。④横矢掛けの存在は不明。⑤本郭部は南辺(調査区内)を大きく造成する。⑥礎石建物を持つ。⑦虎口は不明。⑧本郭部と駐屯部の存在や横幅の存在は加佐山城跡に類似した構造と考えられる。⑨丘陵尾根のやや奥部に立地する。縄張りは尾根が合流した馬蹄形の地形を利用している。立地という点でも加佐山城跡に類似する。

不明な点を多く残すが①・②・③より加佐山城跡同様、大部隊の駐屯や長期の駐屯を目的とした付城とは考えられない。そして、概ねは加佐山城跡と似た構造と思われるが、横堀が主郭前面で丸く巡る点や、前面南側の小曲輪に横櫓を持たない点、斜面に削平段を持つ点などの相違点も認められる。

(3). 君ヶ峰城

トレンチ調査が主体となった本城については詳細の不明な部分が多いが、以下のことが考えられる。①生活痕跡は若干の焼土や遺物から認められるが顕著ではない。②本郭部は尾根の頂上、駐屯部は主として馬蹄形地形の階段状構造が考えられる。③外郭線は主郭周辺が土塁、駐屯部は尾根地形と土塁と思われる。④横矢掛けは主郭部から尾根道に対して設けられている。⑤本郭部周辺から階段状地形にかけて全面的に造成工事が行われる。⑥礎石建物を持つ。⑦虎口は本郭部が平入り、駐屯部に喰い違い虎口(発掘調査区外)を持つ。⑧選地が前記2者と共通しており意図的である。⑨立地は尾根が際立って高くなった場所を選ばず、丘陵尾根のやや奥部に立地する。そして縄張りは尾根が合流した馬蹄形の地形を利用するなど、やはり前記2者に共通した点が多い。①・⑤・⑥などはある程度の軍事的駐屯を想起させるが規模的にはやはり大きくなかった。三木城に近接するため加佐山城跡などよりは恒常的な使用が可能な施設と考えられる。

この城は調査前の地表面観察の段階で、曲輪構造や横矢掛けの存在を見えており、その点では加佐山城と異なる。廃城になってしまって遺構の起伏を観察できる規模をもっているわけで、明らかに前記2者に比べて大規模な造成を行ったことが窺われる。

(4). 小林八幡神社遺跡

①生活痕跡は若干の焼土や遺物から認められるが顕著ではない。②本郭部は調査区及び八幡神社境内周辺と思われるが詳細は不明。③外郭線は主郭周辺が土塁、東辺は土塁と横堀と思われる。④横矢掛けは調査区外の東側虎口部分に採用している可能性がある。⑤本郭部周辺はかなりの造成を行う。⑥櫓台を持つ他、礎石建物の建っていた可能性がある。また、建物基礎は大きく土盛りをして壇上にする。⑦虎口は2か所に認められるが、何れも調査区外である。⑧段丘面に適地し、開析谷に面して立地する。南背後にも谷が進入するため三方を谷によって分断される。⑨多重土塁線の1角を構成した可能性がある。東側に平地が続くため駐屯地としてはかなりな面積が確保できる。また、現状遺構で観察できる範囲も広い。

調査区の制約から不明な点が多いが櫓台の存在や、比較的広い城域からすると本格的な拠点の陣あるいは駐屯地として利用された可能性がある。また、生活痕跡が顕著でないため調査区周辺は本郭部ないし防御の前面施設の可能性がある。以上である。

これらのことから、考古学的調査を行うことによって明らかにできた。調査によって個々の陣城の構造がより明確で正確になったことは確かである。しかしそれ以上に、生活痕跡の有無、築城の過程、普請の工事量と各郭の工事量の多寡など新たな視点について提示できたことが大きい。また、これに付随して陣城遺構の土砂の堆積状況、そして調査手法について経験を得ることができたことも大きいだろう。

5. 各付城の機能について

先に、三木の付城群について個々の遺構の検討とともに、各遺構の類型化⁽¹⁶⁾を進めなければならないとしたが、以上の4例についてどのような評価ができるのか考えてみたい。

加佐山城跡・慈眼寺山城跡・君ヶ峰城の3城は選地や本郭部と駐屯部の配置などの多くの点で共通し

ている。しかし調査の結果、前2者は君ヶ峰城に比べ城域が小規模であることがわかった。そして、加佐山城跡では本末階段状遺構を設けられる地形を持ちながら造成していないなど、同城は多くの疑問が残る遺構である。慈眼寺山城跡についても駐屯部に若干の造成の可能性は認められるが、同様のことが考えられる。また、調査の成果からすると加佐山城跡は遺構の全面的あるいは部分的な改修は行っていないし、慈眼寺山城跡の調査からも改修痕跡は見つかっていない。つまり、加佐山城跡・慈眼寺山城跡の2城は明らかに臨時の施設と考えられ、恒常的な駐屯を主目的としない遺構といえる。

君ヶ峰城は加佐山城跡・慈眼寺山城跡に比べ本郭部や駐屯部の広さはやや広く、若干の生活痕跡も観察された。もちろん前2者同様、大部隊の駐屯ができる遺構ではなく、防御施設は小作りである。従って、撲点的な付城ではなく、やはり中井・宮田両氏が指摘するような尾根道監視などの機能を主目的とした施設が推測できる。

このような小規模な付城に対して小林八幡神社遺跡の付城は全体的な城域が考古学的に確認出来ていなかが、地形や地表面に残る遺構からすると城域はかなり広域に渡っていると推測できる。そして、造成も自然地形を大きく改變する規模で行なっている。また、櫓台を据えたり、星線に折れや微妙な凹凸を持っており進んだ縄張りを採用している可能性がある。防御施設はやはり小作りな傾向を否めないが、以上からすると撲点的な付城の可能性がある。

この他、多重土壘線との結節点は今のところ明確ではないが、これらの周辺施設との関連を考えるとさらに広範囲に駐屯地を求めることが可能で、全体としては多数の兵力を待機させることができた施設ではないだろうか。残念ながら調査範囲では顕著な生活痕跡を見いだすことは出来なかったが、恒常的な駐屯も行った可能性が強い。

調査した付城を見てきたが、それぞれの遺構の評価については以下のようにまとめられる。本格的な小林八幡神社遺跡を頂点とすると、君ヶ峰城→慈眼寺山城・加佐山城という順序で小規模になってゆく。そして、加佐山城跡に至っては防御施設や規模からいって充分機能を果せる見込みのない中途半端な付城であるという評価が与えられ、逆に小林八幡神社遺跡は撲点的な付城の可能性がある。

次に、この調査によって得られた知識から繩豊系の付城・陣城の特徴について少し付言したい。つまり、付城・陣城の防御施設などが小作りなこと、前線の遺構と後方の遺構の規模差についてである。

今回調査した遺構を観察すると、例えば加佐山城跡の殆どで通れる横堀や低い土壘、小林八幡神社遺跡の小さな櫓台など防御施設はすべて小作りである。さらに、これは未調査の他の三木籠城戦の付城全般の傾向でもある。このようなことは、戦ヶ岳合戦の陣城である東山城⁽¹⁷⁾や、鳥取城の大閣ケ平を除く遺構でも言える。この他、三重県の宮山城⁽¹⁸⁾（三重県久居市）では複雑な縄張りを持ちながら土壘が跨いで通れる程度の小規模なものでしかない。池田誠氏は「籠城して死守する程の防御力はなく、非常に形式的な司令官の陣城」としている。宮田氏はこのような現象を捉えて築城者とその付城を守った兵士が異なるグループであるためではないかと指摘する⁽¹⁹⁾。今のところ、臨時の遺構であるため、短時間内に仕上げることを目的としたためと考えておきたい。

また、前線と後方の遺構の違いについては、宮田氏も既に指摘しているとおりである。加佐山城跡・慈眼寺山城跡などの小規模な遺構は美濃川の対岸（北側）に位置するが、小林八幡神社遺跡などの撲点的な遺構は三木城の南側に位置するものが多い。相手から遠い場所に築城される遺構が簡易になる事例は、やはり大閣記⁽²⁰⁾の戦ヶ岳合戦の項に認められるところである。このように、繩豊系の付城・陣城についてはいくつかの特徴的な性格があるようである。今後類例を調査し再検討したい。

6. 今後の調査に向けて

現在、三木城および付城群の置かれている環境は非常に厳しい。市域周辺は神戸市のベッドタウンとしてニュータウン化が進みあらゆる場所が開発にさらされているからである。そういった中で朝日ヶ丘住宅や二位谷奥などの遺構が住宅や道路の間に残されているのは、むしろ希有のことである。

しかし近年、遺構の実態が明らかになってくるにつれ、多重土塁線の存在など、益々その貴重さが明らかになっている。また、三木の付城群の城郭史上の意義を考えるとき、後に続く豊臣秀吉の攻城戦や築城術の原型という意味で、城郭史の主流となる重要な材料であることは見逃せない。これに加え、調査段階で検討された視点は、全国的な同様の事例を研究する上で多くの示唆を与えており、その検討の資料遺跡としても価値を増しつつある。

この他、慈眼寺山城跡では山頂付近にあった一本松に言い伝えが残っている⁽²¹⁾。このような伝承も戦乱と民衆の関わり合いや、その後の地元民たちの遺跡に対する感情を推し量る重要な資料として貴重である。このようにまだまだ豊富な資料を残している三木城と周囲の付城がより良い形で保存されることを望みたい⁽²²⁾。

今回発掘調査によって、4例の付城の詳細を明らかにすことができたが、調査の実施にあたって、調査手法や調査の方針といったものが確立しているわけではなかった⁽²³⁾。また、地表面からは遺構が観察できない部分も認められ⁽²⁴⁾、調査範囲については一見自然地形と思われる部分にも、注意が必要なことも今回の調査を通して明確になった。調査手法や三木城及び三木の付城群と考古学がどう取り組むかは、未だに課題として残っているといえるだろう。

なお、本文を記述するにあたって、宮田逸民氏には三木の付城全般に渡って、多田暢久氏には付城の構造や他地域の事例について有益な御教示を頂いた。その他多数の方から有益な助言や御教示を頂きました末筆ながら記して感謝いたします。中井均・村上泰樹・高田徹・小網豊・多賀茂治・仁尾一人・高岡徹の各氏（順不同）

註

- (1) 「三木の付城について」 小網豊『日本歴史第558号』 吉川弘文館 日本歴史学会編集 1994年刊 の名称に従った。
- (2) 「播磨野村城の繩張りについて——三木合戦における陣城の構造——」 多田暢久『歴史と神戸』 第30巻6号 1991年刊
- (3) 宮田逸民氏の教示及び同上。(1) 文獻による。
- (4) 宮田逸民氏の三木の付城については「三木城の付城」『城』No.137関西城郭研究会 1992年刊、「繩田政権と三木城包囲網——秀吉による『三木干殺し』の検証——」『歴史と神戸』第30巻第6号 169号 1991年、第7回全国城郭研究者セミナー発表要旨、「播州平井山陣城」『賀毛』第9号 1982年刊などがある。
- (5) 「陣城プランの特徴について一駿ヶ岳陣城群を中心に」 多田暢久『近江の城』第32号 1989刊
- (6) 詳細は上記(3) 文獻による。「三木城地図」天保13年(1842)刊 個人所蔵
- (7) 福島克彦氏・徳原多喜雄氏等の教示による。
- (8) 宮田逸民氏を中心とする城郭談話会の検討によって議論がなされた。
- (9) 宮田逸民氏の指摘による。
- (10) 「羽柴秀吉の築城について」 中井 均 「開館5周年記念特別展 羽柴秀吉と湖北長浜」市立長浜城歴史博物館 1988年刊
- (11) 陣城・付城については調査例は少ないが管見に触れたものを幾つか紹介したい。①黒河西山遺跡(富山県小杉町・高岡徹氏の教示の他『黒河西山遺跡発掘調査報告』小杉町教育委員会1989年刊による。)では方形の本郭部に環濠が閉む構造となり、さらにその外側をやはり小型の横堀が閉む構造が見つかっている。全

域が発掘調査されたため全体の構造が把握できる事例である。しかし、遺物が検出されなかつたことや、このような陣城遺構の検出例がないことから調査者は陣城とは考えていない。だが、高岡氏の教示や遺構写真から判断して、その構造は加佐山城の状況に酷似している。遺構・遺物で明確なものが無いため気づかれていない同様の遺構は多いのではないかだろうか。（本郭部については小杉町教育委員会から調査成果が出されている。）高岡徹氏によれば還暦が立地する丘陵周辺は通称「太閤ケ平（たいこがなる）」と呼ばれている場所で、天文13年の佐々攻めの時築かれた陣城ではないかといふ。②朝日城（兵庫県氷上郡春日町・徳原多喜雄氏の御教示による。）は明智光秀の黒井城攻めの付城といわれる。平成元年に発掘調査が行われた。この結果、北東斜面に階段状遺構が見つかっている。この城はすでにあった中世の城郭遺構を改修したもので、前の遺構には歎息空模なども見つかっている。なお階段状遺構には炭・焼土や多くの遺物が出土しており頗る生活痕跡が認められた。③木本城（和歌山県木ノ本地所在・益田雅司『和歌山市城山遺跡の検討一織豊系陣城の可能性』『文化財学論集』文化財学論集刊行会1994年刊によった。）は標高40mの丘陵頂上部に四方を土塁で囲んだ単郭の遺構で、駐屯部に当たる部分は認められない。山頂部の郭を1段下がった周囲には腰郭状の段が取り巻き、東側の尾根続きは堀切で遮断する。土塁の規模は外側からの比高差4.5m、基底幅10mと大型であるが、郭内部は1辺20mと狭い。南辺には半虎口が設けられ、礎石建物の門址が検出された。調査者は天正5年の雑賀攻めに伴って織田方が築いた陣城の1つと考える。④忍山出城跡（岡山県山上字門・『忍山城出城跡発掘調査報告書』岡山県教育委員会1989年刊による。）忍山城の出城として報告されている遺構であるが、池田誠氏（『美作国における中世城郭の一考察－繩張り研究の視点から見た天正期津山盆地の政治状況』－『中世城郭研究第8号』1994年刊中世城郭研究会による。）によれば両城の構造には差異が認められ、むしろ出城跡の方を陣城と考えるべきだという。遺構は瘦せ尾根の背後を堀切で切断し、城内側に土塁が観察される。しかし、郭内部はほとんど加工がなされず中央付近に若干の段が設けられる程度である。⑤甫崎天神山城（岡山県総社市・『甫崎天神山遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』岡山県文化財保護協会1994年刊による。）備中高松城の救援のために毛利氏が築いた陣城とされる。調査の結果、この遺構は丘陵上に小規模な郭を連ねた構造で各郭には小程度の掘立柱建物が1~数棟配される。通常の中世城郭の構造と大差ないものである。⑥尼子陣所跡（島根県大和村・『尼子陣所跡発掘調査報告書』島根県大和村教育委員会1992年刊による。）郭形状の駐屯部ではなく尾根上に駐屯部を拡大してゆく構造である。全体的には郭を尾根上に連鎖して配置しているもので、中井均氏が指摘する横矢掛かりの溝遺構（第10回日本城郭研究者セミナー発表要旨1993年）を除けば通常の中世城郭と構造的に変わりはない。これらの類例から、三木の付城のように織豊系の遺構については、特殊で特徴的な形態が観察されるが、その他の大名の付城・陣城遺構は特に通常の城郭構造と変わらないことが上げられる。今後の類例の増加を待て再検討の必要があると思われる。

- (12) 上記(4)文献による。
- (13) 江戸時代の地誌、「播磨鑑」平野庸修 宝曆12年(1762)刊 三木の付城について羅列的に陣跡と遺構を併記する形で紹介している。
- (14) 「豊鑑」一
- (15) 上記(10)文献及び、多賀茂治の御教示による。
- (16) 例えば、三木の付城群については現段階では以下のような分類が可能であろうか。
- ①君ヶ峰城のように、比較的痩せた尾根上に立地するもの。尾根上のやや高まった部分に本郭部が見られ、主尾根から谷斜面に向けて馬蹄形に張り出した部分周辺に駐屯部を持つ遺構。君ヶ峰城を代表とする。
 - 君ヶ峰城では本郭部の一端に尾根道あるいは斜面に向けて横矢掛かりをもつ。
 - ②加佐山城跡・慈眼寺山城跡のように①タイプの小規模なもの。
 - ③朝日ヶ丘住宅・小林八幡神社遺跡・法界寺裏山などのようにかなり平坦な台地ないしは丘陵上に立地し、その1角に主郭部を築くもの。駐屯部の面積もかなり広いと思われる。
 - ④平田村山の上のように旧遺構を踏襲したもので旧遺構の縄張りを色濃く残すもの。
 - ⑤本郭部のみのもの。
 - ⑥駐屯部のみのもの。
- これらの内、①・②と③の違いは多分に地形による差が考えられる。⑤・⑥については三木の付城に明確な例がないが、今後見つかる可能性は十分にある。また、③のタイプの陣城は三木城の南側に集中しており、本格的な包囲網の形成と深い関係を持っている。
- (17) 「宮山城」津田誠『中世城郭事典二』村田修三編 新人物往来社 1987年刊行による。
- (18) 同上。(17)文献による。

- (19) 宮田達民氏の御教示による。
- (20) 「中川源兵衛尉が有し要害、多くの取出之城共を隔て、敵あひの遠きを頼とし、普請以下かた計にこしらへ候なり。」『太閤記』小瀬甫庵 桑田忠親校註 岩波書店 1943年刊によった。
- (21) 慈眼寺所蔵の県重宝文化財の梵録（延慶二年四月十六日铸造 口径一尺五寸）は、秀吉が佐伯寺（加古川市東神吉）からもってきたもので、「播磨船」にみられる「一本松」に吊るされ、城攻中、自家の陣籠にしたと伝えられる。（一本松については図版24参照、但しこの松は数代を経たもので、当時の松ではないという。工事と共に伐採される。株は慈眼寺が保管する。）また、三木の籠城戦とその後の地元氏との関係については既に宮田氏の優れた考察がある。慈眼寺は祝融山慈眼守（しゅくゆうざんじげんじ）という。宗派は普潤宗、大化四年（648）法道仙人の開基と伝えられ、暦応二年（1339）赤松則村円心入道が堂宇を建立した。天正年間（1572～1591）当時、別所氏による保護を受けていたが、秀吉による三木城攻囲中は、背後の山頂に付城（慈眼寺山城跡）が配された。
- (22) 三木の付城群の調査については調査のノウハウの検討や、三木城・付城の遺構把握を地道な資料の蓄積作業を継続したい。そして出来れば、三木城とその周辺の付城群を一連の遺跡という認識にたって、組織的に調査が行われるよう望みたい。
- (23) 但し、調査手法についてはある程度の見通しも持ったつもりである。選地の問題や城域の確認の仕方、調査の手順といったことは、事実報告以上に今回の調査の大きな成果である。なお本書では現場での思考錯誤やこういった事柄についても記述するよう努力した。
- (24) 例えば未成形地形の問題がある。付城の地表面観察では駐屯部が未成形の地形と観察されることが多い。幸い今回の加佐山城跡の調査ではこの地形部分にも防衛ラインを設けていたことが判明し、考古学的に調査を行えば解決がかかる例のあることを示した。一方、三島正之氏によれば（『塙尻市の山城－未成形空間を追って－』『中世城郭研究第8号』中世城郭研究会1994年刊による）、未成形遺構には大名権力が駐屯部として意図的に作ったものと、村人を収容するための施設の両者の可能性があるという。つまり、陣城以外の城郭においても未成形遺構は存在しており、未成形遺構はあらゆる城郭に少なからず認められるようである。今後の調査の課題といえよう。特に、付城の場合、狭く簡単な主郭しかもたない事例が多いため、こういった地形の調査は必要不可欠である。

図 版



図版 2

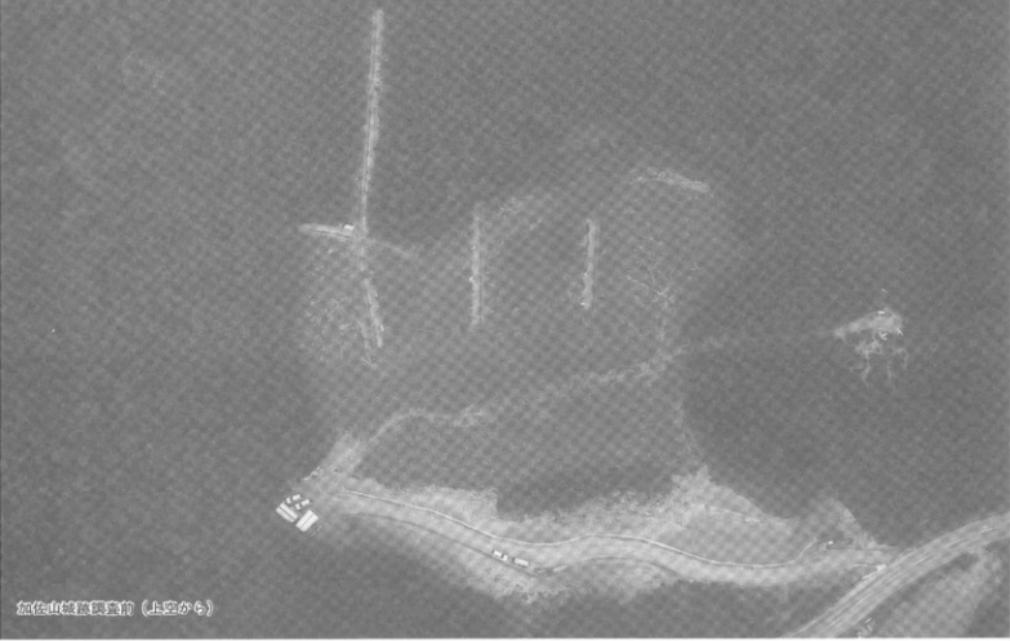




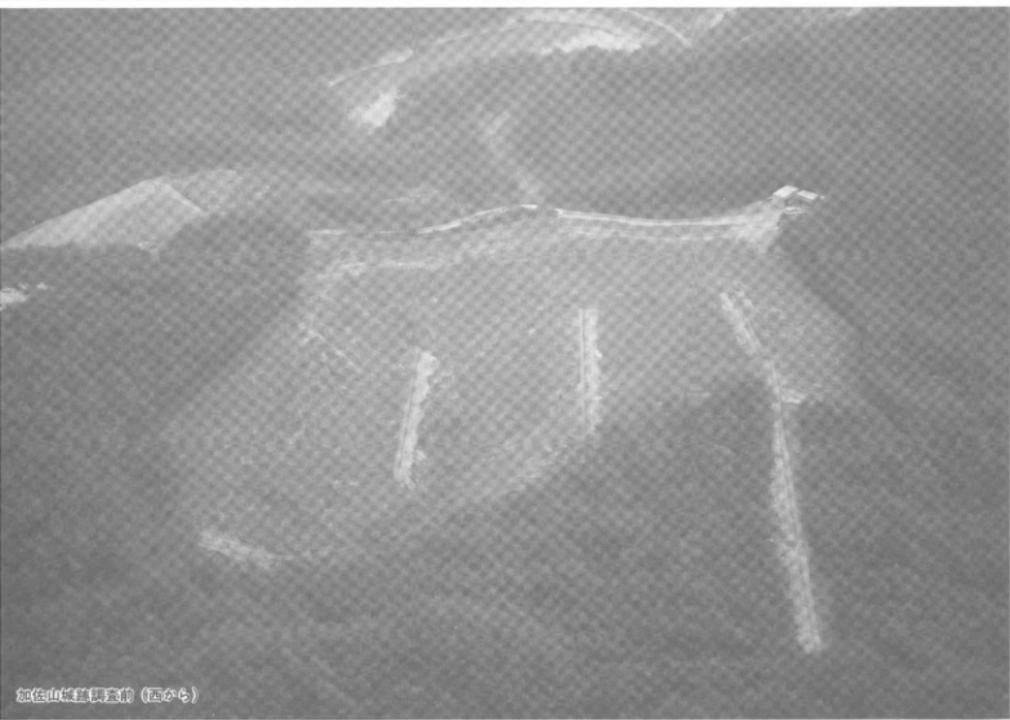
加佐山城跡・慈照寺山城跡遠景（西から）



加佐山城跡・慈照寺山城跡遠景（東から）



加佐山城跡開墾前（北から）



加佐山城跡開墾前（南から）







加佐山城跡全景(平成4年春)



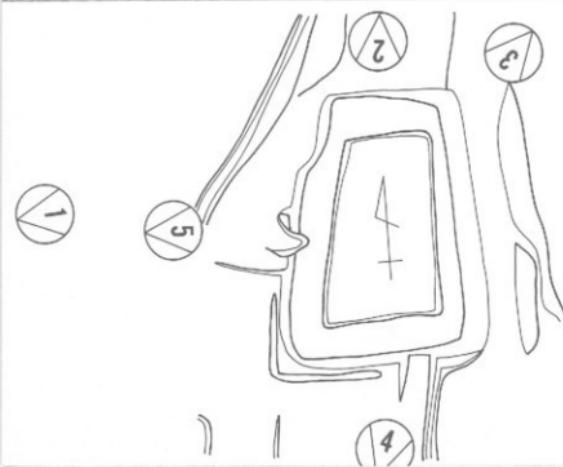
加佐山城跡全景(平成14年春)



1. 主曲輪（西から）

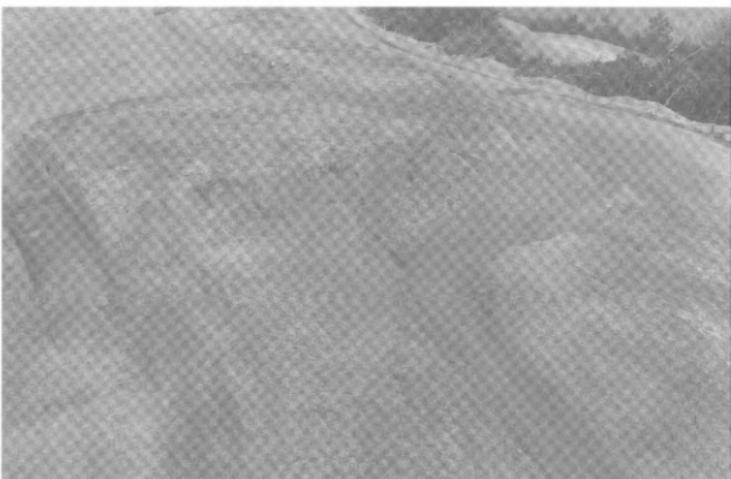


2. 主曲輪（北から）





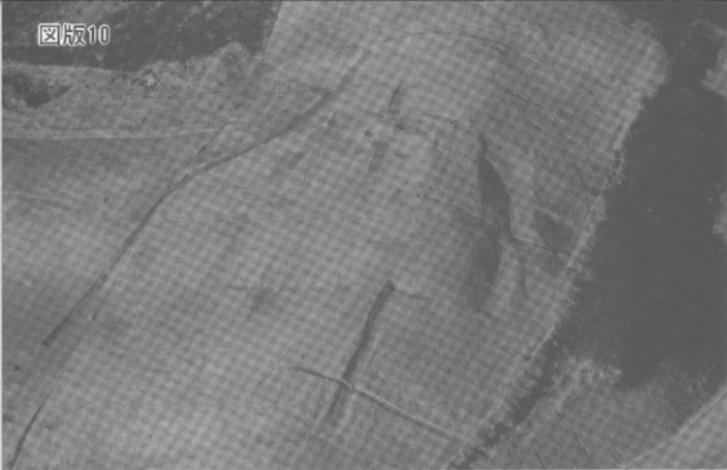
3. 主曲輪（東から）



4. 主曲輪・土壘
(南から)



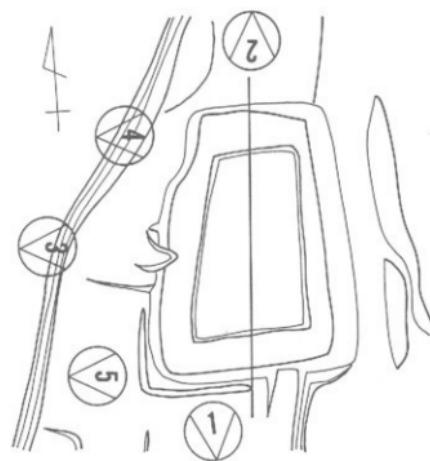
5. 主曲輪・虎口
(西から)



1. 主曲輪土壘撤去後
(南から)

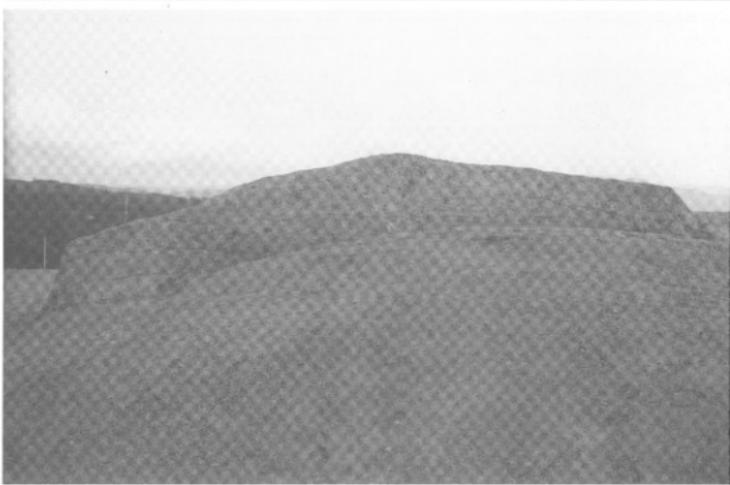


2. 主曲輪土壘撤去後
(北から)





3. 主曲輪土壘撤去後
虎口（西から）



4. 主曲輪土壘断面
(西から)



5. 主曲輪土壘断面
(西から)



1. 主曲輪土壘断面
(北から)



2. 主曲輪土壘断面
(南から)



3. 主曲輪土壘断面
(南から)



4. 主曲輪土壘断面
(北から)



5. 主曲輪土壘断面
(北から)





1. A曲輪（西から）



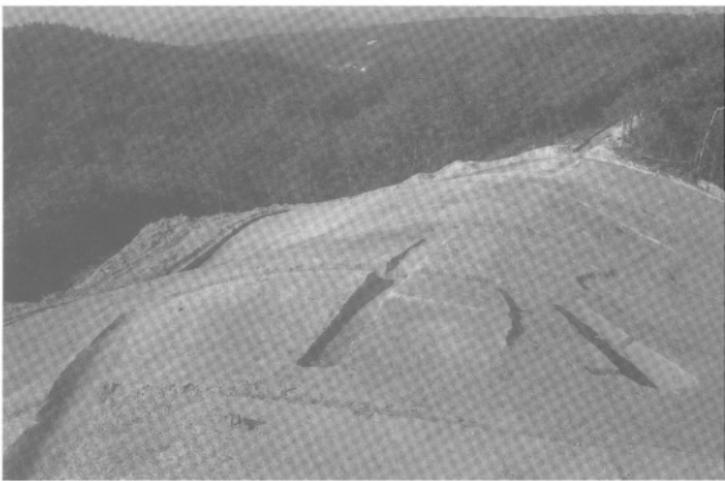
2. A曲輪（東から）



3. A曲輪（西から）



4. A曲輪・突出部
(東から)

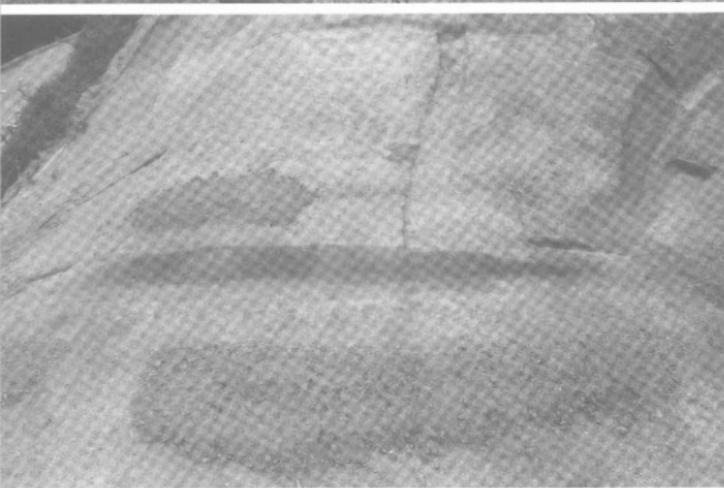


5. A曲輪・虎口
(東から)





1. 日曲輪（南から）



2. 日曲輪（北から）



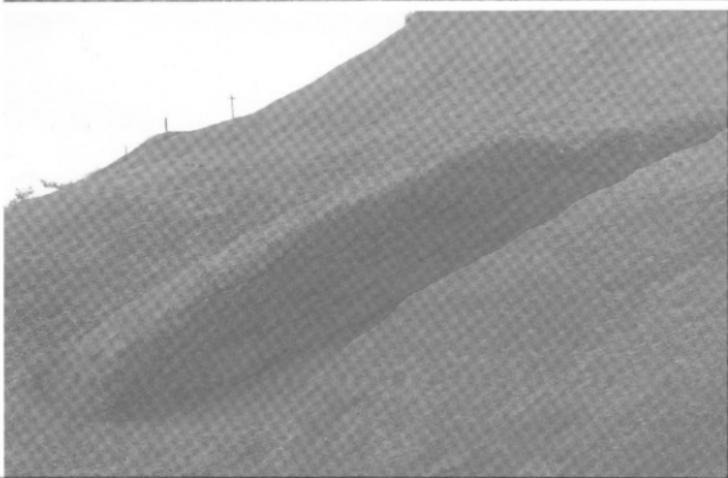
3. 腰曲輪（北から）



4. 腰曲輪（北から）

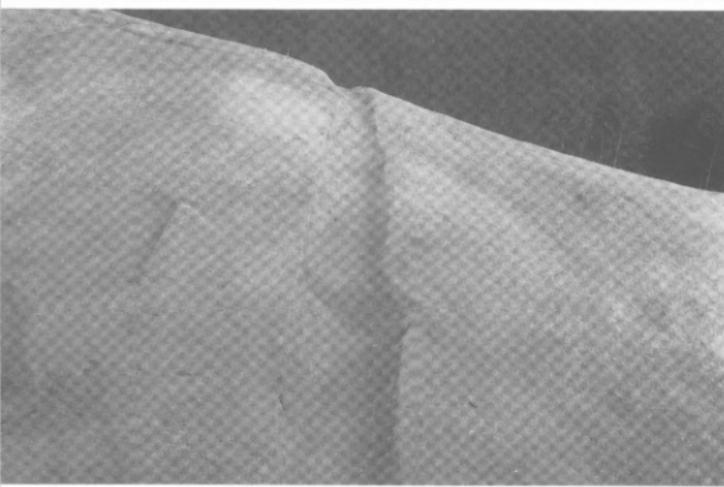


5. 腰曲輪盛土断面
(北から)





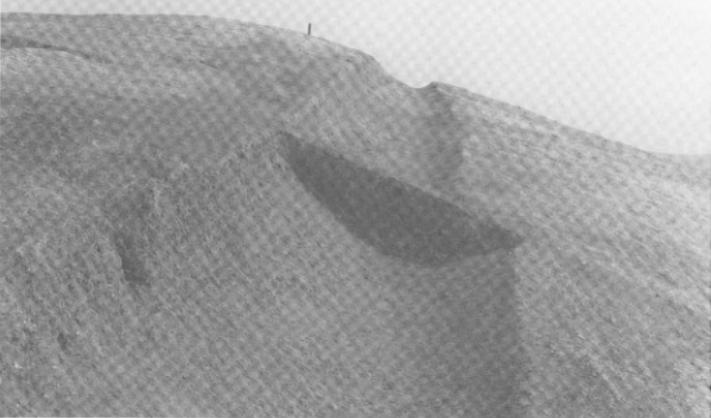
1. 西側横堀
(北から)



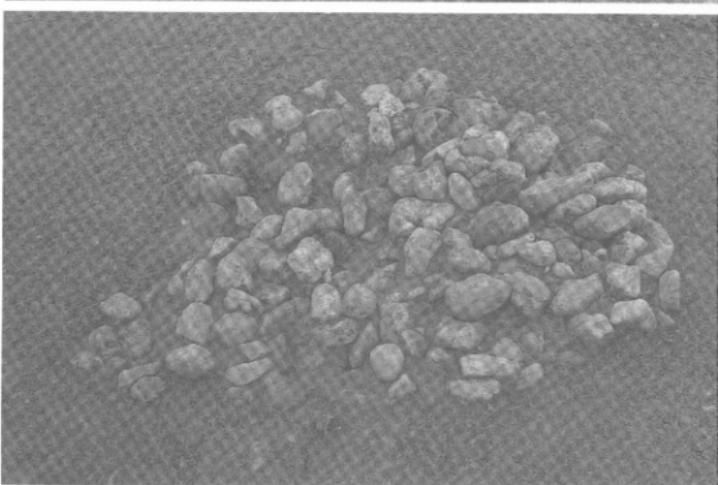
2. 南側横堀
(西から)



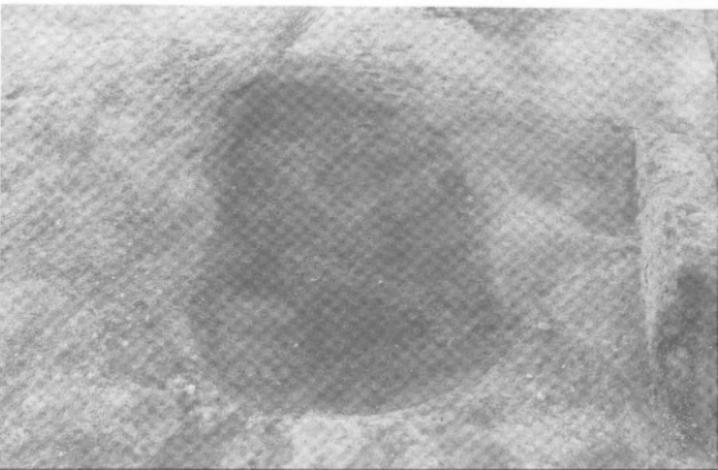
3. 横堀内堆積土
(西から)



4. 土壘下層 SK01

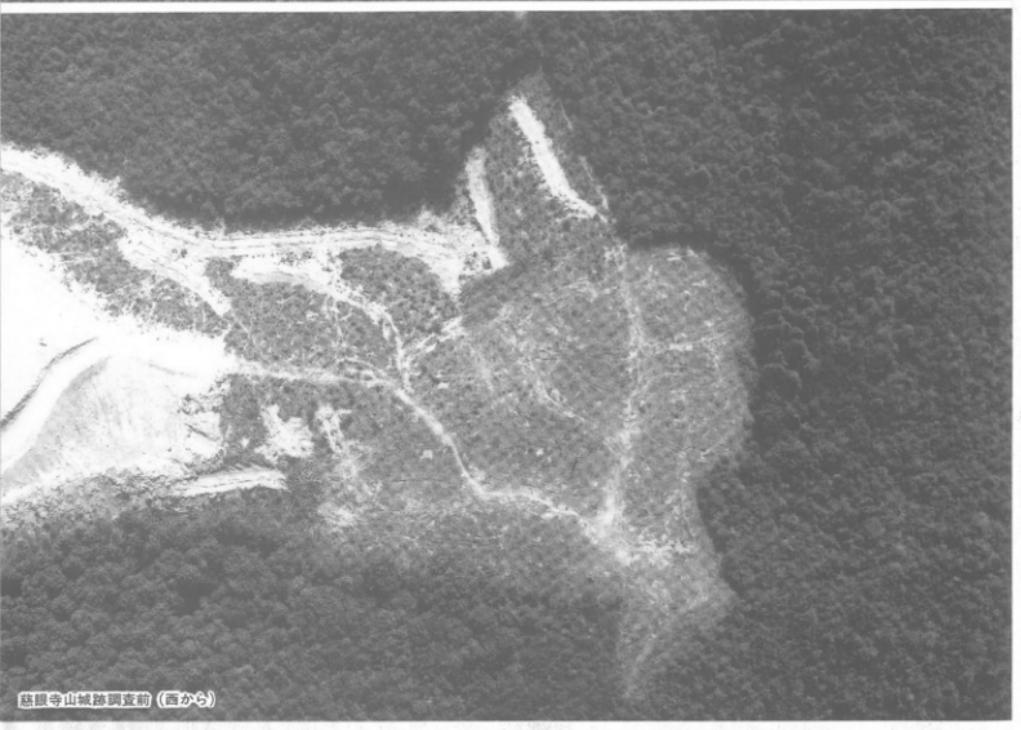


5. 土壘下層 SK02





慈眼寺山城跡調査前（上空から）

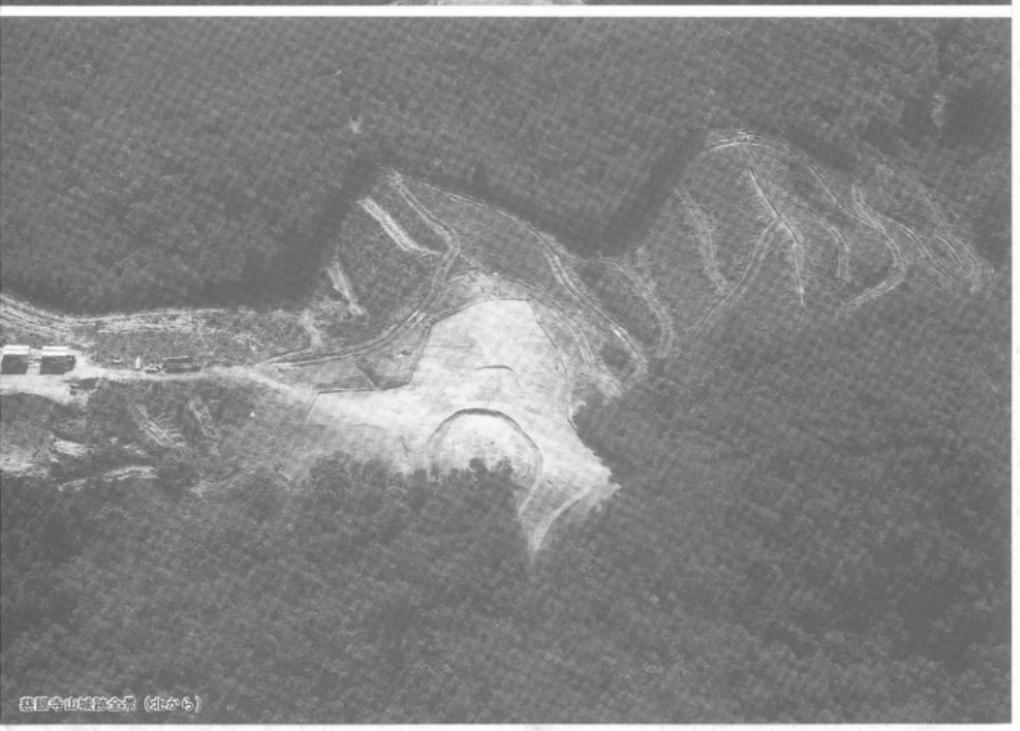


慈眼寺山城跡調査前（西から）

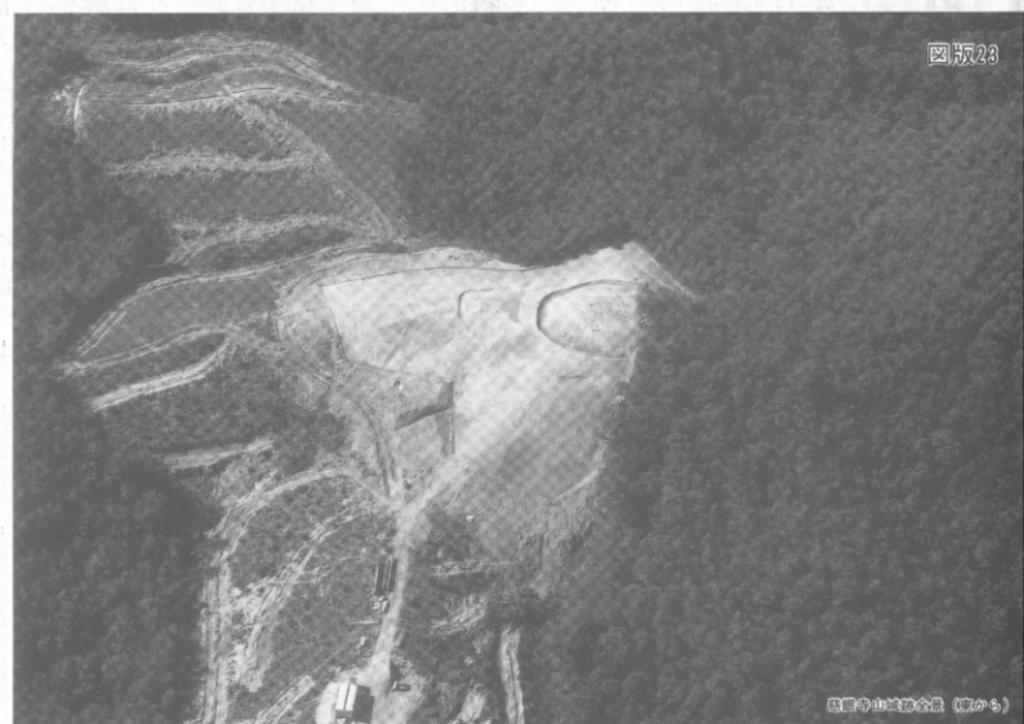




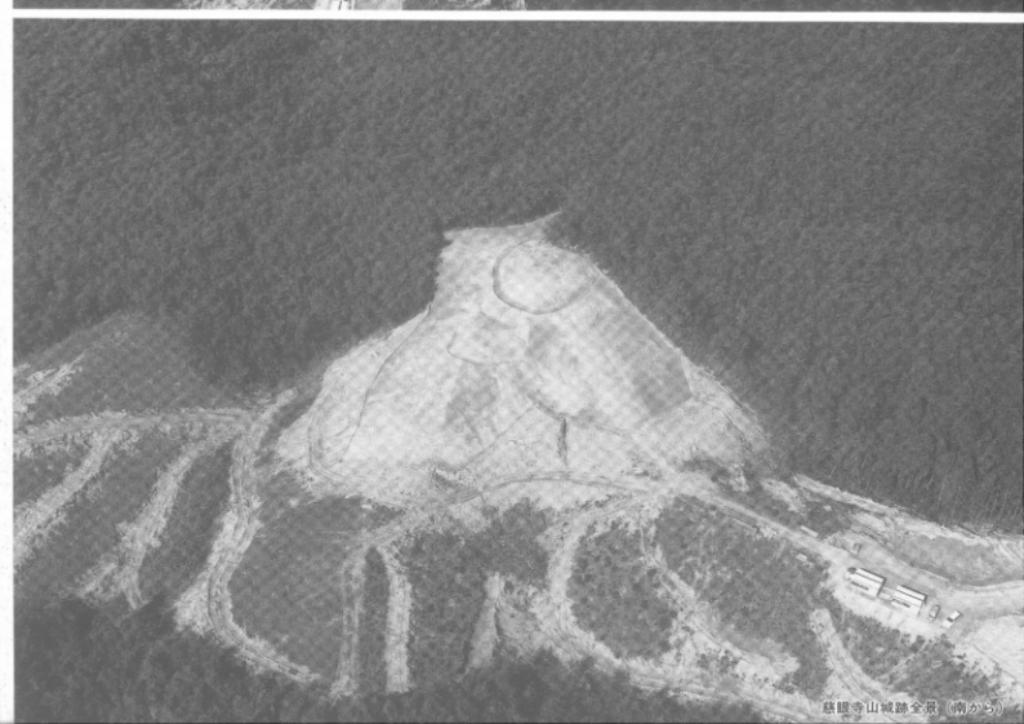
基黒寺山城跡全景（南から）



基黒寺山城跡全景（北から）



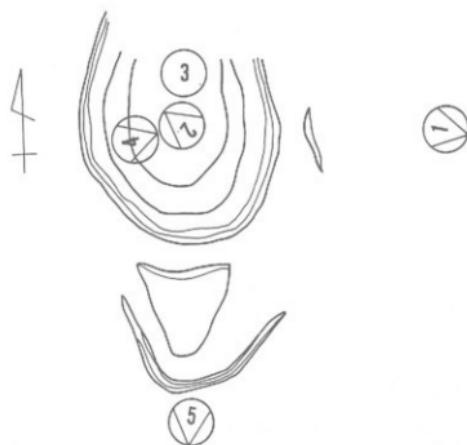
慈眼寺山城跡全景（北から）



慈眼寺山城跡全景（南から）



1. 調査前（東から）

2. 調査前（北から）
左の枯木が「一本松」



3. 主曲輪上・水神
(南から)



4. 主曲輪からの眺望
(南東方向)



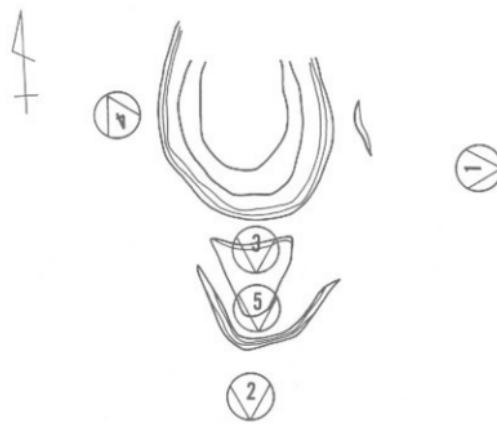
5. 遠景 (南から)



1. 全景（東から）



2. 全景（南から）



3. 主曲輪（南から）



4. 主曲輪（西から）



5. 主曲輪・南側曲輪
(南から)

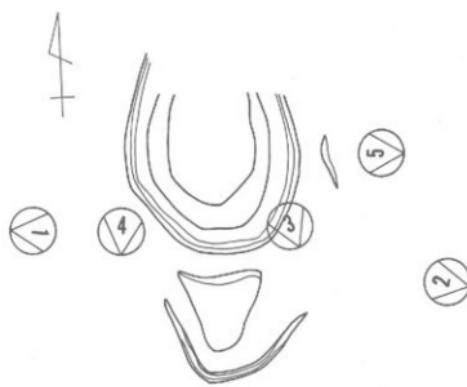




1. 主曲輪・南側曲輪
(西から)



2. 南側曲輪
(東から)



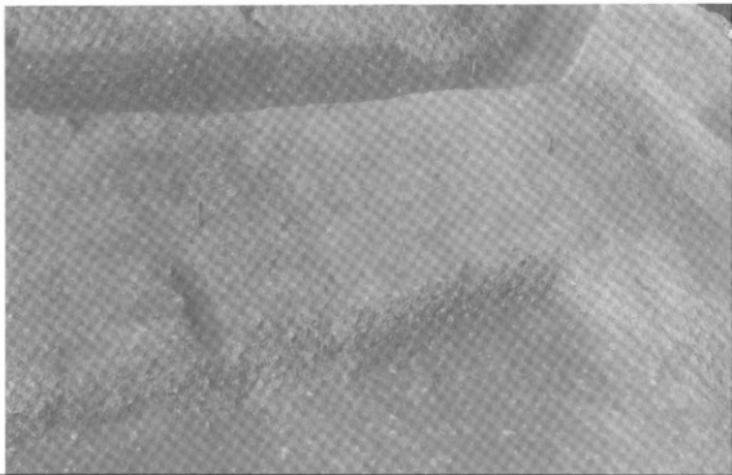
3. 主曲輪・横堀
(南から)



4. 主曲輪・横堀
(南から)

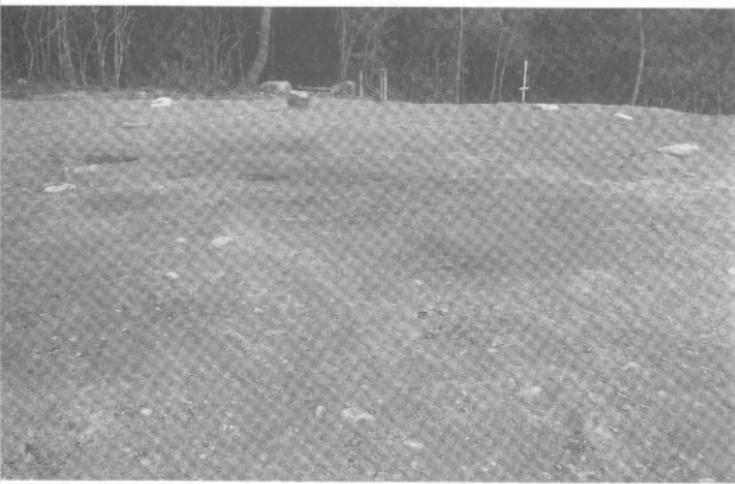


5. 横堀 (東から)





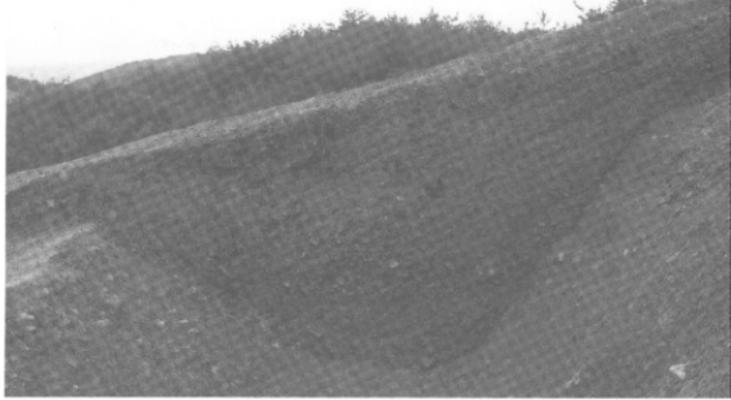
1. 主曲輪・礎石
(南から)



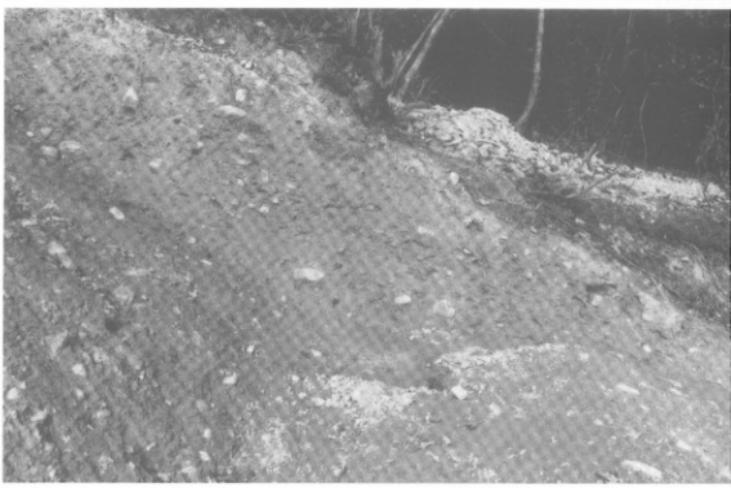
2. 主曲輪・礎石
(南から)



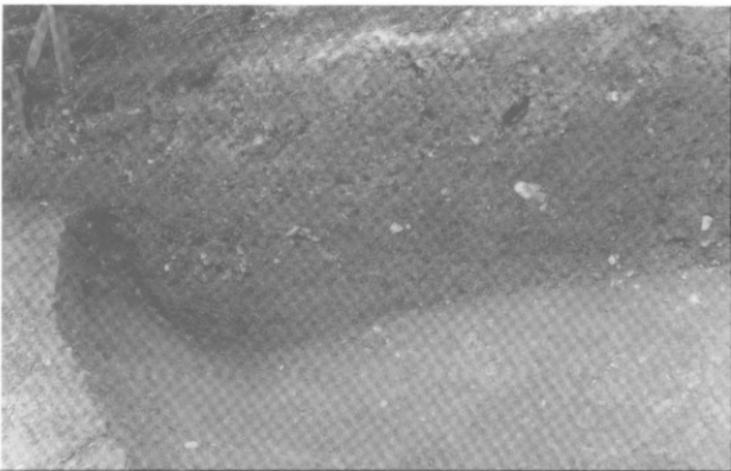
3. 横堀断面
(東から)



4. 横堀断面
(南から)



5. 横堀断面
(南から)





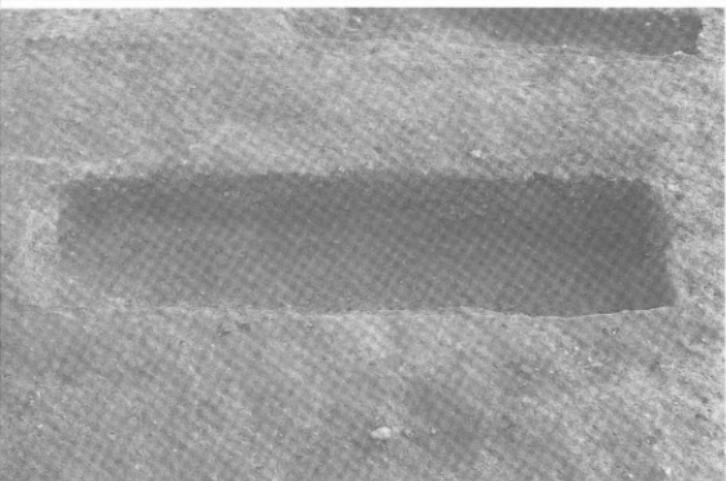
加佐古墳群調査前全景（西から）

加佐古墳群3・4号墳全景

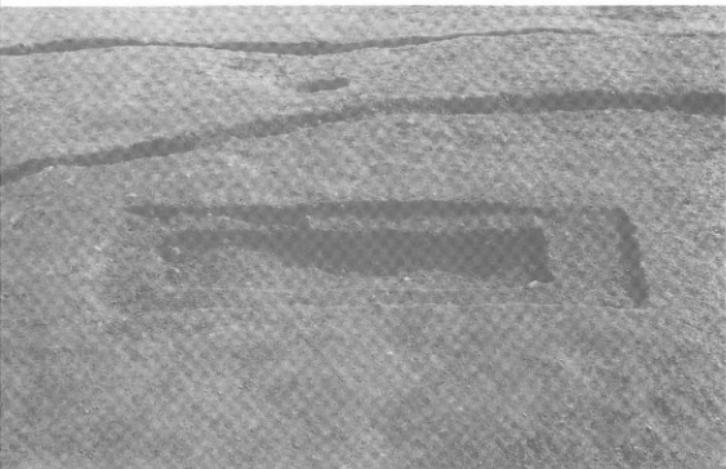




3号墳全景
(西から)



3号墳第1埋葬施設
(北から)



3号墳第2埋葬施設
(北から)

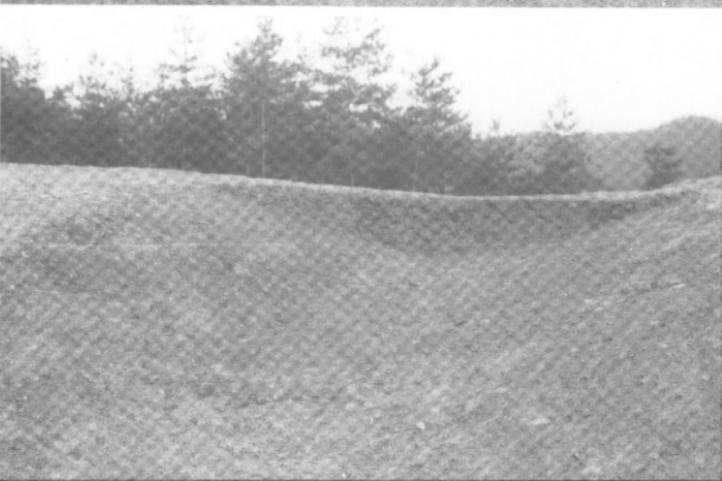
4号墳全景
(東から)



4号墳第1埋葬施設
(北から)



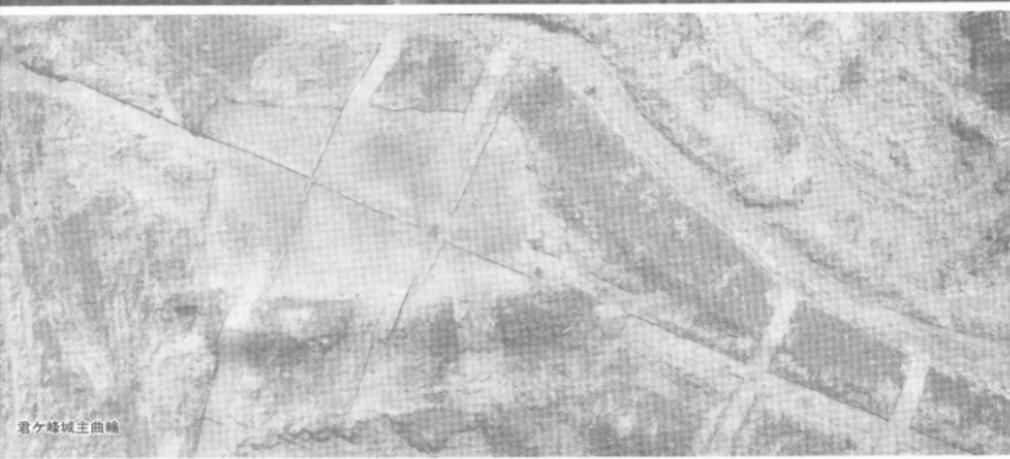
3・4号墳間溝
(北から)



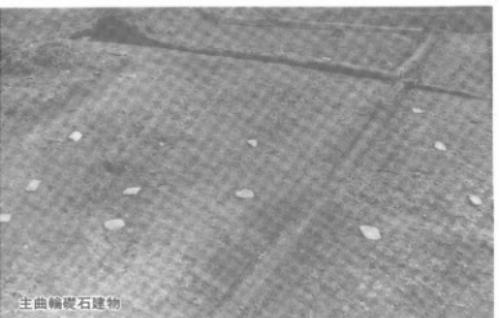
図版36



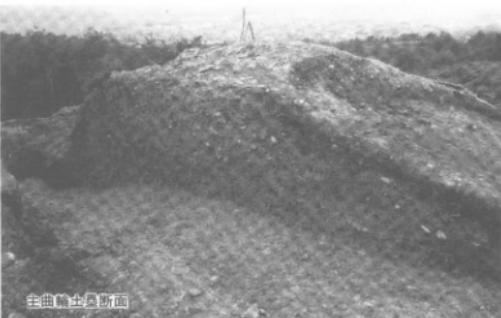
君ヶ峰城全景



君ヶ峰城主曲輪



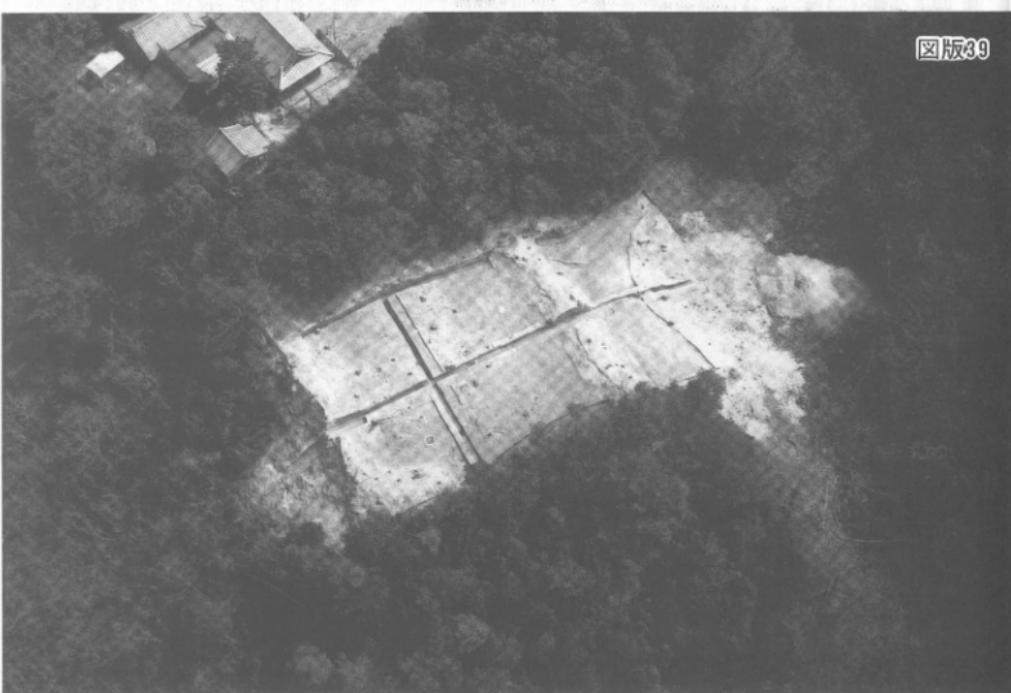
主曲輪裏石建物



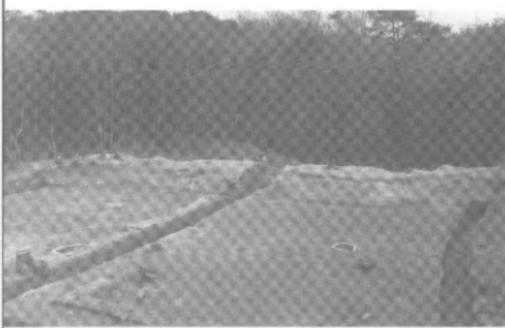
主曲輪土壘断面



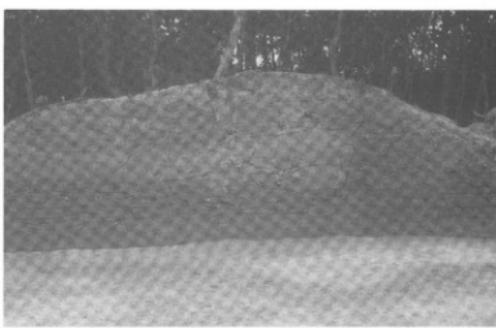




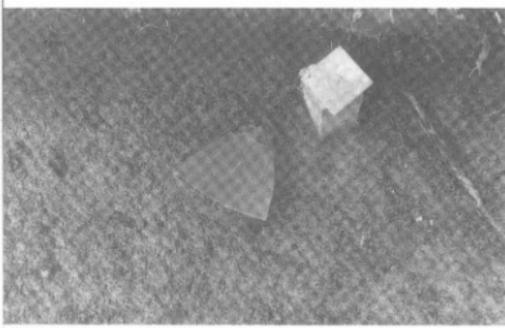
小林八幡神社遺跡調査区全景



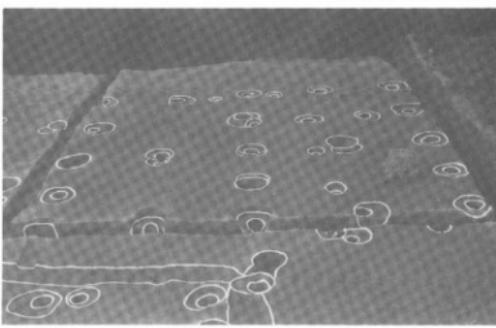
小林八幡神社遺跡主郭



小林八幡神社遺跡土壘



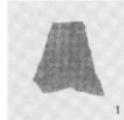
小林八幡神社遺跡遺物出土状況



小林八幡神社遺跡掘立柱建物跡

図版40

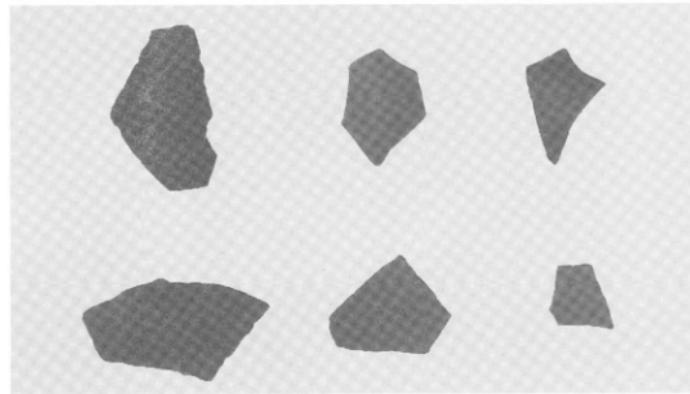
加佐山城跡出土遺物



石鎧

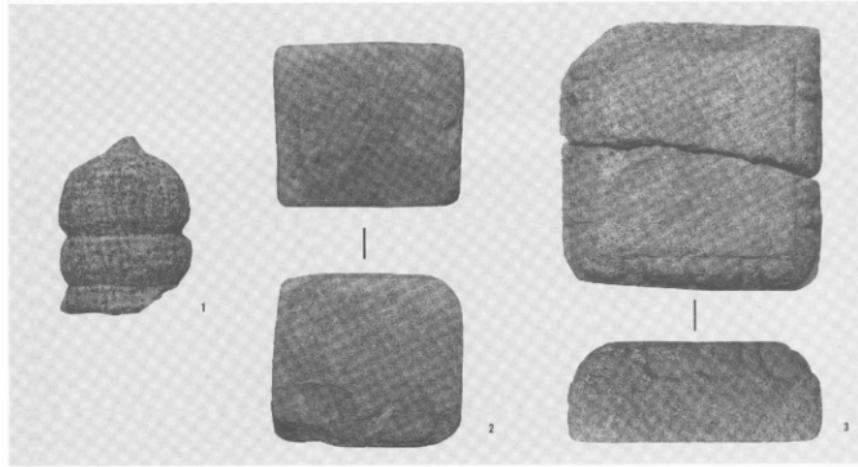


釘



須恵器

慈眼寺山城跡出土遺物

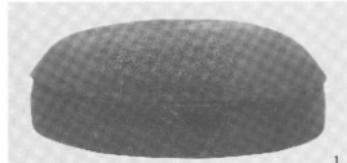


石製品

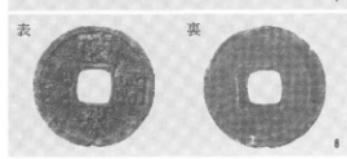
加佐古墳群出土遺物



4



1



表

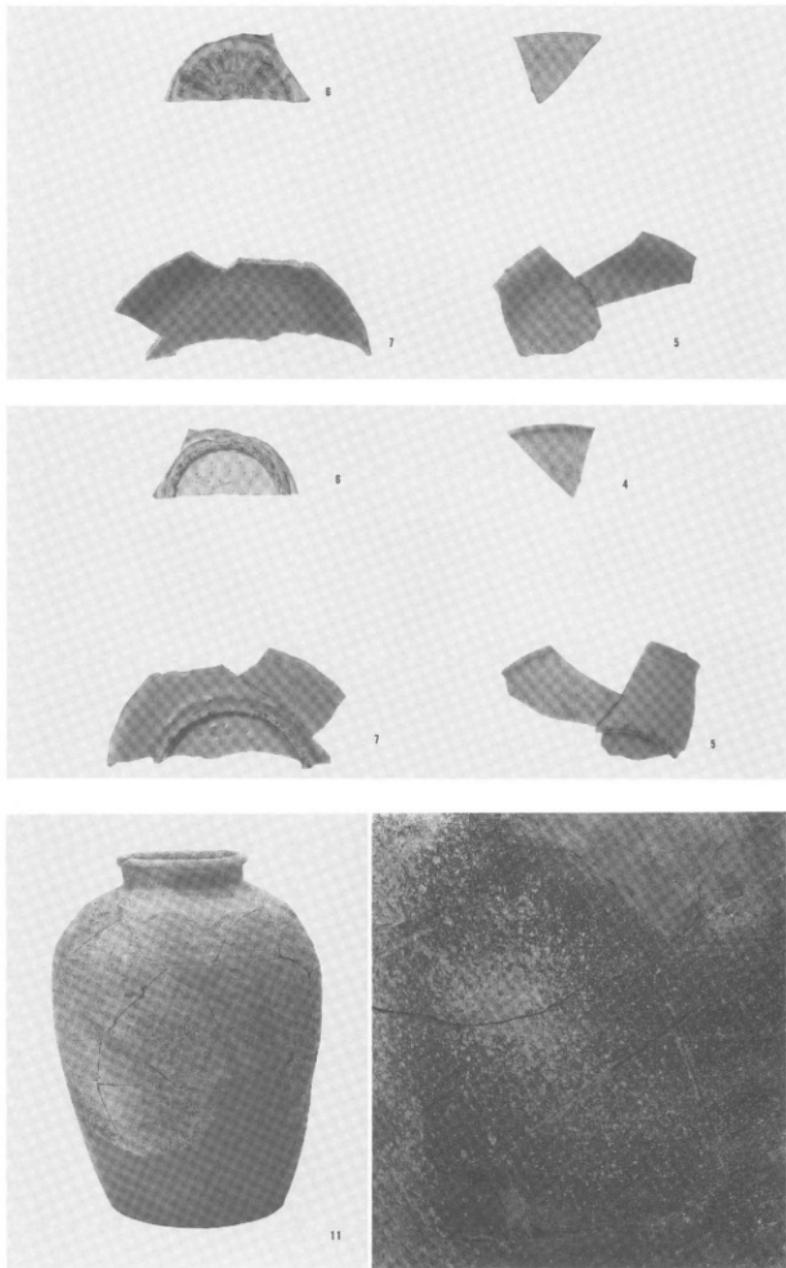
裏

6



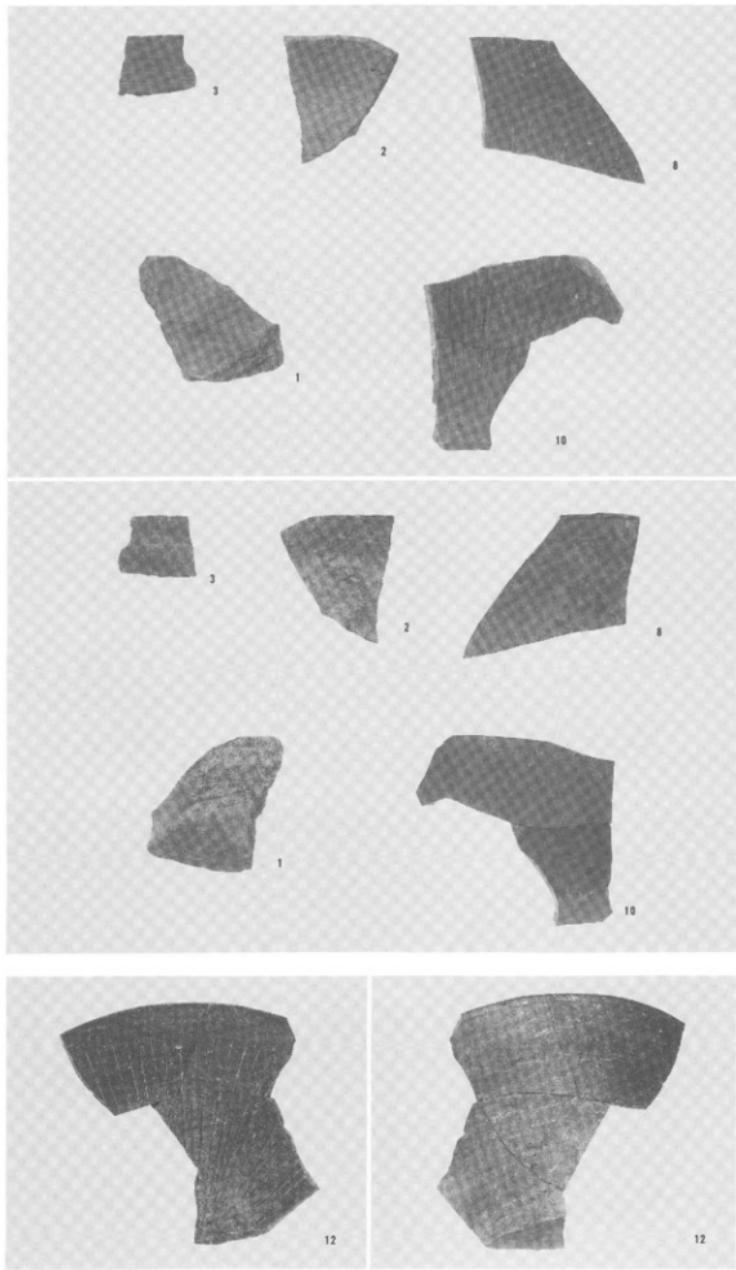
7

君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡出土遺物1



図版42

君ヶ峰城・小林八幡神社遺跡出土遺物 2



兵庫県文化財調査報告 第144冊

三木市

加佐山城跡・慈眼寺山城跡

—山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XVIII —

平成7年3月31日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2-1-5
TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5-10-1
TEL 078-341-7711

印刷 梶原出版印刷合資会社
〒657 神戸市灘区城ノ内通1-4-13
TEL 078-871-4731
